
サイハテの砦

楠木潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイハテの砦

【Nコード】

N5740V

【作者名】

楠木潤

【あらすじ】

狂人病。

後に、そう呼ばれた病が広がった。

空気感染率3割、だが血液感染率9割の恐ろしい病は、村に、街に、そして国に等しく蔓延していった。

ごく普通の高校生である今宮優は、

朝起きた瞬間、隣人から襲撃を受ける。

それは、人であったモノと生き延びた人間達の生き残りをかけたサ

バイバルの幕開けであつた。

プロローグ

P M 9・17

「誰がよえーってえ？」

公園に喧騒が響いている。

乱雑な叫びと高鳴るエンジン音が夜の静寂を打ち破る。

喧嘩だ。

特攻服に身を包んだ色とりどりの男たちが、戦いに明け暮れる。
午前一時を回ったところに始まったこの幼稚な戦いは、既に一方的なものになっていた。

倒れ伏す者達を殴りつける男たちは、しかし——その状況とは裏腹にどこか焦りが見える。

苛立ちを、睨みと乱雑な言葉によってかき消す様子は隠し事をしている子供のようなだった。

「もういっぺん言ってみろよ。おい、誰がたった一人に負けて、何も出来ない雑魚だって？」

「悪かった、もう勘弁してくれ」

「勘弁？ 最初に喧嘩売ってきたのはてめーだろうがよ。いまさら何寝ぼけた——」

「やめろ」

太い声が、言葉を遮った。

それは決して大きな声ではなかったが、一方的に蹂躪していた者たちを止めるには十分すぎる音量だったようで、その場にいた全員

が声の方を振り返る。

この喧騒の中で、唯一素知らぬふりでベンチに座っている男がいた。

座っていても、その大きさは目を見張るものがある。

広い肩幅と胸板が、闇の中でも男の大きさを主張させていた。

「浜崎さん。けどー」

「井上。俺はやめろと言ったが、聞こえなかったか？」

浜崎の呼ばれた男が静かに声を出せば、その言葉に反論する者はいない。

暴れ足りないばかりに、倒れ伏す男たちを睨みながら一人また一人と、男たちから離れていった。

「そいつらも、もう十分わかったろう。なあ？」

男の手の中で、硬質な金属音が鳴り響いた。

音源は折り畳まれる、コーヒーの缶だ。

掌にくるまれるように潰されるスチール缶を見ながら、倒れ伏す男たちは表情を青くさせた。

彼はこの喧騒に、一度として加わる事はなかった。

だが、それは決して彼が弱いからではなく。

「第一だ。負けたのは事実だろうよ、今更をそれを否定ところで結果が変わるわけでもねえ」

「は、浜崎さんっ！」

「最後まで聞けよ、井上。だが、それがどうした。それで、何か変わったか？」

ん——と、言葉を吐きながら浜崎はゆっくりと立ち上がった。

街灯に照らされ、巨大な影が差す。

緩やかに落とされた、潰されたスチール缶が地面に叩きつけられて小さな音を立てた。

「文句があるなら叩き潰せばいい。ただそれだけだろう？　俺たちは何も変わらねえ。それに」

と、言葉を紡いだ耳に、サイレンの音が響いた。

それは次第に大きくなり、浜崎は止めてあったバイクにまたがる。「時間切れだ。帰るぞ」

高鳴る音を響かせながら、慌てて続く男たちを引き連れ走り出した。

その音は高く——高く——。

P M 9:23

サイレンの音が大きくなり、対象的にバイクの轟音が遠ざかる。

その音は近づくパトカーを挑発するようにも、あるいは街に自らの存在を誇示するようにも聞こえた。

もっとも。周囲の人間からすれば、不快でしかない。

須藤康平は、手にしたシャープペンを置くと——開いていた窓を閉めた。

夏の風と共に騒音も閉じられ、そこで小さく息を吐いた。

視線はノート。細かく几帳面に書き連ねた英単語だ。

有名国立大学の過去問集が開かれ、整頓された室内にはそれ以外の娯楽品は一切ない。

デジタル式の時計を見れば、時刻は一時を回っていた。少し集中し過ぎたかと、ノートと問題集を閉じていく。

P r r r r ……。

その耳に機械的な音が響いた。

携帯電話だ。

黒一色のシンプルな塗装のそれが、小刻みに震えながら着信音を響かせている。

席の問題集を丁寧に本棚におさめながら、須藤は慌てずに通話ボタンを押した。

「須藤だ。ああ、その件か……」

冷静に話される声は、眼鏡の奥に見せる瞳同様に何ら感情を表に出さない。

むしろ、聞こえる声の方がどこか焦りを持ちながら、静かな室内に響いていた。

「その件については学校側にも話は通している。いまさら停学自体は取り消せないが、ほんの一週間だけだし、進級にも問題はないよう配慮するとのことだ。ああ、何——気にするな。今回の件については、彼が全面的に悪いとは僕も思えない。やりすぎである事は確かなのだけれど。ああ、それじゃ明日学校で」

呟きを終わると、須藤は切断のボタンに指を伸ばす。

眼鏡の下からゆっくりと指で、瞳を眉間を押さえ——上げる視線は、唯一室内に飾られた写真だ。

大高東高等学校 第22代生徒会

そう書かれた文字と共に須藤を中心とした数名の写真が並んでいる。

表情がないと。

写真を現像した時に言われた感想を思い出し、小さく苦笑。

布団の上に携帯を投げると、静かに室内の扉を開けた。

P M 9…30

「うん、わかった。明日もよろしくお願いし……」

途切れた通話音に、二見明日香は小さく苦笑した。

相変わらずだなあと――小さく呟きながら笑いを深め、明日香は腰をおろしていたベッドに沈みこんだ。

ピンクを基調とした可愛らしい部屋作りだ。

水玉をあしらった清潔なシーツに、同色の布団カバー。

ベッドの上には、キャラクターのついた目覚まし時計と同じキャラクターのぬいぐるみが鎮座している。

もともと女性の部屋としては異色な事に、ホラー系のキャラクターであって、控えめに見ても可愛いとはいえなかったが。

風呂上がりだったのだろう。

水気の残る髪を、バスタオルで拭きながら明日香は携帯電話を覗き見た。

バックライトが切れた携帯電話に映るのは、幼い顔立ちをした少女だ。

垂れ下がる大きな目と、逆に緩やかにあがる唇。

整えられた髪の毛先は、子供っぽいと友人の友香にからかわれた事を思い出し、拗ねたように唇を尖らせた。

「大丈夫かな」

疑問を含んだ声は、先ほどの電話の一件だ。

自分を守るために、停学になってしまったクラスメート。

それが原因で留年ともなれば、きっと心は罪悪感で押しつぶされてしまっただろう。

完璧には救う事が出来なかったのが心残りではあるが、それでも生徒会長である須藤康平も全面的に協力してくれると言ってくれている。

教師からも信頼の厚い彼の事だ、決して悪い事にはならないだろう。

「良かったんだよね」

と、明日香はパジャマの上から胸を押さえ、もう一度呟いた。彼女の問いに答える言葉はない。

ただ自らのために、一人の同級生の人生を変えてしまった。その青年を顔を思い返せば、心臓が馬鹿みたいに波打った。痛いと思う。

けれど、おかしなことに決して嫌な痛さではなかった。

「何してるかな……」

ふと呟いた言葉と共に、窓から差し込む月を見た。満月だ。

きっと同じように、彼もまた。

そう考えた刹那、バイクの音が鳴り響いた。

「わ、わっと！」

驚いたようにカーテンを閉め、いまだ高鳴る胸を押さえながら、明日香は布団の中にもぐり込んだ。

きっと彼もこの月を見ているのだろうか。

「おやすみ……今宮くん」

P M 9 : 47

月明かりが照らす公道を、二人乗りのバイクが走っていた。

その顔には真新しい傷と痣があり、苛立ちがありありと見えた。
「ぜってえ、ゆるさねえ」

吐き捨てるように呟いた声は、後方にまたがる少年のものだ。
奥歯を噛み締めながら叫び、殴られた頬を撫でる。

だから、少年がそれを発見した時に、少年は深く考えずに苛立ち
の解消にちょうどいい獲物がいたと思った。

「おい」

「あ？」

呟けば、先頭で運転していた少年は疑問の声を出した。
あれだよと――少年が指し示すその先に、男がいた。

歩道脇を歩きながら、実に不用心な事に黒いトートバックを肩に
下げる男だ。

おまけに、そのトートバックは道路側に持っており、少年からす
れば盗んでくださいと言っているようなものだった。

このまますごすごと家に帰るのは面白くない。

その考えは、先頭の少年にも伝わったようだった。

「しくじんなよ？」

「誰に言ってるんだよ」

返答はなく、先頭の男がアクセルを強く握りしめる。

二人の乗ったバイクは、エンジン音を更に高くしながら公道を疾
走した。

男は気づいていない。

夜のこの時間に目撃者はいない。

楽勝だと。

後方の少年が、身体を横にずらしながら手を伸ばした。
掴んだ。

トートバックの端を握りしめ、焦る男の顔を見ようとすれ違い様に、少年は振り返る。

その酷くゆっくりとした光景の中で、男が確かに少年の顔を見たのがわかった。

乱雑に毛先を切った少年。

年のころは、バイクにまたがる少年たちと同じ——高校生くらいだろう。

この咄嗟の出来ごとに、少年の表情に浮かぶのは焦りでも、驚きでもない。

ただ、単に面倒くさいなという——どこか諦めにも似た感情だ。しかし、その手は表情とは裏腹にトートバックの取っ手を掴んでおり、一瞬の後に——ひったくりの少年は空を飛んだ。

彼自身、宙を舞い、道路に叩きつけられてもなお、その現実を理解する事は出来ないでいた。

戸惑いと痛みで顔をしかめ、道路を転がる。

結果的には二人の手がトートバックの取っ手を掴み、力のある方に引き寄せられただけの事なのだが。普通バイクの加速と競争すれば負けるのは歩く人のはずであり、最悪引きずられて大怪我を負う事になったのは、歩く少年のはずである。

バックが取られると同時に、取っ手を掴みなおして投げるなどという動きを、少年に想像ができるわけがなかった。

「あがが……」

車道上で背中を押さえながら、痛みと理不尽にもだえる少年の前で、バイクが急ブレーキをかけながら停車する。

「て、てめ」

その少年も咄嗟の事態に、それだけしか口に出来ない。
ただ。

目の前の少年だけが、何事もなかったかの様にトートバックの取っ手をしげしげと見ていた。

「安売りで買ったけど、意外と丈夫だな」

どこか嬉しげな口調が、馬鹿にされているようで少年を苛立たせた。

怒りが、この不可思議な現象を記憶の隅に追いやり、バイクを止めた少年が近づく。

月明かりのもとで、次第にはつきりする少年の顔立ち。

それに。

「い、今宮……！」

少年は怒りの言葉ではなく、驚きと絶望の言葉を持って、彼の名前を呼んだ。

P M 10:03

呆然とした言葉に、今宮優はトートバックから視線を外した。

何で、こいつは俺の名前を知っているんだろう。

疑問を浮かべるが、目の前の少年はひっと短い声をあげて後ろに下がるだけで、答えてはくれなかった。

もちろん、優自身に泥棒の知り合いがいなければ、怯えられる記憶もない。

うつすらとした月明かりの下で、怯える少年にも――そして、道路に叩きつけられて、いまだに転がる少年にも見覚えはなかった。
少なくとも同じ学校に通う生徒ではない。

「や、やべえ。逃げるぞ——ほらっ！」

少年がいまだ転がる男を慌てて立たせていた。

その慌てぶりは、まるで化け物にでも出会ったかの如く。

立たされた少年もまた気づいたのであろう。今宮の顔を見ると悲鳴に近い言葉をあげながら這いずってバイクへと戻った。

「ちょっと、失礼だろう？」

さすがにひったくりされそうになった上に、この仕打ちはあんまりじゃないかと思う。

けれど、言葉をかわそうと一步足を踏み出せば、二人はバイクすら置いて、脱兎のごとく走り出していた。

「何なんだよ、おい」

ただただ、残された今宮は怒りを誰にもぶつける事も出来ず、ゆるく息を吐いた。

それは彼らにとって、日常の一ページ。

けれど、それが日常の最後であったと。

この時、誰も知る者はいなかった。

発症

最初に――その病が発生した時は、週刊誌のページを騒がせただけであった。

それは多くのゴシップ記事に埋もれ、記憶に残した者は少なかった。

次に、それはスポーツ新聞に取り上げられ、海外のニュースで報道される事になった。

それでも多くの人にとっては、それは遠い国の出来事であって、大変だと言う認識はあったとしても、どこか他人事であったのだろう。

それが、潜伏期間二週間の伝染病だと気づいた時。

全ては遅かった。

クラウレンクラッシュブレイン症候群。

その病につけられた正式名称は、誰も覚えていない。

それが発症した地方の名前であったのか、あるいは発見した学者の名前であるのか。

クという字がやけに多いなという印象を持つ名前。

もはや、誰もその名前で呼ぶ事はない。

ただ、その症状と恐れを持って、狂人病と。

そう呼ばれた。

＊ ＊ ＊

大高東高等学校。

周囲に商店街の姿がないため、外の騒々しい声もここまでは伝わってこない。

そのため、休憩時間はともかくとして授業の時間ともなれば、嘘のように静まり、別空間のようになっている。

だが、午後一時半を回り、周囲はやけに騒々しい。

本来であれば授業時間になっているはずであったが、校舎からは大小様々な学生の姿が現れていた。

不安と喜びが混じり合い、口にのぼる言葉からその原因が特定できた。

狂人病。

この突然発生した病が、ついに日本でも確認された。

それまではほぼ他人事であった事態に、特に大人たちは大きく反応した。

いや他人事であったからこそ、大きく反応する事になったのかもしれない。

空港では入国審査が強化され、わずかでも熱があれば病院に隔離された。

潜伏期間二週間と言う長さに、今更だという声もあがったが、それは多くの声に無視をされた。

危険だと声高に叫ぶ声よりも、人々が一時の安心を求めたからだ。

空港は封鎖されている。

だから、入ってくる事はないと。

そして、学校でも。

「いやー。学級閉鎖とか。ね、この後カラオケ行こうよ」

「いいね！」

笑い声が響いた。

もつとも、この事態に過敏に反応したのは多くは大人達だけであつた。

生徒たちは突然降ってわいた休みに、不安よりも喜びの方が大きいようだ。

一部の生徒は、それでも不安げな表情を隠せなかったが、周囲の明るさに負けるようにその表情に笑みを戻していった。

「休みじゃないですよ。ちゃんと宿題を――」

「わかってますって、青野せんせっ」

窘める教師に、笑顔で返す言葉に、まだ若い教師も諦め顔だった。歳を経た教師であれば、小言や上手い返しも出来るのであろうが、ただ青野と呼ばれた教師は肩をすくめ、苦笑するだけだ。

それは、彼らに歳が近い事も影響したのかもしれない。

自分の学生時代を思い出して、台風や学級閉鎖が起きた時を考えれば、生徒たちの気持ちは容易に想像ができた。

諦め気味にため息を吐いた、その空気が一変した。

その理由はすぐにわかった。

周囲のざわめきがかき消えたのだ。

楽しげに、あるいは不安げに狂人病の事を語る生徒達が口々に話をやめている。

視線を追えば、そこに一人の生徒がいた。

特に特徴のない生徒だった。

身長百七十センチは、高校生にしては少し大きい方であろう。

もっともそれ以上に大きい生徒は多いし、決して体つきがしゃっきりしているわけでもない。疲れたように歩き出す姿からは、とても

高校生らしい若々しさというものはなかった。

どこか大人びている。それも悪い——まるで社会に疲れたような会社員だ。

黒色のトートバックを肩に下げ、歩く姿を周囲の生徒たちはただ黙って視線で追った。

けれど、視線を向ける彼らも、その少年に視線を向けられると慌てたように視線をそらした。

今宮優。

悪い意味で、有名な生徒であつた。

不良と言うわけではない。

毎日学校に来るし、課題も宿題も忘れてきた事はない。

そこだけ見れば模範生徒と言っても良いだろう。

だが、容赦がない。

曰く。

暴走族を一人で壊滅させたらしい。

気に行った女性がいたら、すぐに手を出すらしい。

やくざとも付き合いがあるらしい。

らしいと、それは多くの推測に過ぎなかったが、簡単に思いついただけで多くの噂が頭にのぼった。

それは噂ばかりでどこにも信憑性はなかったが、停学明けという現在であれば、それが事実だと誤認するには十分すぎる。

もちろんそれが、噂でしかないのは教師である青野琴葉は良く知っている。

停学の件であっても、女生徒に危害を加えそうになった不良学生と喧嘩した事によるものである。

もつとも、それで十人ばかりを病院に送ったのは、十分にやり過ぎであるが。

だから、声をかけようとして――けれど、そのような生徒をどう扱って良いか、戸惑った結果。彼は黙って、青野の前を通り過ぎて、校門に近づいていた。

その校門に、彼を迎えるかのように一台の車が止まった。
黒塗りのベンツだ。

Ψ Ψ Ψ

車から顔を覗かせたのは、とても堅気ではない男だった。
髪を短くし、眼鏡をかけた無精ひげの男だ。

少なくとも、一緒に街を歩きたくはない。むしろ、夜道であったならば、慌ててコンビニに駆け込むだろう――そんな容貌をした四十代の男性だ。

それが今宮優の姿を見るなり、にっと笑い声をあけて。

「今日はもう終わりなんだろ。乗ってけよ」

と、後部座席を指さしている。

拉致られるとかそんな雰囲気ではなく、むしろ。

やくざとも付き合いがあるらしい。

そんな噂を頭に入れて、青野はかけかけた言葉をとめた。

優は親しげに男性に声をかけ、後部座席を開けている。

「やっぱやくざのお知り合いつていうか――あれだよ、もうやくざなんじゃね」

口さがない学生が、聞こえない事を良い事に噂話を口にした。のぼらせた。

決して、褒められた言動ではなかったが、青野自身はその言葉に

否定はできない。

「この前の件だって。何であんな奴がもう学校にきてんの？」
「一生こなくていいっていうか。退学にしろよって話だね」

その毒舌は留まる事を知らず、噂話と言うよりもむしろ悪口と言っているものだろう。

不快感を感じながらも、青野は止める言葉すらも失っていた。

「って、ちょっと明日香！」

「今宮くん！」

叫んだ声が、レンガ敷きの校庭に響いた。

それは当然のように、優自身も気づき、扉を開けたままで振り返っている。

二見明日香。

黒色の髪を几帳面にまとめ、ドクロ型のバレッタで右に分けている。

幼い顔をした少女だった。

急いで来たのだろう、息を切らせながら——声を出した後、息を整わせている。

生徒会の副会長を務める彼女が何故と考えたところで、その理由が思いついたのは青野一人だけであった。

助けられた生徒。

それこそが、彼女であったからだ。

むろん、それは彼女の名誉を守るために誰にも語られていないことである。

口さがない学生たちの噂話だ。

もし、彼女が助けられたという事になれば、下手をすれば襲われたという噂話になるかもしれない。だからこそ、その件については誰にも漏れる事無いように厳重に管理していた。

誰にも言わないようにと。

だが、彼女は――彼女自身が、大きく声をあげてそれを伝えようとしていた。

「あ、あのね。あの――」

「礼だろ？ もう受け取った」

それ以上は言うなとばかりに、優が手を振る。

驚いたように、明日香は目を開く。

その表情に浮かぶのは申し訳ない思いが一杯で――。

「気にするな。なんだ、あいつらは元から気に食わなかった」

その様子を苦笑を浮かべながら、優は車に乗り込んだ。

運転席のやくざに声をかけて、発進する。

その様子を視線で送れば、怒ったように後ろから現れる友人の姿があつた。

「ちょっと明日香。いきなり何してんのよ」

「そうだよ。声かけるのはまずいって」

息を切らせている事から、彼女を追って走ってきていたのだろう。少し怒ったように、窘めるような口調だった。

「知ってんでしょ。あいつやくざだって、今日だって迎えにきてたしさー。売られちゃうよ？」

「違うよ。そんなことない、だって誰も今宮君の家に行ったことないじゃない？」

強い否定の言葉だった。

「はー、あんたは思いこんだら、相変わらずなんだから」

そのしつかりとした視線に、友人は頭に手を置いて大きなため息を吐いた。

「第一、あんただって今宮の家に行ったことないでしょうが」

「う、それはそうだけど……」

「何があつたか知らないけどさ。関わらない方がいいって——あなたのホラー好きには困ったもんだ」

「そうそう、いくら好きだったてもリアルなホラー求めなくてもいいでしょうに」

「わ、私の趣味とは関係ないでしょっ！」

怒ったように、明日香が頬を膨らませた。
それに二人の笑い声が重なった。

Ψ Ψ Ψ

「相変わらずだなあ、あの学校は」

「まあ——少しは静かになったほうかな」
バックミラーが校門を映し出していく。

苦笑を浮かべる優に、運転席の男は皮肉気に唇を持ちあげた。

「静かにしたの間違いだろ。また喧嘩したらしいじゃねえか」

「耳が早いね」

「それが、仕事だからな」

ハンドルを握りしめながら——叔父である今宮栄治は口を開いた。
器用に片手でハンドルを操りながら、胸ポケットのワイシャツから煙草を取り出すと一本口にくわえる。その手が火を探して、再び胸ポケットをまさぐった。

「何度も言ってるだろ。暴力は——」

「良くない。何度も聞いたよ。こっちも好きで喧嘩をしているわけじゃない。ただ」

「喧嘩が向こうから歩いてくるってか。それも、何度も聞いたなあ」

互いに言葉を奪いあいながら、栄治は小さく笑い声をあげる。

口元でぴよこぴよこと煙草が上下し、やがて探り当てたオイルライターが手元で音を立てた。

紫煙があがる気配と共に、優が窓を開ける。

初春のまだ肌寒い空気が室内を満たした。

「一緒だよ、一緒だ」

栄治が呟いた。

開いた窓から外を覗いていた優が、栄治を振り返った。

やくざと間違えられる容貌が、鋭い視線を運転席から外へ向けている。

「結局、お前もそこらの餓鬼と変わらねえ。ただ、理由を探して――暴れてえだけだ。それが『社会への反抗』とか『人とは違う』っていった御大層な理由じゃなく、『正当防衛』って、見た目のいい理由を付けてる、ただそれだけだろう」

「理由もなく、喧嘩するよりはよほどマシだと思うけれどね」

「マシかよ。本当はそんな事は欠片も思っただろうが。ただ、暴れたいだけ――その理由が欲しいだけだろ。ある意味、理由もなく暴れるよりも卑怯だ」

栄治の呟きが、沈黙を呼んだ。

決して新しくもない車両からは、エンジン音に混じってギアを擦るような音がしていた。

そんな小さな異音すらも、今は大きく聞こえる。

やがて、口を開いたのは優だ。

「で。そんな説教をするために、迎えにきたのかい？」

「停学明けで悲しんでるだろうって、俺の優しさがわからんかね」

「御丁寧に、学級閉鎖で昼前に終わるって調べてか」

優が首を振り、ゆっくりとラジオを付ける。

カーステレオから流れるニュースは、発生した狂人病の話題で一色だった。

日本で初めて発見された狂人病患者が、東京の病院に運び込まれ

たと。

すでに海外では多数の発症例が見られ、空港ではインタビューに、どこか面白おかしく答える男の声が混じっていた。

「どうせ仕事でしばらく会えないから寂しくて会いに来たんだろ？」

「そんなわけあるか」

「はいはい素直じゃないね。で、忙しいのかい？」

「まあな」

栄治の職業は警察官だ。

通常であれば、そこに警察の出番はない。だが、伝染病の発生に伴い、空港すらも封鎖されるとなると話は別だ。

封鎖する人間が空港に取られ、残された人間の仕事は右肩上がりに増えていく。

「本職じゃねえから、治療とか危険性とかはさっぱりわからねえ。

ただ、お偉いの方の方針が二転三転してきまりやしねえ」

「テレビの政治番組を見てれば、想像できる光景だな」

「似たようなもんだ」

栄治は肩をすくめた。

「明日からは休みなしだよ。泣けるぜ——つーわけで、しばらくはお前の様子も見れねえしな。だから、何だカップラーメンばっか食うんじゃねえぞ？」

「あんたは、俺の親父かよ」

「そうだぞ。知らなかったのか？」

「そんな学校でやくざって噂されるような、親父はいらねえ」

「ひでえな！ こんな誠実な顔がやくざって最近の学生はひでえ！」

栄治が叫んだ。

優が笑い声をあげれば、車はマンションの前へと寄せられていく。静かにブレーキが踏まれ、やがて車はマンションの前で停車した。

「ありがと。ま、仕事がんばってな、親父」

小さく笑いながら、優は助手席の扉を開いた。

礼を言っ、頭を下げる――その表情を真っ直ぐに見ながら、栄治は迷ったように口を開いた。

「なあ。優――お前さえよければ、俺は別に一緒に住んでも」

「やめてくれ。一人で気楽な生活をしてんだ。また口うるさい親父と同居するつもりはないよ。それより、寂しいならさっさと嫁さんでも見つけて結婚しろよ」

「うるせ――」

栄治が苦い顔で言葉をいい終える前に、助手席の扉を閉まった。

Ψ Ψ Ψ

「撃てっ！」

叫びと共に、幾百もの閃光があがった。

同時に聞こえるのは轟音。

銃声だ。

耳をつんざくばかりの火薬の音に、負けぬ声が後方からあがっている。

「撃て撃て撃て。近づけるな！」

まるで狂人のように甲高い叫びあげながら、だが誰として笑うものはいなかった。

撃つ。

ひたすらに引き金を引き続け、弾が切れるたびに弾倉が交換された。

良く訓練されている。

その行為自体は、まるで自動的に――機械の様に。

まさに放たれる銃弾は嵐となり、通常であれば相手を近づけさせ

ない。
けれど。

「何で、近づいてくれるんだよ！」
当たっているはずだった。

いや、はずではない。

確実に彼らが放った弾丸は、奴らにあたっていた。
避けも逃げもしない、的が相手だ。

次々と放たれる銃弾は、血が飛沫となって舞い散っている。

だが。

止まらない。

奴らとの距離は着実に縮まりつつある。

「泣きごとと言う暇があったら、さっさと弾を交換しやがれ」
叫んだ上官が、苛立たしげに銃を向ける。
その肩が。

「何だ、今忙しいって言って——」

振り返った先で、その上官は奥歯を噛み締めた。
近づけさせるな。

ああ、その命令は確かに聞いた。

彼らは軍人だ。

近づけさせるなと命令されたら、近づけさせない。

そのための訓練で、そのための軍人だ。

例え『狂人』だろうが、誰だろうが皆殺しにしても止めてやる。
だな。

何で後ろに。

「あ……ああああああああああっ！」

襲撃

3LDK。

一人で住むには若干広いマンションの一室。

差し込む朝日を顔に受けて、今宮優はゆっくりと身体を起こした。ベッドの上に半身を持ちあげながら、顔を拭い、頭を落ち着かせる。

時計を確認すれば、針が七時半を指していた。

例え休みであったとしても、起きる時間は変わらない。

それは日頃から起床時間に厳しかった父のせいであるかもしれないかったが。

ともすれば二度寝しようとする意識を振り払い、立ち上がって優は大きく伸びをした。

急な学級閉鎖が始まって既に三日が経っている。

最初は毎日かかっていた電話も、このまま春休みに突入するとう連絡を最後に電話はこなくなっていた。卒業式も間近に控えた、この時期では授業も消化試合であるから、構わないという判断だったのだろう。

とはいえ、学校がなくなれば外出する理由もない優にとっては、ほぼ一日を自宅で過ごす事になったが。

寝室の扉を開き、リビングへと移動する。

ソファとテレビ台が置かれた簡素な室内だ。

その先にある台所との境界にはダイニングテーブルが置かれていたが、父が亡くなって以来、それらは使われる事がなかった。

喉に乾きを感じ、寝ぼける頭をかきながら、台所へ向けて歩き出した。

途中で、ソファ前のテレビに電源を入れる事も忘れない。

『では、この病気の治療方法はいまだ発見されていないという事でよろしいでしょうか？』

『ええ。と……いいですか』

当然のことながら、テレビも狂人病の話題で持ちきりだ。

キャスターの女性が、神妙な表情で——相對する太った男性を向いていた。

テロップでは東都大学教授と、日本を代表する大学の助教授である事を告げている。

太った男は、しきりに汗を拭いながら答えていた。

『この病気が何らかの菌かあるいはウイルスでもたらされるものなのかすらはっきりしていないのです。原因がわからなければ、当然その対処もわからないわけ』

『しかし、この病気が発見されてから一カ月経つわけですよね』

そう言ったキャスターが手元のフリップボードで、アメリカの中西部を指さした。

2月17日初感染と、赤い装飾された文字を指さしている。

『ええ、逆に言えば一カ月しか経っていないわけです。当然、いまだ研究中です——全国の研究機関が総力を持って、原因を調査しています。ですから、皆様は安易な情報を鵜呑みにすることなく、冷静な対応をお願いしたいと思います』

『ありがとうございます。CMの後は厳戒態勢が引かれる鳴羽空港の様子です』

キャスターがテレビ目線で一礼する。

同時に画面が切り替わり、外国の女性が髪を洗うシーンとなった。

シャンプーのコマーシャルに、優は手に持った制服をダイニングテーブル脇の椅子にかけた。

コトン。

音がした。

それは決して大きな音ではなかったが、自然が発する音でもない。何か窓にぶつかったような、そんな音だ。

振り返れば、そこにはベランダへと繋がる窓があった。

薄青色のカーテンがかかる、その横。

顔があった。

三十くらい——まだ、若い女性だ。

突然ベランダに現れた顔に、優は一瞬驚いた表情を浮かべる。

だが、それがすぐにお隣の女性のものだどと気付き、小さく息を吐いた。

なぜ、ベランダから顔を出すのかわからないが。

何かあったのだろうか、一歩近づきながら——優は次第にその、異質さに気付いた。

表情がない。

お隣さんとは決して交流がないわけではなかった。

おそらくは深夜の仕事であるために、学校帰りに出勤前の彼女とすれ違う事があったが、挨拶を交わす程度には関係がある。

若干、化粧の色は濃いが感情豊かな顔立ちが——今はまるで別人のようだった。

その顔に、表情と言うものは一切ない。

ただ、覗いている。

そこに優にみられたというわずかな感情ですら、浮かんでいない。

というか、白すぎないか。

次を感じたのは、その表情の白さだ。

血色と言うものがない表情は、白さを通り越して青白い。

何でベランダに。

どうして何も言ってこない。

次々と重なる違和感に、優は足を止めた。

Ψ
Ψ
Ψ

ベランダの窓越しに、優と隣人の女性は見つめ合っていた。

違和感を感じて、戸惑いを隠せない優とは逆に――時間が経過しても変わらず無表情を続ける隣人の女性。

動いたのは、女性だ。

ゆっくりとベランダの窓に手をかける。

開けてと。

そう言わんばかりの様子に、優は頭を振った。

何を考えている。

彼女は助けを求めているのかもしれない。

もしかしたら怪我をして。声すら出せないのかもしれない。

そう思い返した瞬間、窓が割れた。

女性だ。

握りしめた指先からは、窓ガラスの破片が覗き――血が滴り落ちている。

痛みに顔をしかめることなく、女性は走った。

割れた窓から身体を付き入れ、砕けたガラスを踏み次第で真っ直ぐに優を目指している。

足が、身体が、割れたガラスで刻まれる事すらも気にせず、女性

は走っていた。

思わず声をあげかけた、その言葉を飲み込んだのは女性の速さによるところだった。

ベランダから優の位置まで、最短距離を通り走り抜けた女性は、優が言葉を発するころには、既に掴みかかっている。

咄嗟に腕を掴んだ。その前で、隣人は大きく口を開け、

「何をっ——」

していると告げようとした言葉は途中で、咄嗟に片手で彼女の首を掴んだ。

押し込まれる。

その細い腕や身体が嘘のような力を持って、優へと近づいていた。

優は決して力が弱い方ではない。

片手で車を持ちあげる例外を除けば、力比べで負けた記憶はなかった。

少なくとも、女性に負けるほど弱くはない。

全力を込めて、優は女性を引き離そうと力を込めた。

奥歯が音を立て、二つの腕の筋肉が盛り上がっていく。

掴んだ首には指がめり込み、今にも首の骨をへし折るほどの勢いがある。

だが。

隣人の女性は、ガラス同様に痛みを感じないように、ただただ淡々と大口を開いて、優の顔にその身を近づけていた。

カチカチと、音になる。

それが隣人の女性が口を開け閉めする音だ。

あと少しでも近づけば、その顎は優の顔面をとらえるだろう。

「ふざけんな——」
だから。

優は、彼女を敵だと——そう認めた。

Ψ Ψ Ψ

今宮優。

彼は自分から喧嘩を仕掛けることはない。

ただ、ただ敵と認めた人間には容赦しない。

だからこそ敵が増えると、彼自身も気づいてはいたが。

それが、彼の性格であった。

投げた。

女性はただ単純に、優を目指して前に進もうとしている。

身体の位置をずらし、背負い投げの要領で優は隣人を投げる。

押さえられた力が爆発したように、空港の様子を映していたテレビをなぎ倒して、破壊音が鳴り響いた。

地デジのために、買い換えたばかりのテレビを。

「くそ、弁償だよな。つか、ガラスはともかくこのテレビも弁償してくれるんだよな」

苛立ったように呟く優の前で、女性が跳ね上がった。

顔からテレビに突っ込んでいる状態から、一足飛びに跳ね起きる。まるで身体にバネがついているように。

少なくとも優には、その動作は真似が出来ない。

人体の構造を無視して跳ね起きた女性に対し、優は問答無用で椅子を叩きつけた。

破壊音と共に、骨の折れる音が響き渡る。

肩にぶつかった椅子が衝撃で手を外れ、床に落ちる。

「折れてるだろうが」

どうだとの思いは一瞬。

眩きは、女性が顔を起こして再び突進をした事によるものだ。

おかしいと、優はそこで先ほどの想いを頭に浮かべた。

窓ガラスによって、女性の身体は切り傷だらけだ。

掴んだガラスによるものだろう、指は半ばから切れかけてぶら下がっている。

投げられた衝撃によるものか、首の関節がずれてまるで小首を傾げたように固定されていた。

叩きつけられた肩は、半ばからへし折れ、その白い骨を肩先から覗かせている。

どれか一つであっても、痛みに悲鳴をあげる。

どれほど我慢強い人間であったとしても、痛みに顔をしかめるくらいはする。

そのはずだ。

だが、現に女性は変わらぬ無表情を貫きながら、いまだ優の顔にご執心のようだ。

迫りくる女を避けながら、優はその異常さに気付き始めていた。

これだけの音だ、誰か見に来るだろう。

そう楽観的に考えながら、御丁寧に鍵をかけて寝た事を思い出した。

誰か来たとしても、そこから大家なり警察に連絡すればさらに時間がかかるだろう。

間に合った頃には、優は彼女のお腹の中である。

「恨むなよ」

だから、少し考えて優は小さく呟いた。

女性を避けつつ、割れたベランダの方へゆっくりと近づく。走った。

その瞬間、優は再び女性の胸倉をつかむと、体を入れ替え、力強く突き飛ばす。

隣人は窓を飛び出し――ベランダを飛び超えた。

Ψ Ψ Ψ

荒い呼吸音が室内に響き渡った。

それは優自身のものであったが、まるで別人のように優は感じた。そう言えば、あの女はあれだけの動きをしていたのにも関わらず、一切息を乱していなかった。

今更、異常が一つ二つ増えたところで変わりはないであろうが。

疲れきってソファに座りこみそうになる自分を叱咤し、優は携帯電話を握りしめた。

「とりあえず、警察……いや、病院か」

独り言を呟いて、優はベランダの外を見た。

優の部屋は二階だ。

ベランダから投げたとしても、打ちどころさえよければ生きているかもしれない。

すぐに様子を見に行きたかったが、途中には粉々になったガラスが散乱している。

わずか数分前の光景が嘘のように、今は戦争があったかのように悲惨な状況だ。

点々と付いた血は、白い壁紙を黒く汚し、優の服にも付着していた。

まだ黒いジャージで良かったか。

と、寝巻変わりのジャージ姿で苦笑して、優はとりあえず運動靴を玄関から持ち出した。

室内で履くという事に、一瞬の戸惑いを感じたが、ガラスが散ら

ばる室内はあまりに危険すぎる。

靴を履き、携帯電話を握りしめたままに、優は叔父が務める警察署の番号をダイヤルする。

ガラスを踏みしめ、もはや窓として用を足さなくなった窓をぐり抜けながら、優はベランダへ出た。

『現在、回線が混み合って――』

携帯からは機械音声が続いている。

小さく舌打ちをすると、優は次に一一九をダイヤルした。

ゆっくりと――階下を覗きこむ。

階下は広い道路が広がっている。

その下に、赤い染みがあった。

受け身すらとれずに、顔から落ちたのであろう。

その染みの中心には、女性がいる。

うつぶせに、アスファルトに顔を突っ込む姿に病院ではなく葬儀屋に電話すれば良かったかと、どこか他人事のように考えた。

『現在、回線が――』

おい。

そこで、優は耳に当てていた携帯を見た。

ありえない。

間違いなくダイヤルは、一一九を回していた。

通常の回線ならともかく、病院や警察などの緊急回線までがつながらないわけがない。

いや、大地震などがあれば、そうなる可能性もあったが。

いま、その大地震に匹敵する状況が起きたというのはあり得ない事だった。

その異常さに、さしもの優も顔をしかめる。

その視界の端に、動きがあった。

Ψ Ψ Ψ

女だ。

アスファルトと熱烈なキスをした女が、ゆるりと立ち上がった。その足は衝撃でへし曲がり、脛に関節を増やしながら——立ち上がった。

自重すら支えられず、衝撃によって足を折り曲げるが。走った。

自重で身体が倒れるより早く、次の足を出し——そして、再び足を出す。

その止まらない動作は、真っ直ぐにマンションの非常階段を。つまり、優の部屋を指している。

肉を打つ鈍い音と共に、素足が階段を叩く音がした。

近づいている。

その異常さは、優の理解を奪った。つながらない緊急回線。

どれだけ怪我をしても、近づく女。

まるでB級のホラーだと、優はため息を吐く。

階段の音は次第に遠くなり、やがてのぼりきった。

彼女が離れたわけではなく、ベランダとは逆側——つまり通路にたどり着いたのだろう。

時間はない。

その想いが、しばし呆然と佇んだ優の身体を動かした。

携帯をポケットにしまい、ガラスを巻き上げながら、室内に戻れば財布と鍵束をポケットに突っ込んだ。

がんと隣室の扉が開く音がする。

御丁寧に再び、ベランダからお邪魔するつもりらしい。

走り抜ける先で、時計を掴むと口にくわえ。

「ふざけんな。死んだら化けて出てやるからな」

ため息一つ、隣室から伸びる手を乗り越えて、優はベランダから飛び出した。

着地する。

衝撃が足の裏から全身に抜けたが、止まっている暇はなかった。

着地と同時に走り出し、マンション内に置かれる駐車場へ走り出す。

静かだ。

八時も近いこの時間帯であれば、夫を送り出した主婦が朝の井戸端会議に花を咲かせる。

そんな時間帯であるにもかかわらず、マンション前の小さな公園にも――そして、マンションの玄関にも、人の姿を見る事が出来ない。

それは後々考えれば、幸運であつたのだろうが、現時点で走る優の苛立ちを増大させた。

玄関ホールの前を駆け抜けて、駐車場へと入る。

そこに置かれているのは青い車体をした自動二輪車だ。

鍵束から、盗難防止用のチェーンの鍵を探した。

どちゃっと、もはや人間が立てる音ではない音が背後から聞こえた。

何かと問いかける事はしない。

振り返る時間もない。

チェーンを手早くはずし、バイクにまたがると鍵を突っ込んだ。

叔父からは反対されたが、買っておいて良かったと思いながら、
優はスターターを押し込んだ。

エンジン音が、静かなマンションに響き渡った。

偶然

優はアクセルを握りしめて、ひたすらバイクを走らせた。

行先も、何も考えず——ただ速度をあげる。

風が頬を撫で、風景が次々に移り変わっていく。

本来であれば、通勤途中の車両やトラックが多く存在しているはずが、狂人病の流行に伴ってか、大幅に台数は縮小している。

だが、決して存在しないわけではない。

初めてすれ違った軽自動車に、決して、人の姿が皆無ではないという事に優は安堵した。

想像もしたくないが、異常事態が続く中で、この世にあの女と二人つきりと言われても、決して完全には否定できない。

それほどまでに、あの隣人との出会いは、優に衝撃をもたらしていた。

思わず、自動車に駆け寄ろうかと考えたが、返り血で濡れた優を見れば逃げられる事間違いないであろうし、仮に止まったとしても説明が難しい。

頭のおかしい女に襲われた。

そんな事を言っても、信じてもらえないどころか下手をすれば逃げられる。

およそ東へ五分ほど走り、優はゆるやかにアクセルを緩めた。

サイドミラーを確認し、ついで振り返る。

さすがにこの速度では、女も優を追いかけてくる事はなかったようだ。

確証はないがと、小さく呟きながら――優は苦笑を浮かべる。

どうかしていると、夢であってほしいと望むが、高鳴る心臓はいまだに激しく動きを繰り返しており、伝う汗が春の冷たい空気をかき消している。

着地した足はまだ痛み、力強く握りしめた握力も完全には戻っていない。

現実か。

深くため息を吐きながら、路肩に停車し、そこで優は力なくハンドルに身体を預けた。

しばらく動きたくはない。

気持ちも体も動く事を放棄していた。

考えたくはなかったが、思い返すのは先ほどの異常な光景だ。

どれだけ傷ついても止まらなかった異形。

それが化け物の顔をしていたならば、優もここまで焦りはしなかっただろう。

だが、彼を襲ったのは、隣人で――それも体力に自信がないであろう、女だ。

まるで別人のように様変わりした原因を、優は想像が出来ない。ただ、思いつくのは。

「狂人病」

そもそも、狂人病と言う事が何であるのか優には理解できないでいた。

新型インフルエンザなどの流行性のものと同じだと思っていたし、危険だと言われても子供やお年寄りが感染すれば危ないという認識程度だ。

それがどんな症状であって、そしてどれほど危険なのか優は理解していなかった。

考えれば、明らかにおかしい。
狂人病など、普通の病名で付けるはずがない。

さらに普通であれば存在するであろう、その患者へのインタビューや声も届いていなかった。

連日報道されるニュースは、患者の発生状況や周囲の不安な声などで、患者自体は一度も放送されていない。

だが。

もし、それが隠されていたものだとしたら。

先ほどの女がそれだとしたら。

「なるほど、確かにあれは放送禁止だな」

というか、放送事故だと優はため息を吐いた。

そして、それを隠す理由もわかる気がした。

隣人が突然あのように変われば、誰だって不安を起こす。

ただでさえ、連日の報道により薬とレトルト食品が買い占められたという噂もある。

あの姿がニュース映像で流れば、それより酷い暴動へとつながるだろう。

だからと言って、予備知識なしで襲われるのは勘弁してもらいたかったが。

しばらく止まれば、呼吸も落ち着き始めていた。

汗が乾き、少し寒さを感じる。

ともかくと、優は小さく言葉に出した。

あれが何であろうが、警察署には行くべきだと。

そこで叔父に話を聞ければよし、例え聞けなかったとしても隣人は捕まえてもらえるだろう。少なくともその安心がなければ、家に戻る事もできない。

優はポケットに突っこんでいた腕時計を引っ張り出して、腕には

めた。

八時十七分。

起きてから一時間も経っていないことに、苦笑しながら鍵を回して――そこで優は少女を見つけた。

Ψ Ψ Ψ

普段の学生服姿とは違い、茶色のスプリングコートにチェック模様のスカート姿だ。

コートの上からでも目立つ胸が、上下に揺れている。

変わらないのは頭につけた、ドクロの髪飾りだろうか。

その少女の姿は、一瞬だけ先ほどの隣人を思い出させた。

血色悪く走る姿が、先ほどの無表情の隣人を思い出させ、顔を引きつらせた。

だが、一重に逃げださなかったのは――その少女が見知ったものであって、名前を知っていたからだ。

「二見か？」

声をかけたのは失敗かもしれない。

もし彼女が感染者であれば、敵をおびき寄せる事になるだろう。

けれど、こんな異常な状況で同級生の姿にほっとしたのも事実である。

はたして、少女――二見明日香はかかった声に、驚いたように振り返った。

そこに優の姿を見つけ、驚いたように目を丸くする。

まるでハムスターの様に表情を変える姿に、優はゆるりと息を吐いた。

大丈夫だと。

「今宮君。どうしてここに？」

「んー、なんだ。散歩かな」

バイクに乗っているのかかわらず、散歩もないだろう。

だが、正直なところを言ったところで彼女に理解してもらえないわけでもないだろう。

第一、何と説明して良いか優自身もわからない。

無難な解答に、近づく明日香は困った表情を見せなかった。

けれど、近づくにつれて頬についた返り血を見て、驚いたように口をあける。

「って、今宮君、怪我してるの。また喧嘩？」

「その、またってのはやめてほしいけど」

「ご、ごめん。で、でも大丈夫？」

「ああ。返り血だから」

「やっぱり、喧嘩じゃない！ あ、あのね、この前の事は感謝しているけど、でも、喧嘩は良くないよ？」

必死に訴えかける様子が面白くて、優は笑う。

その反応に、明日香はますます頬を膨らませた。

「わ、笑いごとじゃないよ！」

「悪かった。そっちはどうしたんだ。家はこの辺りだけ？」

「あ。うん」

言葉を向けられて、明日香は口籠る。

覗かせた不安げな表情に、優は怪訝そうに顔を窺った。

「警察に——行こうと思うの」

「警察に？」

問いかける言葉に、何を思ったのか明日香はそうじゃないと大きく手を振った。

「あ、いや、今度は私は関係ないよ。あ、あのね」

不安げな表情で、考えをまとめていたのだろう。
しばらくの間をおいて、

「お母さんと弟が買い物にいったんだけど――さっき電話があったの」

と、そう言って見せたのは、彼女の手持ちの携帯電話だ。

生首のフランケンストラップとかどこで売ってるんだと、揺れる生首に一瞬戸惑いながら、優は黙って言葉を待った。

「何か通り魔が出たらしくって。警察を呼ぼうとしたんだけど、なぜか電話に出ないらしくて」

続く言葉に、明日香は不安さを様子を隠せないでいた。

けれど、彼女を気遣う言葉は優から出てこない。

通り魔との言葉に、思いつく存在があったからだ。

優の引きつった表情に不安を感じたのか、明日香は胸に手を当てた。

「だから、警察に行こうと思うの」

「それから連絡は？」

明日香はゆっくりと首を振った。

だから急いでいたのだと、優は納得した。同時に、呼びとめてしまい申し訳なかったとも思う。

不安なのだろう。

彼女が母子家庭で育ち、弟を溺愛しているというのは同級生の誰もが知っている。

いや、弟だけではない。

彼女は誰にでも公平に接していたし、優しかった。

だから。

バイクから降りた優は、座席を開き――黒いヘルメットをとりだした。

「ちょうどいい、こっちも警察署に行くところだったんだ。送っていくよ」

言葉をかけて、ヘルメットを渡す。

驚いたように受け取りながら、明日香はヘルメットと優を交互に見た。

「え、え……あの、やっぱり？」

「呼び出されたわけじゃないからな？」

戸惑う彼女が疑問に感じた答えを、優は引きつった表情で呟いた。

Ψ Ψ Ψ

大高市は、市の中央部を都心へと向かう電車で二分されている。

市の南側には港があり、繁華街が広がっている。

逆に北側には住宅地があり、優のマンションや学校はこちら側に存在していた。

その駅にほど近い場所に、大高警察署は存在している。

バイクが駅へと近づくと、周囲の状況は一変してきていた。

人の姿が少ない。

それとは対照的に、コンビニや露店がシャッターを下ろし、あるいは下ろさなかった薬局の窓が割られている姿が見えた。

酷い姿だった。

「ずいぶん変わったな」

「え？」

風の中で、聞き返す声が背後から聞こえた。

両腕で優の背を抱きしめる。

その暖かさと思わぬ胸の柔らかさを振り払うように、優は言葉を続けた。

「買占めが多くなっているとは聞いたけど、まさかここまで酷いとはね」

「あ、うん。そうだね。でも、昨日来た時は、何ともなかったんだよ？ 並んでいた人は一杯いたけど」

「じゃ、たった一日でこうなったわけか？」

「そうだったと思うんだけど。ごめん、自信ない」

明日香は自信なさげに答えた。

昨日は家にいたため、駅周辺の繁華街の様子は優は知らない。

けれど、昨日はこうではなかったといわれても、その荒れた様子はとても一日でなし得るとは想像がつかない。

人もほとんどいないしな。

本来であれば、繁華街が近くなれば人がいてしかるべきである。

だが、すれ違う人はまばらであり、たまにしかないかった。

暴動があったとするならば、それに対応する警察の姿もあるであろうし、何より暴動を起こした本人自身がいるはずだ。

違和感は、次第に嫌な予感へとかわっていく。

「今宮君？」

それが明日香にも伝わったのか、どこか不安げに名前を呼ばれた。首を振った。

考えていても仕方がないと、優はアクセルを握りしめ、警察署への道を急いだ。

Ψ Ψ Ψ

「これは、予想外だな」

呟いたのは、優だ。

警察署の正面でバイクを止めれば、映るのは破壊されたドアガラスだ。

ガラスの欠片が、玄関の外にまで飛び散り、室内の照明は切れて薄暗い。

その様子に、顔をしかめながら優はゆっくりとバイクから降りた。続く明日香がバイクを降りて、その現状に小さく息を飲み込んだ。

「ひどい」

ヘルメットを外しながら、明日香は頷いた。

確かにコンビニなどの店が襲われた形跡はあった。

けれど、まさか日本一安全な場所ですら、こんな様子であると言う事にショックを隠せないでいる。

ヘルメットを握り手に力がこもり、不安げな視線が優をおった。ゆっくりとしゃがみながら、地面に落ちたガラスを見ている。

よほど大きな力が加わったのだろう、ドアガラスは大きく破損しているし、その破片のところどころには黒ずんだ染みがこびりついていた。

血だと気づいて、明日香は慌てて視線をそらした。

「まさか、警察まで暴動に巻き込まれるなんて」

予想外と、最初に優が呟いた言葉はまさしく現状を表しているのだろう。

だが、優はどこか上の空であって、ずっと明日香に手を伸ばした。一瞬迷ったが、それがヘルメットを要求している事に気づき、慌てて差し出す。

それを受け取りながら、優はガラスを踏みしめながら慎重に扉に向かった。

もはや用を足していない扉を開き、その表情に浮かぶ緊張感に明日香も慌てて後ろに続いた。

「あ、危ないよ。暴動があったなら、犯人はまだ中にいるかもしれ

ないし」

「違うよ」

と、振り返らずに優は言葉を続けた。

彼女の言葉に、優の言葉を勘違いしていると気づき。

違うと、もう一度優は呟いた。

「暴動じゃない。暴動なら、扉は正面から中に割れるはずだろ——でも、ガラスは外にある。だから」

だからと、優は小さく言葉にした。

握りしめたヘルメットに力を込めながら。

「警察ですら逃げ出す何かが、中にいたのだろう。扉を突き破るくらいのがね」

明日香は言葉を失った。

決意

ガラスの欠片を踏みしめて室内に入る。

今日はガラスに縁がある日だと、優は小さく息を吐いた。慎重に音を立てないように心がけた努力も無駄のようだ。

一歩進めば、割れたガラスが澄んだ音を立てた。

室内は昼間だと言うのに、薄暗い。

それは電灯が付いていない事も原因であったが、何より窓がない事が大きいだろう。

真っ直ぐ続く廊下と受付らしきカウンターが並んでいる。

その先では電源の入ったパソコンが、淡い光を出している。停電と言うわけではないようだ。

ならばと、周囲を見渡してカウンターの先に、優は目当てのものを発見する。

電灯のスイッチだ。

ゆっくりとカウンターに近づく優の背後、ガラスが割れる音がした。

「い、今宮君――」

酷く小さく明日香が名前を呼んだ。

不安げに、しかし恐る恐る室内に足を踏み入れている。

怖いならば入ってくることもないだろうと、優は苦笑したが、この異常な状況下で一人外で待たされる方が、明日香にとってはよほど恐ろしい事だった。

ゆっくりと扉をくぐる明日香に、優は手をひらひらと振った。

その軽い様子に、明日香は小さくほっとしたように笑みを浮かべた。

「ちょっと待って。いま電気を――」

「今宮くんっ!」

悲鳴に似た叫び声。

笑みが一変して、恐怖を浮かべている。

その表情から、振りかえらなくてもわかる。

だから、優は迷うことなく手にしたヘルメットを振り抜いた。

ぐしゃつと骨が軋む音と共に、振り返った優の眼には顔面をヘルメットによって打ち砕かれた男の姿が映った。

同じだと、優は奥歯を噛み締めた。

強化プラスチック製のヘルメットは、確実に男の鼻骨と前歯を砕いている。

大きく顔をのけぞらせて、男は仰向けに倒れながら――だが、その表情に浮かぶのは苦痛でも、そして獲物を見つけた愉悦でもない。ただ、ただただ――感情がない。

生きる上で当然あるであろう感情と言うものを完全に消し去っている。

残ったのは、能面のような白い顔。

男女の――そして年齢の違いはあれど、人間の顔立ちと言うのは感情を消してしまえばここまで似ているものだど、優は初めて気づいた。

知りたくはなかったが。

そのまま倒れた男が置き上がるのも、想定通りだ。

相変わらず、まるで身体の関節にバネが付いているように――足を曲げることなく、起き上がりこぼしのように男は立ち上がった。

その顔面へもう一度叩きつける。

ヘルメットを振り上げた、その瞬間――甲高い破裂音が室内に響き渡った。

その衝撃で、男は一瞬顔を後方へと向けさせる。
優は殴っていないかった。

だが、男の顔には――ちょうど鼻の横に一つの黒い穴があいて、そこから赤黒い液体が噴き出している。

動く。

例え、顔に穴があいたとしても――男の動きに、まったくの怯みは見られない。

伸ばした手が優の身体に届く、その前に、さらに連続した破裂音が響き渡った。

次々に男の顔に、親指大の穴が開いた。

それが額に開いて、後頭部から噴水のように脳を吐きだす。

そこでゆっくりと男の身体は後ろに傾いて、カウンターの後方に倒れていった。

「そんなに簡単に拳銃って使っていいもんだったのかよ」

何が起こったか。理解したように振り返りながら、優は呆れた声をだした。

そこに想像通りの人物を発見して、振り上げていたヘルメットをゆっくりと下ろす。

大丈夫だろう。

銃で頭を吹き飛ばされて、それで生きていたとすればお手上げだ。それでも、その男はいまだに銃を構えたままで、厳しい視線を向けていた。

返り血なのだろうか、体中を血に染めながらも、堂々とした様子で回転式の拳銃を握り締めている。

「大丈夫か？」

との、男の問いかけに、優は一度うなずき。

「終わったよ、もう動かない。だから、それを下ろしてくれ、叔父さん」

いまだに銃を構える、叔父の姿に――優は苦笑をして見せた。

Ψ Ψ Ψ

「噛まれてないか？」

近づきながらの問いかけに、優と明日香は頷いた。
良かったと、安堵をしたように栄治は銃を下げる。

その言葉に疑問を浮かべた優に苦笑を向けながら、栄治は隣に立つ明日香へと視線を向けた。

「それより、デートにしちゃ随分とムードのないところを選んだなあ」

からかうような言葉を受けて、明日香が頬を染めた。
その隣で、優が呆れたようにため息を吐いた。

「どこの誰がデートに警察署を選んだよ。冗談言っている場合じゃないだろう」

「こんな時だし、冗談くらいでもな」

そう言って、気遣う視線を明日香へと向けた。

えっと目を丸くする明日香は、自分の手を見た。

先ほど、目の前で人が吹き飛ぶと言う衝撃的なシーンを見たばかりだ。

怖くて、震えていた――その震えが、唐突な栄治のからかいの言葉に止まっている。

その言葉に、優しい人なのだと栄治の事を理解した。

顔は怖いが……そう考えて、明日香は思いだす。

目の前の人物は、先日優を迎えに来ていた人だ。

そのいかつい顔立ちは、深く印象に残っている。

だが、それは栄治にとっても同じであったようだ。

「そういえば、この前会いましたな——はは、優の叔父をしている
今宮栄治と……」

「こう見えても、現職の警察官だからな。だから怖がらなくていい」
「こう見えてってどういう意味だ」

眉をひそめた栄治の様子に、明日香は一瞬言葉を理解し損ねた。

「え。けいさ……え、ええええええっ！」

驚愕の叫びだ。

先ほどのゾンビよりも、そして銃声よりも大きく驚いているよう
だ。

あんぐりと口を開く様子に、優が顔をそむけ肩を震わせる。

「お前の学校は、本当に酷いなっ！」

栄治が絶望的な声をあげた。

Ψ Ψ Ψ

すみませんとしきりに謝る明日香に、栄治は少し落ち込み気味だ。
笑顔に元気がない。

それに何度も頭を下げる明日香の様子に、優は楽しげに笑った。

「ま、まあ良く言われる事ですから。優は笑い過ぎだ」

「ごめん。はは、あんなに驚くとはね」

いまだ楽しげに目尻の涙を拭くと、優は栄治の顔を見上げる。

ずっと親指で背後を差す。

その先にはカウンターがあった。

「それより噛まれてないってどういうことだよ、あれは何なんだ？」
疑問の言葉に、それまで栄治は引きつった表情を浮かべた。

言葉に迷うような雰囲気であったが、やがて気にしたようにカウンターを一瞥し、口を開いた。

「狂人病ってのは知ってるだろう。それだ」

と、短い口調であったが、その言葉は優の予想通りの言葉であった。

やはりという印象を受けたが、明日香はそうでなかったようだ。驚いた様子だった。

「あ、あれが病気なんですか。で、でも撃たれても」

「さて。あんなった事がないのでわからないが」

そう前置きをしながら、栄治は言葉が続けた。

「どうも感染すると痛みとか感情が消えるらしくてね。死ぬまで奴らは襲い続ける」

「死ぬまで？」

「ああ。そうだ——人間と言うのはもろいようで、存外に強くてね。普通なら、頭に穴けばあっさりとの世行きだが、どうも完全に脳が止まるまで動き続ける」

「そ、そんな。ま、まるでゾンビ映画じゃないですか！」

「お嬢さんのいつてる映画がどれかはわからんが。想像している事でおおむね正解だろうな。こちらも最初は何とかしようと努力はしたがね。犠牲が大きくてな——」

何せと、そこで栄治は本当につらそうに、苦虫を噛み潰してみせた。

「空気感染の率は低いが、厄介なのは接触感染だ。つまり——噛まれれば確実に」

ああなると、栄治はカウンターの背後を顎で指し示した。

「おまけに空気感染とは違って、接触感染は発病するまでやけに早い」

だから噛まれたかどうか、最初に確認したのだろう。

最悪だなと——明日香の隣で、優が呟いた。

「つまりは——この人は何かから逃げたってわけじゃない。むしろ逃げだしたってことか」

その言葉に、一瞬明日香は意味がわからなかった。

けれど、それがドアを指し示している事に気づいた。

ここに入る前、優は言っていた。

警察ですら逃げ出す何かがあったと。

だが、そうではないと優は言った。

その疑問を込めた視線に、優は気づいたように小さく肩をすくめた。

「取り押さえようとすれば、当然警察の中にも犠牲がでるだろう。当然、病院に連れていくだろうが、軽傷だったら署に連れてくるんじゃないかな」

言葉に、あと明日香は短い声をあげた。

確かにそうだろう。

ちよつと噛まれたくらいで、病院に行く時間もないはずだ。

手当くらいはするだろうし——あるいは、仕事の後に必ず戻ってくるはず。

だが、栄治は何と言ったか。

——噛まれれば確実に感染する。

さらに二週間の猶予すらない。

その恐ろしさを理解して、明日香は小さく震えた。

栄治は苦笑する。

たった少しで、理解した優秀な甥を呆れたように見ながら、言葉を続けた。

「最初は助けていたがね。だが、いきなり噛まれた奴は隔離しろって話しになった。けど、いきなり放りだせるわけもないし、何より。

噛まれただけでいきなり変わっちゃうなんて、想像できるわけがない」

「そんな事すれば、噛まれたとしても隠そうとするのが人間だろうしね」

「ああ。いきなり無事と言った同僚が仲間を襲い始めてね。どうにもならんと、つい先ほど撤退命令がでたところさ」

「酷い話だ」

そう呟いたのは、警察ですらどうにもならないという事なのか。あるいは、多くの犠牲が出た事に対することだろうか。

厳しい表情を浮かべる優と栄治からは、その答えを読み取る事はできなかった。

「叔父さんは逃げなかったのか？」

「はん、馬鹿な甥が尋ねてくるんじゃないかと思ってな」

優の言葉に、栄治は口の端をあげた。

呆れたように苦笑しながら、

「あっそ」

と、優はそっけなく呟いた。

その顔に――明日香は疑問を感じる。

呆れたような口調で、そして表情は苦笑が浮かんでいる。

けれど、違う。

一瞬だが、優の表情に浮かんだのは――。

悲しみだよね。

答えを探そうとした明日香の耳に、小さな舌打ちが聞こえた。

栄治だ。

胸ポケットから煙草を取り出して、ポケットをしきりに叩いている。

何かを探している様子で、やがて諦めたように呟いた。

「ない」

「あ？」

「優。ライターを忘れた——ちいと、捜査一課の部屋からライターとってきてくれよ」

「そりゃ禁煙しろって神様からのお達しじゃねえの？」

「うるせえ。俺は神様だろうが悪魔様だろうが、禁煙はしねえ。ほら、ごちゃごちゃ言わずに行った」

背中をおされ、優は廊下へと進む。

思わず後に続こうとした明日香を、栄治の大きな手が止めた。

「お嬢ちゃんは、ここで待ってな。一応、誰もいなかったが奥はまだ見てないんだ」

「そんなところに、甥を行かそうとするなよ。おまけに煙草のために」

呆れたように優が呟き、しかしひらひらと手を振りながら、明日香を止めた。

「何分もかかるわけじゃない。ま、怖いだろうけどって食う事はないだろうから、ちょっと待っててくれ」

「オイルライターだからな。隣の奴のやすつちいライター持つてくるんじゃねえぞ？」

「あんたは少し遠慮しやがれ！」

叫び、優は廊下の先を曲がった。

Ψ Ψ Ψ

廊下の先に消えた優を、明日香は見守っていた。

先ほど感じた疑問が不安となって、胸を締め付ける。なぜ悲しそうな顔をしたんだろうと。

まるでそのまま遠くに行ってしまうようで。

そう考えれば、明日香の胸はますます締め付けられた。

ふうと、明日香の動きを止めたのは、大きな呼吸音。見上げれば、栄治が立っている。

大きく息を吐きだす、そこから盛大に紫煙が漏れ出た。煙草だ。

口にくわえた煙草が煙をあげながら、じりじりと音を立てている。え。

あまりにあたり前の光景に、一瞬当然のように思ったが、すぐにおかしいと思った。

なぜ、優は彼女から離れたのか。

「ライター持っていたんですか！」

驚いたような、そして非難するような口調に栄治は口の端をあげる。

「喫煙者がライターを手放すなんぞ、ありえないなあ」

「じゃ、じゃあ……」

「明日香ちゃんだっけ？」

と、明日香の言葉を止めた響きは、疑問形のものだ。

先ほど一度しか名乗っておらず、明日香は戸惑いを浮かべながら頷いた。

ゆっくりと明日香の前で動きがあった。

礼だ。

深く頭を下げて、明日香の前で栄治が頭を下げている。

その様子の意味がわからず、明日香はますます困惑した表情を浮かべた。

「優の事を頼むな。あいつは妙に冷めたところはあるし、人から嫌われる才能は持っているが……出来れば、君は嫌いにならないでいてくれたら嬉しい」

言葉に意味が理解できず、明日香は大きく瞬きをする。

「ど、どうしてそんな事を」

「あいつがどんな人間になるのか、結構楽しみにしていたんだが。俺は見れそうにないからなあ」

「あ、あの。どうしたんですか、急に！」

意味がわからず、思わず大きな声を出す明日香に、栄治は寂しげに笑った。

「さっき、噛まれたら終わりだったろ？」

頷いた明日香の前で、栄治がゆっくりと袖をまくりあげる。

歯型だ。

手首の一部を噛みちぎられた後があり、そこから血が噴き出していた。

それは返り血に混じって、栄治の服を汚していく。

ひどいと顔をしかめる明日香の前で、栄治はゆっくりと肩をすくめた。

「噛まれちゃってな、俺も。不思議なもんだ、こんなにひでえのに痛みが全然かんじねえ」

ま、そういうことだと栄治は――まるで他人事のように呟いた。

「びよ、病院に！」

「無駄だよ。病院に行った同僚が助かった何て話しはねえしな。ま、連絡自体つかないんだが」

「で、でも」

それでも、何とかしなくてはと明日香は思った。

わずか数分しか会っていない。

けれど、その数分だけだけど、優に似た人だと。

そう思った。

だから何とかしたいと思ったが。

具体的な方法は一向に思いつかない。

今まで見たホラー映画を必死で思い出そうとする。
酒をかければ、いや塩が。

そう思い返そうとして、だが――目の前の栄治の様子に明日香は泣きそうになった。

映画なんかじゃない。

これは現実だ。

目の前で――栄治がいて、ゾンビになろうとしている。

なのに、何故、この人は笑えるのだろうか。

「そんな顔しねえでくれよ。仕方ねえさ」

「な、何が仕方ないんですか！　だって、おじさん、今宮君の成長したところがみたいって、いま……仕方がないなんて諦めないでください」

「あー。仕方がないって言ったのはゾンビみてえになる事じゃねえ」

「じゃ――」

「俺は警察だからな」

「――！」

明日香は言葉を失った。

「警察が人を襲えるわけがねえだろう。ああ、そうなっちゃった同僚もいたが、少なくともあいつらはそれを理解していなかった。けどな、俺は理解しちまった。あと何分かもしれない、きつとそうならちまうだろうって。だから、だから――」

仕方ねえのさと、栄治は肩をすくめた。

何と声をかければいいのかだろうか。

たった数分しか会っていない彼女の言葉は届かないのではないか。

優を呼ぼうと思ったが、放つ言葉が声にならなかった。

それは覚悟を持った視線。

わざわざ優を遠ざけた栄治の意志に反して、優を呼ぶ事が正しい

のかどうか。

明日香はわからなかった。

だから、迷っていた前で——ゆっくりと栄治が離れた。
呼びとめる言葉もなく、その前で。

「頼むな、お嬢ちゃん。あいつは、寂しがりだからよ」

最後まで、栄治は甥の事を——優の事を心配していた。

向かったのはカウンターの奥。そこから階下へと向かう階段だ。
ゆっくりとした足音を響かせながら、栄治の姿は遠ざかっていく。

地下へと続く階段は、真っ暗で——その姿はあっという間に消えていった。

わずかに残るのは、煙草の小さな小さな灯りだけだ。

だがそれも——。

「安物のライターしかなかったんだけど。それで我慢しろよ」
どこか寂しげな声が、背後から聞こえた。

別離

「い、今宮君！ お、おじさんが――」

背後から聞こえた間延びした声に、明日香は振り返って伝えようと努力した。

けれど、声が上ずって上手く伝えられない。

伝えなければと思うのに、頭の中がはつきりもしない。

呆然と彼の名前を呼ぶ自分に、優は戸惑うだろう。

そう思ったが、彼の口から出たのは、

「大丈夫、知ってる」
と。

一言だけ呟くと、優は栄治が階下へと降りた階段をじっと見つめていた。

持ってきたであろう安物のオイルライターを手の中で弄び、黙っていた。

やがて、口から洩れるのは深いため息だ。

「何が俺が寂しがると思って待ってた、だ。親父もあんたも、責任だけは無駄にあっただろう。撤退するって話になったのなら、俺の事なんて待つわけがない」

苛立ちを持った言葉に、明日香は黙って彼の顔を見上げた。

悲しいのか、怒っているのか。

表情から判断する事はできなかった。

決して、あのゾンビのように表情がないわけではない。

噛み締めた唇、浮かぶ表情は複雑なものだった。

「あんたもおいて行かれたんだろう。他の奴らと同じように」

「他の……」

「ああ。あちこちに死体が落ちてたよ。皆、頭を撃たれていたがね。残された仲間達を楽にさせたかったんだろう。だから、ずっとここにいた。撤退したとしても、どこにも行かず——ただここに」

この既に廃墟と化した警察署にたった一人置いていかれて、どれだけ心細かっただろう。

それまで苦楽を共にした仲間が変わっていくところをみながら。おまけに、それは数時間もすれば自分にも起こりうる事なのだ。その気持ちがどれほどのものか、明日香には想像がつかない。

もし、明日香であったならばきっと泣き叫び、助けを求めて外に走ったはずだ。

だから。

「強いね」

と、胸が締め付けられて、吐きだしそうになる感情を抑えながら呟いた。

ただ、黙っている優の前で自分が泣くわけはいかないと思った。同時に思う。

こんな時なのに、我慢しなくてもいいのだと。

きっとそれは自分がいるからで。

「ああ、強いけど。残された人間の事も少しは考えろ、自分で言っただろう」

それはいつしか、優の父親の葬儀で——栄治が呟いた言葉であった。

普段、強がりしか見せなかった叔父が、父の葬儀で酒に酔い呟いた言葉だ。

全く似たもの同士だなど、優は小さく首を振った。

その胸に、ふわりと柔らかいものがあてられる。

明日香だ。

まるで子供を抱きしめるように、優の背に手を回している。

「泣いてもいいんだよ？」

「別に。泣くような事じゃない——こんな事」

首を振りながら、優は想像する。

そして、呟いた。

「これから日常茶飯事で、そして誰の身にも起こりうる事だ」

Ψ Ψ Ψ

大丈夫と、明日香の身体から身を離れた優は手にしたライターをポケットにしまう。

それよりもと呟いた姿は、いつもの彼の表情だった。

どこかつまらなく、諦めているような表情。

彼の叔父に似た整った目鼻立ちながら、まったくかっこいいと思われないのは、その表情によるものであろう。

明日香の友達による評価も、不細工ではないけれどと言ったものだった。

「問題は君だ。警察署がこうだろうから、電話何て通じるわけがない。君はどうする気なんだ？」

問いかけて、明日香は今まで忘れていた事に気付いた。
焦る。

こんな状態が、街の至る所であつたとしたら、母や弟は大丈夫なのか。

思わず口に手を当てながら、どうしようと思う。

まさに彼が先ほど言った、日常茶飯事との言葉は——明日香にも当てはまる言葉であった。

「わ、私行かなきゃ！」

「まあ待て。二見、お母さん達はどこに買い物にいったんだ？」

「シルフィー。その従業員用倉庫に逃げ込んでるって……」

「あの海岸近くのか？」

頷いた明日香の姿に、優は絶望的に息を吐いた。

シルフィーと呼ばれる総合ショッピングセンターは、買い物施設や映画などの娯楽施設がそろそろ近隣でも大きな総合施設である。

当然、遊びに行こうと思えば、そこに行く者も多い。

つまりは。

「人が集まる場所だな」

そんな場所で狂人病が発生すれば、多くの人間が犠牲となる。

電話があつてどれほど経っているかは知らないが、最初は通り魔だけであつたとしても、向かう頃には化け物だらけになっているだろう。

犠牲になっていなければいい。

だが、その状況下で助かるすべもない。

頼りにすべき警察も、すでに撤退してしまっている。

「行かなきゃ——ありがとう」

「一人で行くつもりなのか」

深く頭を下げる明日香に、頬をかきながら優が尋ねた。

うんと、明日香は頷く。

「迷惑かけられないし。そ、それにね？　こう見えても、私ホラー映画好きなの。だから対処法もばっちりだよ！」

「いや、君がホラーが好きなのは、その髪飾りとかストラップとか

でわかるから。危険だぞ？」

「だ、大丈夫だよ。ゾンビ映画で助かる人の六割はショッピンングセンターなんだよ。だから、むしろ安全だし」

「教会とかじゃないんだな」

力強く呟く明日香に、優は小さく苦笑した。

大丈夫と何度も自分を励ますように呟いている。

小さく震える身体を揺らし、不安を覆い隠すように。

「家族か……」

優は頭をかいた。

きっと好きなのだろう、そうでなければ死ぬかもしれない場所に飛び込むはずがない。

「いいよ、ついだ。連れてってやる」

呟いた優がヘルメットを、明日香の頭にかぶせた。

戸惑いが表情に浮かび、慌てて首を振った。

「だ、駄目だよ。危険なんだよ！ 人がいたらゾンビは集まってくるんだから！」

「さっき安全だとか言ってなかったか」

優が苦笑し、出口へと向かう。

「家族なんだろ」

ぽつりと呟いた言葉が、後を追う明日香の耳に響いた。

出口から漏れ出る光が優の表情を隠している。

どんな感情を浮かべているのか、声だけでは判断する事ができないが。

「俺にはもう家族って呼べる人間はいないけど。でも、君はまだいるんだろう——なら、大事にするといい」

「……ありがとう」

だから、明日香はただ深々と頭を下げた。

Ψ Ψ Ψ

走りだすバイクは、警察署から郊外へと向かう。

駅にほど近く、走ればそれまで人影が少なかった理由がわかった。駅だ。

正確には駅の周辺の繁華街は、大賑わいを見せている。

ゾンビ。

それらが、生者を求めて徘徊している。

立てこもる屋内からは悲鳴がそこかしこから聞こえ、あるいは逃げる人間を追いかけ、捕まえている。

駅から逃げようとした車が襲われ、置き去りにされたのだろう。

外へと続く幹線道路は、そのために長い渋滞が出来ている。

優自身もまた狙われた。

喜びすら浮かべない無表情の人間が、集団で押し掛ける。

しかしバイクの特徴である機動力を生かし、細い路地を駆け抜ける事で、何とか逃れる事ができた。

助けてくれと叫んだ声が耳にこびりついた。

「な、何でいきなりこんな事に」

「潜伏期間だろ」

「で、でも日本ではつい先日発見されたばかりなんだよ？」

騒ぎになったのは、学級閉鎖が起きた時からだ。

換算すれば、まだ一週間も経っていない。

「患者はな。当然、その前の段階で患者に接触した人間がいるだろ」

「で、でもそうだとしても。テレビじゃ何も」

「接触感染って聞いたろ。接触すれば潜伏期間は短くなる——発病

した人間が身近な人間を襲いだして、それがさらに発病する。ああ、俺も今朝襲われたよ、隣の人に」

それは高度情報化社会のいまですら、予想できないスピードで。日本中、あるいは世界中がこうなっているのか。

何をきっかけとして、爆発的に増大したのか、優には理解できないが。

「君の好きなホラー映画のゾンビは、こんなに急に広がるのは珍しいのか？」

「ううん。大体、こんな感じかな……でもね。そういうのって、大体いきなり始まったりするから。患者が見つかったって言われて、一カ月も経ってから増えたりしないよ」

「そりゃ、時間の都合によりって奴だな。一カ月間の日常を映すわけにもいかないだろう。つまり、その映画の最初がやってわけた」飛び出すゾンビを、車体を寝かせながら避けて、優は苦虫を噛み潰した。

何が起きているか、全てを理解する事は出来ないが、想像する事はできる。

その想像の中で、複合施設のシルフィーに向かうのは、自殺行為と言っても良い。

駅周辺の繁華街ですらこれだ。

近隣から人が集まる場所では、どれほどのゾンビがいるのだろう。下手をすれば、全員がゾンビになっていてもおかしくはない。むろん、背後にいる明日香にその事を告げる事はできないが。

幕が開いた。

優は小さく呟いた。

母親

数時間前。

総合ショッピングセンターシルフィーは春休みに入った事もあり、賑わいを見せていた。

感染症が騒がれているが、彼らにとってはあくまでも対岸の火事だ。

都心からも離れ、近くに空港もない大高市で閉じこもっている人間は少数であった。

定期バスが止まり、降りる中で母と子の姿があった。

優しい顔立ちをしたまだ若いであろう母親と生意気ざかりの小さな男の子だ。

「ほらほら、気をつけて。危ないよ？」

小さく小言をいう母親に、その迫力はない。

子供は聞く耳も持たず、元気に街を駆け出した。

途中で止まり、振り返り、

「ママ、遅いよー？」

「和君が早いのよ」

頬を膨らませる母親の姿に、

「あら、おばさん！」

驚いたような声がかかった。

彼女が振り返れば、高校生ほどの少女がクレープをかじっている。ポニーテールを小さく揺らし、健康的に身体が引き締まっていた。休みであるはずが、着ているのは娘と同じリボンのついた制服姿

だ。

肩に長い棒を入れたような袋をかけている。

「えっと。琴子ちゃん？」

確認するように名前を呼べば、少女——秋峰琴子は嬉しそうに頷いた。

「ええ、買い物ですか？　でも……」

と、子供と母親を見た琴子は誰かを探すように周囲に目を配った。

その様子に、母親は気づいたように。

「明日香はいないわよ。あの子昨日も映画見ちゃって。起きれないって」

「相変わらず好きものなんだから」

苦笑して、諦め気味に笑う琴子にごめんねと母親は小さく頭を下げた。

「そういう琴子ちゃんはお買い物？」

「道場に練習に行ったんだけど、部活も休みみたいで」

そう言って、肩から下げる袋を手にした。

「練習熱心ね。あの子もそういう趣味を持ってくればいいのだけど」

「はは、明日香が運動しているとこって想像できないですよ」

「それが困りものなのよね」

肩をすくめた、母親——二見陽菜は困ったように小首を傾げた。

「お母さん早くー」

「はいはい。ごめんね、じゃ……」

小さく頭を下げて、娘の友人と別れようとした。

その瞬間、悲鳴があがった。

Ψ Ψ Ψ

それは耳を覆いたくなるような、絶叫だった。

痛みよりも、突然の事態に何かわかっていないような叫びだ。

振り返って、そこに男に覆いかかる老人の姿が見える。

齢八十は超えているであろう——どうやら掃除夫が、手にしたモップや箒を放りだして、男にのしかかっている。

のしかかれた男は、筋肉質の若い男性だ。

タンクトップの上からでも、その力がはつきりとわかる。

だが、男は老人をはねのける事が出来なかった。

組みしだかれたままに、声をあげている。

デート中であつたのだろう、その近くには女性がいたが。悲鳴をあげながらも立ちすくんでいた。

「ちょ、ちょっと」

驚いた声を出したのは琴子だった。

よほどあの男が、悪いことをしたのだろうか。

そう思つて一瞬、違うとすぐにわかった。

鮮血だ。

男の盛り上がった肩に、老人は噛みつき——食んでいる。

あがつた鮮血が、路上に飛び散って、悲鳴は連鎖した。

「か、噛んでるぞ！」

「警備員を呼べ！」

叫びが連鎖して、慌てて近くから散っていく。

あるいは不謹慎にも、携帯電話を取り出して話す者や写真を撮る者の姿があつた。

陽菜も、近くにいた和馬を抱いて目を隠す。それだけしかできない。

あまりの光景に、人は一瞬で判断力を失われるものだ。逃げないと、警察を呼ばないと思うが、出来る事は子供を抱きしめるだけだった。

動いた。

そう思ったのは、風を感じたから。

近くにいた琴子がスカートを翻して走る。

袋から長い――そう、長刀を取り出して走り、気合を一閃。振り抜いた。

さすがに刃は避けて、柄の部分を見事に老人の鼻を潰して、振るわれる。

「何してるのよ！」

との、怒りの声は――けれど、顔をあげた老人によってかき消された。

食んでいる。

ちぎり取った肩の肉を、無表情でただ咀嚼している。

くちやくちやと音がなるたびに、血で染まった口の中から得体の知れない肉が見えた。

吐きそうになる。

その一瞬で、老人は走った。

次の狙いは琴子だ。

それがわかって、咄嗟に石突きで老人の腹を叩き、跳ね返った長刀が老人の顔を殴打した。

それは日頃の練習で培われたもので。琴子も意識して使った技ではない。

だからこそ、容赦はなかった。

刃引きがされているとはいえ、長刀の刃は鉄製のものだ。それが容赦なく振るわれれば、いかなる男子とはいえ意識を失うだろう。

けれど、老人は一瞬頭をそらしただけだった。速度が緩まない。

振り切っている琴子の身体は、すでに逃げようにも身体がぶれてしまっている。

いやと叫びかけた琴子の前で、老人の身体が吹き飛んだ。

Ψ Ψ Ψ

見上げれば、隣に雲に届くばかりの巨体があった。

身長は2メートルを超えているだろうか。

角刈り頭の、巨人の様な男だった。

「は、浜崎！」

驚いたように、琴子はその名前を呼んだ。

彼女の通う高校で知らぬ名前はなく、近隣の学校でも大高の浜崎と言えは有名である。

それが突き飛ばしたのであろう、手を前に出したまま立っていた。

「琴子ちゃん、大丈夫？」

焦ったような声に、ようやく意識を取り戻した琴子は助けてくれたのだと、そう理解した。

「あ、ありがとう……」

「別に、さして労力も使ってねえ」

照れた素振りもなく、浜崎は腕を小さく振った。

「ちょ、浜崎さん何してんすか！」

「あぶねーっすよ？」

「って。誰かと思えば、秋峰か」

「はん、完全無欠の委員長様も通り魔にはお手かー？」

けらけらと笑い声をあげながら近づくのは、その取り巻きである男たちだ。

思い思いのカラフルな服装に、軽い口調で近づいている。

今まさに異常な状況があったと言うのに、気づいていない。

端的に言えば、馬鹿ばかりであった。

一瞬浮かびかけていたお礼の気持ちは、すぐに消えていった。

思えば、彼らは彼女の親友を傷つけた馬鹿なのだ。

「うるさいわよ。お礼なら言ったでしょ、さっさと散って」

「あぁっ！」

気色ばむ男たちはおいて、浜崎は動かない。

どこを見ているのかと、疑問を感じた琴子の耳に声が聞こえた。

「大丈夫？」

男性の連れの女性が、慌てたように駆け寄って怪我を確認している。

心配そうなら、助けてあげれば良かったのにと思わなくもないのに。

「ねえ、大丈夫。やばいって、これ」

血が付く事が嫌なのか、嘔き出す肩の出血を触ろうとしない。

そんな姿に呆れながら見ていると、それまで絶叫をあげていた男性は身体を起こした。

「ちょ、何そんなに怒ってるのよ？」

黙っている。

「大体あんたが悪いのよ。いつも誰にも負けねえっていつてんのに、おじいちゃんにおし——ひゅぐっ」

言葉が最後まで言えなかった。

男性の顎が、女性の首を噛み千切ったからだ。

目の前で噴き上がる鮮血に、女性の頭が力を失って後方に倒れていく。

ぬらぬらと濡れる咬み痕からは血に混じった白い脂肪がぷつぷつと浮かび上がっていた。

「う、うおおおおっ！」

声をあげようとした琴子よりも先に、浜崎の取り巻きが声をあげた。

それまでの軽い感情とは打って変わって、心底驚いたような絶叫だ。

何か違う。

ただの光景じゃないと、一步後ろに下がった先で硬い何かにあたった。

見上げれば巨体——浜崎が、その状況にも関わらず、やはり視線を戻さずじっと立っていた。

何故と、その視線を追う。

無表情の老人が、すぐそこにいた。

Ψ Ψ Ψ

「おおっ！」

握りしめた拳を、浜崎は老人の顎に撃ちこんだ。

その光景は、トラックと正面衝突した人間のようだった。

老人の細い身体が浮かび上がり、数メートルを移動して地面に叩きつけられる。

すぐに身体が反転して、足を振り抜いた。

それは女性の首を噛みちぎってなお、走りだした男性の腹部をとらえ――弾き飛ばす。

ごろごろとアスファルトの上を転がる男性に、それまで無様に上げていた声の主が指を差した。

「み、見たかこれが浜崎さんの実力。大高の『黒夢』を舐めんじゃねえっ――」

さした指が、消えた。

ぱくり、そう聞こえんばかりの音に意味が理解できない。

女性だ。

首をかじりとられ、頭をそらしていた女性。

その口に、新鮮な男の指がくわえられている。

ぱりぱりとまるで、焼き菓子をかじっているような音が広がり、

「逃げろ、加持！」

浜崎の叫びよりも先に、加持と呼ばれた男は女性に組み抱かれていた。

それは官能的な光景ではなく、肉が咀嚼される音だ。

首筋をちぎられ、えぐられていく。

必死に抵抗とした男が、次第にその顔色を失っていった。

「あ、あ」

吐きだしそうな光景に、目を奪われて、その手が取られた事に気付いた。

「何ぼつとしてんだ。逃げんぞ！」

「で、でも加持が――」

「てめえも仲間になりてえのか！ さっさと行くぞ！」

強い口調でたしなめられて、浜崎が琴子の頭を掴んで強制的に視線を動かせた。

老人——そして、男性だ。

あれほど強烈な打撃をくらったというのに、そこには何事もなかったように走りだす二人の姿がある。

それぞれ思い思いに近くにいた買い物客に襲いかかり、肉を咀嚼する。

こちらに来なかったのは、幸いだったかもしれない。

きつと、いまの琴子是对処が出来ない。

というよりも。

「こ、腰が抜けて動けないのよ、馬鹿！」

へたり込んだ琴子に、浜崎は——実に珍しい事に、呆れたような笑いを浮かべ。

片手で彼女を抱き上げると、逃げだした。

取り巻きの男がそれに続き、陽菜も息子を抱えると必死で走りだした。

Ψ Ψ Ψ

「駄目ね、こっちもつながらないわ」

逃げだした先は、従業員専用と書かれた通路だ。

細い通路を走れば、そこは倉庫であったのだろう。段ボールが山と積まれた空間があった。

当初は、働いていた従業員が外に出そうとしたが、通り魔に襲われた事を告げれば、電話でどこかと連絡を取って、慌てたように外へと出て行った。

全員、思い思いに携帯をいじり、警察を呼ぼうと連絡をしている。

けれど、電話の声はみんな同じで。

『おかけになった電話は、現在混み合って……』
なじみの機械音声だった。

「な、何なんだよ、畜生。つかえねえ！」

怒り任せに取り巻きである男の一人が、携帯電話を床に叩きつけた。

電池が外れて、床面を転がりながら、情けないと琴子は呟く。

けれど、彼の気持ちもわからないでもない。

あの異常な風景に、頼りが奪われたのである。

日頃は気づかなかったであろう警察という存在が、この非常時に
どれだけ救いとなっていたか。もっとも、それがつがらなければ、
何の意味もないのだが。

「電話つながったよ？」

それは、幼い声だった。

小さな男の子が、携帯電話を母親へと向けている。

「餓鬼が嘘ついてんじゃねえぞ。全部お決まりのセリフじゃねえか」
「で、でも。つながったよ」

「てめ、いい加減にし——」

叫んだ男の頭に、拳が落ちた。

蹲る男の傍に、拳を落とした琴子の姿がある。

「うるさいのはあんたよ」

「つてえ。て、てめえ——」

「井上……」

怒りを浮かべる男が、言葉に硬直した。

静かな浜崎の声が、井上と呼ばれた男を止めた。

「少し黙ってろ。二度は言わん……続けてくれ」

そう呟かれて、一瞬戸惑いをみせながらも、陽菜はゆっくりとしゃがんで息子の頭を撫でた。

「あら、和君。どこにつながったの？」

「お姉ちゃん」

陽菜の言葉に、和馬は笑顔と携帯を向けている。

「すぐに警察に行ってくれるって」

「そう。それなら安心ね」

微笑みながら頭を撫でられて、和馬は嬉しそうに笑った。

自信を浮かべながら。

「明日香がねえ――」

きっと弟思いのあの子の事だろう。

慌てて着の身着のまま走りだす、明日香の姿を想像して小さく笑う。

その背後から声がかけられた。

「明日香というのは、二見か？」

「ええ。そうよ、明日香のお母さんの二見陽菜さんと和馬君」

浜崎の声に、そう言えば自己紹介もしていなかったと二人の親子を琴子は指し示した。

そうかと浜崎は、奥歯を噛み締めながら。

ゆっくりと動いた。

彼が動けば、まるで山が動いたような印象がある。

その動きを全員が視線で追った。

近づく浜崎の姿に、陽菜は疑問を浮かべ。

「すまなかった」

謝った。

その光景があまりにも、意味が不明であって、誰もが固まった。

謝られた陽菜でさえも。

「えっと。助けられた私達が、何で謝られてるのかわかりませんが」「あなたの娘さんには失礼なことを言って傷つけた。母一つで育てているあなたを、その……夜の仕事をしていると」

「ちょ、ちよっと浜崎。それはあんたが言ったんじゃないでしょ」

思わず、琴子が言葉をかけた。

それは息子がいるからか、非常に言葉を和らげているが、淫売だとか売女だとか、相当な侮辱の言葉があったらしい。だが、聞くところによると、それは浜崎自身がその場にいたわけではない。

全てはその取り巻きが——彼のいない時に、デートに誘おうとして、断られた部下が言った言葉だ。

その瞬間、近くに通りがかった今宮の手によって全員が病院に運ばれ、おまけに駆け付けた浜崎と殴り合いになった経緯があるのだが。

だが、琴子の言葉を聞いていないように深々と浜崎は頭を下げた。何で謝るんですかと——動揺しているのは、それを言った本人であろう、井上だ。

だが、それらの言葉を見捨て、黙って頭を下げる。それに。

「あら、そんな事があったの」

微笑みながら答えるのは、陽菜の柔らかな笑顔だ。

夜の仕事？ と無邪気に疑問を浮かべる息子の頭を撫でながら。

「だから、最近学校から電話が多かったのねえ。確かに、私は夜働いているからこの子達に寂しい思いをさせているかもしれないわね。けど、私はそんな素敵な仕事は残念だけどできないわよ」

くすつと小さく笑いながら、息子にはそれが、顔の良い女性だけが出来る素敵な仕事だと伝えた。

お母さんも綺麗だよと呟く息子を撫でながら、

「そう。そんな事が……でもね、明日香は傷ついてなかったわよ。

むしろ、凄く嬉しそうに、幸せそうに帰ってきたのだから」

怯んだのは浜崎だ。

目を丸くして、下げた頭のままでじっと陽菜の顔を見ている。

「でも、これからは娘と仲良くして頂けると嬉しいわね」

彼女の言葉に――その器の大きさに、浜崎は黙って、もう一度頭を下げた。

危機

時間が経った。

きっと春で良かったのだろう、いまだ肌寒い空気は――だが、人が密集する倉庫内ではじわじわと温度があがってきている。

夏であれば、倒れるものがあるかもしれない。

冬であれば座ったむき出しのコンクリートが、その体温を下げていたはずだ。

けれど。

「まだ助けはこねえのかよ！」

何してんだと、苛立ちをこらえきれぬように井上が叫んだ。

だが、周囲の者に反応はない。

陽菜や琴子、浜崎はともかくとして、周囲の仲間ですらまたかといった疲れた視線を送っている。

「な、何だよてめえら。まだ、誰もこねえじゃねえか！ いいから、そうだ。がきんちよ、歌でも歌え」

「何言ってるのよ！」

「うるせえ！」

叫んだ井上の言葉に、和馬はきよとんと瞬きした。

怒鳴ろうとする琴子を止めたのは、いいよという無邪気な言葉だ。

ええとねと、小さく考えながら。

「ぞんびーぞんびー、どろどろぞんびー」

「やめろーっ！」

井上が叫んだ。

楽しそうに歌いだした和馬が、さらにきよとした顔を見せる。

「な、何だ。その歌は——つか、最近の小学校はそんな歌を教えんのか」

「違うよ——お姉ちゃんが歌ってたの」

「明日香は……」

琴子は頭を抱え込んだ。

相変わらずのホラー好きは、家でも変わらないようだ。

和馬は止められたことに不思議そうにしていたが、少し空気が和んだようだ。

「二見のホラー好きは有名だしなあ」

「そうそう。図書室にホラー本を入れようとしてたしな」

楽しそうに笑う周囲の人間のために、井上はそれ以上怒りの言葉を口に出せないでいた。

不愉快そうに唇を噛む。

そんな井上を置いて、取り巻きの男たちは次々に談笑を始める。

「かえりてえな」

やがて、小さく漏らした言葉に、誰もが頷いた。

ただ立ち上がる男がいる。

浜崎だ。

ずっと見るのは、通路からこちらへ向かう白いドアで。

何かと疑問を浮かべ、次第に立ち上がる面々の姿。

それは音へと変わった。

足音だ。

ばたばたと走るような足音が近づいている。

ああ、助けが来たと駆け寄ろうとした井上を浜崎が押し止めた。その強い手に、普段の軽口は消え去っていた。

その表情のこわばりに、琴子も手にした長刀を握りしめた。扉が開く。

人がいた。

いや、人たちが。

年齢、性別、顔立ち。全てがばらばらであるのに、まるで同じように等しく。

無表情。

かける言葉もなく、ただ気づいたように彼らを見ている。

「逃げろっ！」

硬直を解いたのは、浜崎の大声によるものだ。

積み重ねていた段ボールを投げつけて、指し示したのは後方に設置されていた荷物搬入用のシャッターだ。

迷わず琴子が走り、『開』と書かれたボタンを押す。

シャッターはゆっくりと上昇を始めた。

その遅さが焦りを加速する。

「はやく、はやく！」

焦りのあまり、本来は一度押せば良いボタンを琴子は指が白くなるほど押し込んだ。

助け？

冗談じゃないと。

あの顔は、先ほど彼女らを襲った人間のものだ。

いったい何が起きているのかわからないが、逃げなければならないと。

男たちがシャッターに駆け寄った。

開け開けと叫びながら、シャッターの扉を叩く。
けれど、鉄製のシャッターはそんな事では開かない。

ただ遅々として、ゆっくりと開き続けるシャッターに外の光が差し込み始める。

衝撃が走った。

音は後方、入口からだ。

殺到する男に向けて、浜崎が拳を振るっている。

逃がそうとしているのだろう、扉の前に立ちふさがり、次々に襲いかかる男を吹き飛ばしている。

一人も逃がすまいと。

それとは別に――。

この男はと、琴子はボタンを押しながら、苛立ちを浮かべた。

井上と名乗った男が、シャッターの下に屈みこみ、少しでも早く外に出ようとしている。

情けないと呟きかけたその耳に、野太い声が走った。

「お前ら。がきらと秋峰が逃げるまで、奴らを近寄らせるんじゃねえ！」

呆然と振り返る男に向けて、浜崎が声を走らせた。

「女を傷つけて、黙ってるつもりか。何のために、俺らは突っ張ってんだ。ただ迷惑かけるためだけじゃねえだろ！」

叫んだ言葉に、誰もが声を失った。

何を言っているかと言葉を疑う者がほとんどだ。

ただ、一人扉の前に陣取り、化け物、そうゾンビを相手取る浜崎の姿に――ゆっくりと一人の男が駆け寄った。

傍らに置かれていた業務用のスパナを手にして。

「た、たかがゾンビがざけてんじゃねえ！」

叫び殴りつけたスパナが、ゾンビの頭をへこませた。

飛び散った血が、男の身体を汚した。

そんなものに構っている暇はなかった。

頭を打ち砕かれてもなお手を伸ばすゾンビがいる。泣きそうになりながらさらに振るおうとしたゾンビの頭が、吹き飛んだ。

スコップを構えた、友人が隣にいる。

怯えと恐怖でぐしゃぐしゃになりながら、それでも友人を救っていた。

「お、俺……人、殺しちゃった？」

「大丈夫。まだ、生きてるよ——残念だけだな！」

奥歯を噛み締めた、男は倒れたゾンビを恨みがましく見つめる。

跳ね上がった、その頭に向けて足が振り下ろされた。

叩きつける音とともに脳漿が巻き散って、むき出しのコンクリートを染める。

「は、浜崎さん」

「殺した責任は俺が全部もつ、だからてめえらも死ぬ気でやれ。じゃないと……」

襲い来るゾンビを押し返しながら、浜崎は口の端に豪快な笑みを浮かべた。

「あっさり殺されんぞ！」

Ψ Ψ Ψ

遅々として進まないシャッターが、ようやく一人通れるスペースが空いた。

背の小さい和馬を逃がそうとした、その陽菜を押しつけて——井

上がぐる。

その取り巻きの多くは、浜崎を助けるため——また仲間を助けるために、ゾンビの群れに走り出している。

だが、井上を含め数名はその輪に加わることなく、シャッターから漏れる光へと殺到していた。

非常時になると、人間の本性が見える。

そう言ったのは、彼女の長刀の師だ。

もはや怒鳴る事も忘れて、その様子を見ていた。

「な、な……あ、あああああ！」

その怒りが吹き飛ぶほどの絶叫が、シャッターの外から響き渡った。

逃げだそうとした男たちが、一瞬固まる。

次第に緩やかに開くシャッター。

その先で、噛み千切られた井上の姿があった。

Ψ Ψ Ψ

がんと、扉が閉められ固定される音がした。

浜崎の叫びに合わせて、倉庫内を閉めていた棚が扉を塞ぐ。

喜びもつかの間、振り返った浜崎が絶望的な表情を見せた。

ゾンビだ。

溢れんばかりのゾンビが、倉庫街のシャッター前にいる。

既に食われた井上が、四肢をばらばらにしながら——いまだ何が起こったのかわからない表情で、こちらを見ていた。

死んでいる。

いや——違うと、思った。

その顔が、急速に表情を失うと、四肢がもがれた状態のままでゆっくりと動き出す。

這いずって、近づく姿に、和馬が後ずさりした。

守りたいと思う。

走りだした。けれど、扉の前からシャッター前は何と遠いところか。

ゾンビ達よりも早くたどり着いたとして、狭い場所もない所で防げるかどうか。

けれど、走り出す浜崎よりもゾンビは動く。

シャッターに殺到していた男たちが慌てたように、陽菜を突き飛ばして逃げた。

お母さん！

叫んだ和馬が、母親にすがりつく。

浜崎と共に扉を塞いだ仲間もまた、急いで彼女たちに向かう。

「は、あああああっ！」

その前で、振るった長刀で近づくゾンビを琴子が牽制していた。

けれど、その鉄の刃をどれだけ身に受けても、ゾンビ達にひるみはない。

打撃力がない。

もし浜崎であったならば、力づくで撃ち払い遠ざける事もできただろう。

だが、琴子が得意とするのは一撃必殺の攻撃である。

急所を確実にとらえてはいるが、それではゾンビを止める事ができないでいた。

間に合えと叫ぶ。

けれど、伸ばされる手全てを琴子は撃ち払う事が出来ず。

その顔に絶望が浮かんだ。

その瞬間――ゾンビを跳ね飛ばしながら、一台のバイクが飛び込んだ。

廃車

「お母さんっ！　って、琴子、何でいるのよ」

驚いたような言葉に、やはり驚いているのは琴子も同様であった。

「明日香こそ。あんた、何で！」

言葉の前で、ゾンビを跳ね飛ばしたバイクが勢いそのままに転がり、飛びのいた少年が拳を振るう。

その勢いは、先の浜崎を超える。

人間が、ゾンビがまるでゴミの様に弾き飛ばされていく。

その少年に、琴子は見覚えがあった。

彼女がその名前を呼ぶ前に、暴風の様な影が飛び込んだ。

「い、今宮あ！」

「あ。浜崎か、珍しいところで会うな」

「そりゃ、こっちの台詞だ。っーか、何でお前、ジャージ？」

「家庭の事情だ」

呆れたように、どこか嬉しげに笑いながら、駆けつけた浜崎が近づいたゾンビを投げた。

それは手を伸ばすゾンビを巻き込みながらも、吹き飛ばし――二人は並んだ。

「ちょ、今宮って！」

「浜崎さんと夢のコラボレーションかよ。いける、今宮がいたらいける！」

彼の登場に、それまで絶望を浮かべていた少年たちが目を輝かせた。

手に武器を握り、ゾンビへと向けて走り出す。

それまで厳しい顔で前を見ていた浜崎も、周囲を見渡す余裕ができた。

そこは防ぐ場所もない広い空間だ。

ゾンビに包围され、ともすれば何人も同時に扱わなければならない。

一撃で、弾き飛ばせる浜崎とは違って、彼の取り巻き達にそこまでの力はない。

いや普通の高校生にそれを求めるのは酷な事だろう。

浜崎と今宮が別格なのだ。

一人であれば、周囲の取り巻き達はあっという間に殺されるだろう。

少年がスコップを構えて振り上げようとした、その肩を掴まれる。その瞬間、絶望を浮かべた少年の前で掴んでいた女の顔が吹き飛んだ。

今宮優だ。

繰り出された左回し蹴りが、口を開いていた女の顔を痛打する。

その衝撃を持ってしても、ゾンビは腕を離さない。

蹴られた事すら気にしていないように、腕をひく。

その手が、跳ね跳んだ。

優がいつしか少年のスコップを奪うと、それを振るっていた。

切られた腕がいまだ少年の肩を掴んでおり、慌ててそれをひきはがす。

さすがに、既に切り離されていた腕は力がなく、簡単にはがす事ができた。

「あ、ありがとう」

「突出するな。引きずりこまれるぞ」

優は不器用にそれだけ呟くと、スコップを彼に返して、再び戦場へと戻って行った。

その光景に、浜崎はゾンビを殴りながら満足そうに笑みを浮かべた。

一人ではないと思う、そう思えば彼の頬に浮かぶのはいつもの豪快な笑みだ。

敵を圧殺する捕食者の笑みだ。

その表情に、周囲の少年達も勇気づけられたように武器を握りしめる。

すでに武器を振るっていた腕は疲労により、力が抜けている。

息もあがっているし、春だというのに暑いほどに汗をかいている。

けれど、負ける気がしない。

彼のリーダーである浜崎がその笑みを浮かべて、いままで一度しか負けてはいない。

おまけに、その一度の原因である今宮が、いまは味方として存在している。

負けるはずがない。

「ゾンビ風情が『黒夢』を舐めてんじゃねえぞ」

振り絞った叫びが、少年たちの士気を向上させていく。

Ψ Ψ Ψ

背後に明日香達家族を守りながら、秋峰琴子も長刀を振るっていた。

僅かばかりの戦闘で、このゾンビ達の特徴はある程度掴んでいた。

それは幼少より武道一筋であった彼女だからこそ、なせる技であろう。

初対面の敵との試合のように、戦いの中で相手の特徴を判断する。敵は多い、そして強い。

力は例え女性や老人であっても、侮れないほどに強い。

もし彼女が掴まれれば、一瞬のうちに引きずられて噛みつかれるだろう。

耐久力も半端ではない。

普通であれば意識が飛び、痛みに戦意を喪失するであろう攻撃をものともしない。

仲間が倒されても、怯みもしない。

まさにゾンビと呼んでしかるべき、異形の存在だ。

だから、戦法としては二つ。

相手を弾き飛ばして、時間を稼ぐこと。

浜崎や今宮は、単独でそれができる。

それほどでもなくても、男である少年たちは二人がかりでそれを成し遂げている。

力の弱い琴子に、それは出来ない。

だからもう一つの戦法。

「夢に出てきそうだが、はあああああっ！」

気合を一閃、琴子の長刀が銀の線を描いて、浜崎の脇を抜けたゾンビに向けて振り抜く。

それは首に正確に吸いこまれ、一撃の元でゾンビの首が吹き飛んだ。

刃引きをしている刀とはいえ、元は鉄製の刀である。

速度と場所、そしてタイミングが合えば、相手の首を飛ばす事も可能。

一撃必殺。

それが琴子の選択した戦法。

それまで人間であった人へと向けて刃を走らせるのに、抵抗はあるが。

けれど、私にも守りたい者がある。

親友と、その家族を。

守りたいと思う。私の力はそのために身につけたのだから。

Ψ Ψ Ψ

倒しても倒しても湧きあがるゾンビに、浜崎は嫌気を浮かべていた。

弾き飛ばす事に専念しているため、ゾンビの数は遅々として減らない。

むしろ、その騒ぎに気づいてゾンビの数が増えている印象がある。やべえなど、小さく呟いた浜崎の隣に、今宮の姿があった。

「で、浜崎。今後のプランを聞いていいか？」

「あ、何だ？」

「プランだよプラン。計画って奴だ、このままじり貧で潰されるつもりか？」

「そんな奴があったら、最初からそうしているよ！ 全員倒したら、終わりだろうが」

「そんな一か零かの選択は計画ってよばねえ」

呆れたように、優は嘆息。

やがて、少し考え。

「外。定期バスだったか——あれが、放置されていた」

やがてぼつりと呟いたのは、ここに来る途中で見たバスだ。

この複合施設シルフィーと駅を結ぶため、定期バスと呼ばれるバスが運行している。

車を持たない多くの人間は、そのバスでこの施設にくる。

それが放置されていた。

ゾンビに襲われたのか、はたまた別の理由か。

「そりゃ、どこだ」

「バス停だ。二台くらい並んでいた」

バス停かと、浜崎は思案する。

バス停は最初に、このゾンビが発生した場所だ。

広いロータリーと駐車場になっており、そこからこの施設に客は入ってくる。

そして、この倉庫は海からの輸送のため海岸にほど近い場所だった。

つまり。

「真逆だな。遠いぞ」

女性も子供もいる。

走っても追いつかれるかもしれないし、何より施設を抜けると言う事は他のゾンビをおびき出しかねない。

「このままここにいても、結局は同じ事だろう。そろそろ他の奴らの息があがってきている」

視線をめぐらせれば、確かに——最初は元気だった少年たちが、いまはしゃべることも億劫というように、ただただ力任せに武器を振るっていた。

潰されないのは、その合間合間に浜崎と今宮が救出し、秋峰琴子

が長刀を振るっているからだろう。

わずか一つでも崩れれば、あっという間に押しつぶされる。まさに砂上の楼閣であった。

確かに潮時だろうと、浜崎は呟いた。

「なら、ショッピングセンターにこもるって手はないのか」

「ガラス張りの入口しかない場所ですか？」

「店を閉めて入ってこないようにすれば、何とかなるんじゃないか」
「三日だな」

そう優が即答した。

「水もトイレも、食料もない場所で、こんな人数が詰めかけるんだ。体力的にも精神的にも耐えられないだろう。それとも三日で助けが来る予想があるのか？」

「こんな酷い状況だ、警察や自衛隊が動くだろう」

「警察か。それならすでに撤退している」

浜崎は目を開いた。

冗談だろうと言いたが、警察に行くと言っていた二見がここにいる。

そう考えれば、彼の言葉を疑う理由はなかった。

最悪だと小さく眉をひそめる。

「だが、バスに鍵がかかっていたらどうする？」

「夜中にぶんぶん走りまわってんだろう。バスの鍵くらいそつちで何とかしろ」

「無茶をいうな、バスを盗む奴がどこにいるんだ」

「えっと。俺、出来ますよ？」

二人の会話に、おそろおそろと言った様子で入ってきた。

日原昌史と呼ばれる小さな男だ。

実家が自動車工場で、趣味が機械いじりという何とも不良らしか

らぬ少年だ。

喧嘩もあまり得意ではないが、仲間のバイクを修理メンテナンスするため、重宝されている。

「決まりだな。子供は俺が背負う。先頭を走るから、そっちは後方を任せた」

「ああ。わかった。ただ問題は、こいつらが簡単には通してくれなさそうだってことだが」

「それなら――」

すっと指し示したのは、ゾンビの輪の中だ。

そこに既に持ち主がいなくなった、青色のバイクが横たわっている。

激突の衝撃によってボディがへこみ、亀裂からガソリンが漏れている。

「まだローンが5年も残っているんだけどな」

「この騒動だ。ローンも一緒に吹き飛ぶさ」

「だいいいんだけどね」

優が苦笑を浮かべ、ポケットからオイルライターをとりだした。

点火、一瞬の迷いを残してオイルライターを投擲した。

それは宙を舞い、ゾンビの中央――バイクへと、狙いたがわず、落ちた。

逃走

「全員、下がって耳をふさげえっ！」

ライターが投げられた瞬間、浜崎の怒声が響いた。

直後、ゾンビの中央から衝撃と爆音が響く。

バイク一台の爆発である。

それほど大きなものではなかったとはいえ、何の準備をしていなかったゾンビの中央で炎と破片噴き上がり、その衝撃がゾンビを崩す。

いち早く復帰した優が、まず後方にいた陽菜の腕に抱かれる和馬へと近づいた。

「逃げるぞ、その子は俺が連れていくからついてこい」

「え、うん。お母さん、和馬を渡して。今宮君なら大丈夫だから」

「あらあら。ずいぶん信頼しているのね」

「ちよ、そんな事いつてる場合じゃないでしょ！」

「まったくだ」

眩きながら、いまだ怖がる子供に今宮は目線を合わせた。

「大丈夫だ。後ろで寝てくれればいい」

微笑し、抱き上げて背中に背負う。

一瞬母親から引きはがされる事に、躊躇を示したが、母と姉が大丈夫と断言したため、和馬は優の背にしがみついた。

すでにゾンビは先の衝撃から回復しつつあった。

元よりバイクが爆発した程度のダメージでは、痛打にもならない。破片を身体に食い込ませ、あるいは顔を燃やしながらもゆっく

りと立ち上がり始めていた。

「全員バス停に急げ、先頭は俺が行く」

優が叫び、駆けだした先には立ち上がりかけたゾンビがいる。

それに向けて膝を叩きつけてもう一度倒すと、近づいたゾンビ達を次々と蹴りで弾き飛ばした。

一瞬の空間が生まれる。

その間隙をぬって、優は走った。

Ψ Ψ Ψ

向かった先は店舗が続くショッピングセンターだ。

倉庫街からバス停まで一直線に続く道がある。

逆に、中央に立つショッピングセンターを回避すれば相当な遠回りになりかねない。

むろん、その分人の数は多いだろうが、体力的な問題から優はこちらを選択した。

施設を仕切っていた仕切りのガラス壁は、すでに割られていた。

すでに扉としての用をなさなくなった仕切りをまたぎ、優はショッピングセンターを駆け抜けた。

春休みのこの時期、普段のメインストリートは、多くの買い物客で溢れんばかりに賑わいを見せている。

ブティックは春物の服を並べ、紳士服店ではセールが始まっていた。

カバンや宝石のブランド店も、子供向けのおもちゃ屋も。

頭上には二階の店舗内を覗く廊下があって、前方に位置したエスカレータからあがることのできた。

どこにも人の気配はないが。

ただ小さく流れるのは店内のポップなBGMだけだ。

シャッターが閉まっていないだけで、いまにも営業できそうな空間はまるで異次元に迷い込んでしまったように感じる。

響くのはタイル張りの床を駆け抜ける音と荒い呼吸音。

誰もが無言のままに、足を進めていた。

遅れて、ガラス戸を突き破る音が聞こえる。

見なくてもわかる、それはゾンビ達の足音であって、彼らを追いかけているのだと。

「急げ！」

浜崎の声が、後方から追いたてる。

けれど誰もが限界に近い速度で足を動かしている。

手を抜けば死ぬ。それがわかつているからこそその疾走だ。

振り返れば、やはり遅れているのは明日香と陽菜だ。

その背後から心配げにせかす、浜崎と琴子の姿があった。

間に合わない。

遅々として遅いこちらとは違って、ゾンビ達は疲れを知らない。

優や男はともかくとして、一般人の女性である彼女らは出口まで間に合わない。

と。

「お、おい。二見！」

明日香がこけた。

「……ここでお約束か。おい、名前は？」

優は嘆息。

唐突に声をかけられた、隣の男は戸惑いながらも滝口と名乗った。浜崎には見劣りするものの、高い身長をした男だ。

どこかで見たことがあると思えば、先ほど女ゾンビに肩を掴まれ

ていた男だった。

「ちょっと頼む」

背後に背負った和馬を預け、踵を返す。

「な、なあ！」

その背に、声がかかった。

背伸びをしたような、怖さを抑えるような言葉だ。

振り返れば、滝口に背負われた和馬が顔をあげて優を見ていた。

「ね、姉ちゃんを助けてよ。そしたら、姉ちゃんをあげるからさ！」
その言葉に優の眉間にしわが寄った。

「いらねえ。けど、任せろ」

眩きを残して、優は加速する。

Ψ Ψ Ψ

明日香を助け起こそうとした浜崎の隣を、風が抜けた。

それは優と言う名の暴風だ。

店舗の看板を手にし、一撃。

迫ってきていたゾンビの群れに、痛撃を加えながら突っ込んだ。

「連れてさっさと逃げろ」

「今宮君っ！」

悲鳴のような声を残して、明日香が浜崎に抱え上げられた。

一瞬、浜崎と視線が交錯する。

強く頷いた後、浜崎は明日香を抱えたままに走り出した。

声が遠くなる。

だが、その声を振り返る余裕はなかった。

伸ばされる手を掻い潜りながら、優は明日香達とは逆——前方に

走る。

どうやらと、伸ばされる手をかわしながら優は小さく呟いた。
このゾンビが視覚や聴覚を頼りにしているかはわからなかったが、
どうやら思考という点においては大きく欠けているらしい。

後方から追いかけていたゾンビは、いまではもっとも近い優を標
的にしていた。

誰も浜崎達を追おうとはしない。

それは良くも悪くも――。

「数が多い」

いかに優の反応速度が優れているようにも、伸びる手全てを掻い潜
るのは不可能だ。

払い、あるいは押しのけながらも、ジャージの肩が掴まれる。

「くそ」

舌打ちを一つしながら、ジャージを脱ぎ捨てる。

突如軽くなったジャージに、態勢を崩すゾンビに、白いTシャツ
姿となった優が蹴りを打ち込む。

倒れかけていたゾンビは、他を巻き込んで転んだ。

多いと。

すでに浜崎達は遠くに行っており、もはや優がここにいる必要性
はなくなっていた。

逃げようとも思うが、その間にはゾンビの壁が出来ている。

視界を振る。

左右は女性向けの洋服屋とCDショップだ。

後方――倉庫街へと抜け出る道が一直線に存在していたが、戻っ
たところで先はないだろう。

優の視界には二階へ続くエスカレータが入った。

見上げる。

二階の店舗へと続く廊下が、伸びていた。
思案している時間もない。

優はエスカレータへ向けて走り出していった。

Ψ Ψ Ψ

二階もまた誰もいない空間だった。

襲われた多くは逃げたのか——あるいは。

後方から続く、無表情の人の群れを見て優は顔をしかめた。
どちらにしようと、逃げる事には変わりがなかったが。

走り出せば、真っ直ぐにバス停方向に足を進める事ができた。

その先にエスカレータはない。

「また落ちるのか」

嫌そうな顔をして、優は息を吐く。

それしか方法がないとはいえ、現代人であれば二階から降りるには階段を使いたいものだ。

それが一日に二度も、自由落下を経験することになるとは想像もしていなかった。

もっとも、それしか方法はないが。

すでに先頭のゾンビは二階へとあがっている。

息が切れる。

その視線の先。

「おい」

優の表情が引きつった。

角を曲がり走っているのは、ゾンビに追われる少女だ。

まだ小学生くらいで——悲鳴すらもあげず、ただ真剣に走っている。

それはともすれば、運動会のようにも思えた。

後ろに続くのが無表情なゾンビ達ではなければだが。

ともあれ。

「なんでこっちに逃げる」

既に後方はゾンビが続いている。

一方、あちらもこちらに気づいたのだろう。

一瞬眉根をあげる。

互いが互いに、お前邪魔だという視線を向けながら。

迷いは一瞬。

少し早いが右側へ飛ぼうと、手すりを掴んだ——その裾を小さな手に掴まれた。

「こっち！」

呟き連れて行こうとするのは、先の走った少女だ。

視線の先には、廊下がある。

店舗街から左——大規模なホームセンターへと続く渡り廊下だ。

少女はそちらに向けて走ろうとしているらしく、掴んだ裾を離さない。

ここから飛んで、バス停に向かった方が早いのだけれど。

そう思わないでもなかったが、すでにゾンビに前後を囲まれて迷う時間もない。

「ああっ！」

優は頭をかき、少女を抱き上げるとホームセンターへの道を走りだした。

ホームセンターのガラス戸は幸いなことに破られていなかった。それは厚手のガラスである事と、逃げる時の騒動のためか片側の扉が開きっぱなしであったことも幸いしたのだろう。

叩きつけるようにそれを閉め、扉の取っ手に看板を差しこんだ。

『今日は31日が休みです』

そう書かれた看板は簡易の門となって、ゾンビの行く手を阻んだ。そうしておきながら、ホームセンターの中を走り。

菓子売り場。

その場所で――同時に二人は息を吐いた。

手斧

体力的な問題だろう、少女は腰をおろすと荒い息を繰り返した。座りこそしないものの、優も息を切らせている。

見下ろす。

年のころは小学六年生頃だろう。

黒色の長い髪と同色のワンピースを身につけた少女だ。

その服装や顔立ちからは育ちの良さを窺う事ができた。

あと少し歳をとれば、深窓の令嬢と呼んでも差し支えないだろう。

いまは子供っぽさが、それを邪魔しているが。

見上げる表情は何か言いたそうであったが、荒れる息が言葉を邪魔している。

やがて諦めたのか、言葉よりも呼吸を整える事を優先した。それは優にとっても幸いであったが。

がんと強い音が鳴っている。

それはガラスを叩きつける音だ。

例え視界から消えたとはいえ、存在自体は感じられるらしい。

いかに分厚い強化ガラスとはいえ、そう何分も持つことはできない。

何より、バスに向かった明日香達を待たせるわけにもいかなかった。

荒れる息を抑えて口を拭い、優は足を動かす。

「――に、に」

それを止めるかのように、少女の声が聞こえる。

振り返れば、深い息の中で必死に言葉を口に出している。
じと目で。

「逃げようとした」

それは先ほどの優の行動だろう。

少女を置いて、手すりから飛ぼうとした——非難するような言葉に、優は苦笑した。

まさかこの段階で、そう言われるとは思わなかったから。

「そりゃ。前からゾンビが走ってきたら逃げるだろう？」

「おいていこうとした」

肩をすくめた優に向けて、鋭い言葉がかかる。

ゾンビの時の全力疾走といい、見かけによらず根性が座っているらしい。

笑みを深めながら、優は小さく手を広げた。

「別に君が飛ぶことを俺は止めはしないさ。それにこんな状況だ。人の事を助けている余裕もない」

「うそ」

呟かれた言葉に、優は目を丸くした。

「上から見た。女の子助けようとしてたくせに」

「そりゃ……」

髪をかき、優は苦笑する。

良く見ていたなど。

「彼女には助けると言ったからね」

「じゃあ。私も助けて」

「残念ながら、俺の手は二つしかない」

Ψ Ψ Ψ

ガラス戸を叩く音が、室内に響いていた。
静けさの残る白いタイル張りの道を、歩き出す。

足音は二つ。

運動靴と小さな飾りのついた靴だ。

優が歩けば、少女の足音もそれに続いた。

優が止まれば、足音も止まった。

「別に付いてこなくてもいいんだぞ？」

「その方が安全」

「俺は危険なんだが」

困ったように優は呟くが、少女はがんとして譲らなかった。
ただ真っ直ぐに優を見ている。

「どこ行くの？」

問われ、優は諦め気味に呟いた。

歩き始めた方向は、扉とは違うホームセンターの中ほどだ。

菓子売り場を通り過ぎて、日用雑貨を抜ければ、そこに目的の場所があった。

「逃げるにしても、武器が必要だろう？」

そう言って立ち止まったのは、大工道具のコーナーだ。

色とりどりの工具が壁に並んでいる。

その光景に、少女は驚いたように見上げて、周囲を見渡した。

「凄い」

と、小さく呟く。

確かに、このホームセンターは無駄に品ぞろえが豊富だ。

スコップの種類だけでも、丸型のものや角型のもの――材質が違
うものまで揃っていた。

本来の用途とは完全に違うが、今の状況にとっては渡りに船だろう。

壁にかかる工具を見ながら、優はゆっくりと売り場を歩き出した。最初に見たのはスコップだ。

第二次世界大戦において、接近戦で最も人を殺したのは銃剣でも拳銃でもなく、スコップだったと言う話は有名である。

手にして、優は小さく首を振った。

相手が一人であつたのなら、心強い武器なのだろうが――多人数を相手に向いている武器ではない。

打撃力はあるが、同時に機動力に欠けていた。

それを棚に戻しながら、歩き出し――引きずる音が聞こえた。

眉をひそめる。まだ残っていたのかと、レンチを手にして振り返り、優は目を丸くした。

少女だ。

少女が必死の表情で、手にした武器を持って歩いていた。

あまりに重すぎて、それが地面にこすれ、動くたびに引きずるような音を立てていた。

「最近ホラー映画が流行りなのか？」

「？」

優の疑問に――そのチェーンソーを引きずった少女は、不思議そうに首を傾げた。

首をかしげる様子に、何でもないと言ふと首を振る。

「そりゃあ確かに強力だろうが、それを持てるのか？」

「だいじょ……う、ぶ」

力を込めて持ち上げようとした、けれどチェーンソーは途中まであがると再び地面に叩きつけられた。

動かしていない状況でこれだ。

エンジンがかかって、刃が動く遠心力がかかれば耐えられるものではないだろう。

むしろ味方を切りかねない。

「なんだ、そういうのは大人になってから持つと良いと思うよ」
まるで携帯電話を断る親の台詞だなと苦笑しながら、優は元の棚を指さした。

言葉に、むっと眉をしかめ少女が尋ねる。

「何がいいの？」

「そうだな……」

考え、優の視線が工具の棚に止まる。

斧だ。

長さ三十センチほどの短い手斧が、かけられている。

「こういう方がいいだろう。頑丈だろうし、何より小回りも利く」
それを二つ、両手にして回した。

「うん。重さもちょうどいいしな」

「そう。じゃあ……」

小さく頷いて、少女は背後を振り向いた。

「試し切りしてみたら？」

そこに――過去に客であったのだろう――買い物カートを押す、無表情の男がいた。

ガラガラガラ。

カートを押しながら、無表情の男が真っ直ぐに走る。

静かな室内だ、その音は反響してやけに大きく響いた。

「何だったらゆず――」

声をかけた優の視線の先、少女は既に優の背後に陣取って動こうとはしていない。

持っていたチェーンソーも横に投げ捨て、下手をすれば優を置いて逃げるつもりだろうと——かわさない言葉の中で、優は確信した。まあ、それでもいいがと、同じような事を考えていたため非難する事も出来ず。

ただ近づいたカートに向けて、蹴りを繰り出した。

男の勢いと繰り出した蹴りが激突——しばしの停滞と同時に吹き飛んだのは男の方だ。

カートを手放した男に向けて、優が斧を振り上げる。

「どうしたの？」

と、止まった優に尋ねたのは少女だ。

優が斧を振り上げたまま、正面を見て固まっている。

すでに男は地面に叩きつけられた衝撃から回復し、立ち上がるうとしている。

危ないと言おうとした、その前で優が踵を返して走り出した。

少女の隣を駆け抜ける。

そこに優の影で見えなかった状況がはっきりと、少女の目に映った。

「またおいていこうとした」

小さく呟いて、走り出す。

そこに——すでにガラス戸を破ったゾンビの群れが、姿を現していた。

化けの皮

走る。

「試し切りは？」

「したいのなら、貸してやるよ？」
走る――走る。

二人は全力疾走で走っていた。

決して優は手を抜いているわけではない。

けれど、少女の足は優に匹敵するほどに速い。

駆け抜ける二人の足音に続いて、ゾンビが追いかける。

このままおいていこうかと、邪悪な事を考えた優の足が突然払われた。

こける事はなかったが、痛みに関をしかめる優に、

「いま、酷い事考えた」

「君は予知能力でもあるのか？」

「考えたことは否定しないんだ」

「まあ、考えなかったかと言えば嘘になる」

「鬼」

小さく罵りあう先で、角を曲がりなおも走る。

「どこにいく？」

「バス停」

眩きながら、その前にこの建物を出なければなと考える。

入口――そこは既にゾンビの群れが扉を破り、侵入口になっている。

だから、廊下を駆け抜けて一階の階段を目指す。
幅広の階段を駆け抜けて、少女が立ち止まった。
ゾンビだ。

食料品売り場であったそこにもまた、地獄だ。

インスタント食品の棚の先で、無表情の人間が一斉に顔を覗かせる。

その異様な光景に、少女が息を飲んで足を止めていた。

「どうするの？」

「さて……」

優は肩をすくめ、インスタント食品の棚を強く押す。

膨大な量の食品に、棚は小さく揺れるだけだ。
けれど。

「っ！」

優が肩からぶつかって、棚は一瞬の後に――轟音を立てて倒れた。
顔を覗かせたゾンビを巻き込み、さらにその先の乾物の棚を巻き込んでいく。

轟音が次々に響き、それはまるで大型のドミノ倒しだ。

倒れる棚に嬉々として優に迫っていたゾンビが、衝撃に巻き込まれていく。

轟音が終われば、そこに立っているのは優と少女だけ。

「道は出来たな」

「……斧使ってない」

呆れたような少女の言葉に、肩をすくめ――優は走りだした。

一階の入口を抜けると、バスが前後に動いていた。

狭いロータリー上で、少し進み――そして後退する。

それは群がるゾンビをひきながら。

「おせえ！」

ドアの開閉口でただ一人立ちふさがる浜崎が、優を手招く。

群がるゾンビは、狭い扉の前にふさがる浜崎によって、退場させられている。

「あと二時間くらいは大丈夫そうだな」

「――後ろがなければ」

「ああ、急ごう」

背後からの気配を感じ、優は走った。

振り返るゾンビの首を斧で叩き切り、返す刃が頭を貫く。赤茶けた液体が飛び散るのを背にして、さらに加速した。

その刃には一切の容赦と言うものがなかった。

無表情とはいえ、人の姿を模している。いや、正確にそれは数時間前までは人であった存在だ。

それを容赦なく叩きつぶし、道を切り開く。

バスまでの距離はあっという間に縮まった。

「手を伸ばせ！」

浜崎の声に手を伸ばし、転がるようにバスに乗り込んだ。

「出せ！」

言葉と共にバスが勢いよく発車する。

それは群がるゾンビを蹴散らしながら、道路を加速していった。

Ψ Ψ Ψ

さすがのゾンビもバスの速度にはついてこれなかった。

立ちふさがったゾンビはバスの巨体によって弾き飛ばされ、吹き飛んでいく。

運転に慣れていないのか大きく蛇行しながら、看板や標識にぶつ

かるって衝撃が抜けた。

「いてえ！」

叫びが周囲からあがる。けれど、運転席に座る日原に謝る余裕はなかった。

瞳を見開きながら、泣きそうに——ただアクセルを踏み続ける。左右に揺られる中で、落ちつくと浜崎が声をかければ、少しはマシになったようだ。

その様子に苦笑を浮かべながら、優は座席の一つに腰を下ろした。「お疲れさん。助かった」

「ああ」

浜崎の言葉に、優は右手をあげて答えた。

運転席からゆっくりと優に近づいていく。その長身にとって、バスの天井は低すぎるようだ。

頭をこすりそうになって、小さく屈んでいた。

「まあ、なんだ——それと二つ話を聞いていいか？」

「手短にな？」

「ああ。ちょっと見ない間に、何で戦場から帰って来たような格好しているんだ？」

言葉に優は自分の身体を見下ろした。

すでに着ていたジャージの上着はゾンビによってはぎ取られ、白いシャツへとなっている。それもゾンビの血によって染まり、ところどころが破けている。

酷い格好だった。

まともとは言えないだろう。さらには両腕には血ぬられた斧がある。

モヒカンに肩パットでも装備すれば完璧だろう。

そう考えて、優は苦笑を浮かべ、答えた。

「家庭の事情だ」

「お前の家はどこの世紀末だ」

皮肉気に浜崎は笑い、もう一つと指を立てた。

「その子を紹介してくれ」

「あ？」

振り返れば、背後。座席に深く腰かけた少女がいた。

優が乗るのと同時に、優の背にちゃっかりと飛びついて来ている。紹介しようとして、名前を知らず、しばらく悩んだ。

考える優が視線を感じれば、周囲の者も全員が優と浜崎に集中していた。

疑問に思っているのだろう。だが、今更知らないとも言えない。だから。

「ただの背後霊」

「弓奈」

視線が集まった。

小さく呼吸を整えながら少女は真っ直ぐに浜崎を見た。

「阪木弓奈」

「――らしい」

「いや、てめえ。絶対わかってなかっただろ！」

「うるさいな」

耳に手を突っ込んで迷惑そうにする優に、そこで初めて小さく少女は笑った。

Ψ Ψ Ψ

バスは中型の、市営バスと同等のものだった。

車内の前方と半ばに出入口の扉があり、前方はシルバーシートになって座席の間隔が広がっていた。

後方のロングシートには、明日香達家族三人と琴子が席を占めており、その前の席には浜崎の部下が疲れたように顔を落としていた。

運転席には小柄ながら日原が座り、最初の時点とは違って落ち着きを取り戻していた。

左右の壁にぶつかることも少なくなり、ゾンビに追われなくなつたため速度も落ちている。

ようやく落ち着いたと言う印象だろう。

半ば——シルバーシートに座るのは、優と弓奈と呼ばれた少女だ。つり革に体重を預けながら立つ浜崎が苦笑を深めながら、問いかけた。

「で。どうする？」

と。

言葉は確認のためのものだ。

先ほどまでのからかいとは違い、真面目な表情だった。

だから優もまた表情をひそめて、少し眉根を寄せた。

「幹線道路——は避けた方がいいな。特に街から外に出る通りは」

と、運転席に聞こえる声で呟いた。

運転する日原自身も、今後の行先には注目しているのだろう。

バックミラー越しに優と視線があった。

「なんで、街から逃げた方がいいんじゃないかねえか？」

「でかい通りは、もっか渋滞中だ。バスが通れる道なんてないよ」

「う、うん。ここに来るまでも結構、車が止まって通れなかった道があったよ」

優の言葉に援護するように、明日香が口をはさんだ。
まじかと浜崎が天井を仰ぐ。

「じゃ、この街から出れねえじゃねえか」

「というか。街の外は安全だって保証があるのか？」

「……ねえな」

優の言葉に、浜崎はしばらく考えて首を振った。

一つの街がこの状況である。

本来であれば、助けに来るであろう治安部隊は一向に姿を見せない。
い。

そればかりか大人の姿すらない。

明日香の母親を覗けば、二十にも満たない学生がバスを運転している。その異常な状況下で、街の外に出れば当然の生活が待っていると浜崎は安易に考えられなかった。

そして、それは他の者たちもそうであつたらしい。

ただ心のどこかでわかつていた事であっても、それが口にされれば浮かべるのは絶望しかない。

ざわめきが大きくなって、後部座席が騒がしくなっていた。

「なら、どうする」

「どうするも何も——とりあえず、俺は降りる」

小さく手を振った優に、浜崎が大きく目を開いた。

言葉の意味が理解できず、一瞬あんぐりと口を開き、

「な、何言ってるんだ？」

「いや、降りるよ。どこか山にでもこもって静かにしてる。というか、それが一番安全だと思うけれど」

「やま……山か」

浜崎はその意味を理解して言葉を反芻した。

確かにそれが一番安全かも知れない。

ゾンビが大量にいるだろう街に向かうよりも、山に向かった方が
良い。

それで事態が沈静化すればよし、例えゾンビが沈静されなくとも
生きる確率は飛躍的に伸びるはずだ。

「確かに。わかった、日原——山に向かうぞ！」

「わ、わかりました！」

「いやいやいや」

叫んだ浜崎の言葉に、優が慌てたように手を振った。

「山に入るのは俺だけでいい。というか、ついてくんな、邪魔だから」

はつきりと優が断言した。

Ψ Ψ Ψ

優の断言した言葉に、バス内のざわめきが一瞬おさまった。

聞こえる音はバス内に響くエンジン音だけだ。

「な、何言ってたんだっ！」

「そんな大声だすな。当然だろう——人が増えれば、ゾンビに会う
可能性は高くなる。それは理解できるな？」

「あ、ああ」

「それなら分散して、人のいないところで生活した方がいい。それ
がおかしいことか？」

問いかけるような言葉に、浜崎は言葉を失った。

それは正論だ。

人が集まれば、ゾンビに出会う確率も必然的に高くなる。

いや、それだけではない。優は言葉にできなかったが、仲間内から

ゾンビが出現する確率も高くなるのだ。

この異常な病が空気感染によってもたらされた——その恐ろしさを今更ながらに浜崎は気づいた。

安全を求めるならば、一人で——安全な場所にこもる方がいい。それは理解できた。
だが。

「二見は？ それに、その女の子をお前は見捨てるのか？」
理解できるが、それに納得できない。

見捨てるという言葉に、小さく優は瞳をあげた。

「既に一回、危険は冒している。それ以上を求められてもな」

「ちょっと今宮。あんた明日香を見捨てるつもり——」

はつきりとした見捨てる言葉に、後方の座席で琴子が叫んだ。
けれど、その言葉を止めたのは浜崎の厚い手だ。

殴りつけて、拳の甲がはがれ血がにじみ出している。

その分厚掌に制止されれば、琴子は疑問を持って彼を見上げていた。
た。

「批判する事はない。忘れているかもしれないねえが、今宮も俺も高校生だぞ？」

強い言葉に、琴子は小さく目を開いた。

でもと、さらに言葉を続けようとして——肩に手がおかれた。

明日香だ。

小さく首を振っている。

「そうだよ。うん……私は家族を助けてもらった、それだけで十分だから、次は今宮君に生きてもらいたいと思うよ」

「な、何言ってるのよ。あいつは見捨てるっていつてんのよ？」

「いや、見捨てるっていうか――。だって助ける必要ないよね？」
驚いたような明日香の言葉に、琴子は目を見開いた。
そうだと考える自分と、否定したい自分がいる。
守りたいと考える自分と、生きたいと考える自分だ。

自分は守りたいと思う。けれど、死を覚悟してまでと問われると
琴子ですら自信がない。

ましてや、命を強制するほどには。

「別に悩まなくてもいいさ。ただ、生き残るには集まるよりも分散
した方がいいと。俺はそう思う」

呟かれた言葉に、返す言葉はなかった。
どうすれば生き残れるか。

そんな事考えたこともなかった。

ただ、この異常事態に――人がいれば安心すると。

そう思っていた者が大多数であって、明日香と浜崎――そして、
今宮優だけが答えを考えていた。

その考え自体はばらばらだったかもしれないけれど。

否定の言葉が出せず、沈黙が流れた。

「ええと……で、向かうのは山でいいんすか？」

沈黙を破ったのは、運転手の場違いな言葉だ。

Ψ Ψ Ψ

その戸惑いを持った言葉に、誰も否定の言葉を言えなかった。
今宮と対立する浜崎の部下はもちろんのこと、琴子でさえも。
山へと至る道は、シヨップینگセンターからは直線距離だ。

ちょうど、円を描いた市が大高市だとすれば、その左右に至る幹線道路が市の外へと至るみたいであり、上下に描いた直線が海と山をへと連なる道であるからだ。

左右の幹線道路とは違い、ゾンビすら出ないスムーズな道のり。走れば、数十分もすれば山へと付いてしまうだろう。

そんな貴重な時間がわかっていてもなお、言葉を発する事ができない。

だから。

「ふんふんーん」

鼻歌交じりに、荷物を整える少女の姿がより一層浮きだって見えた。

それは遠足に向かう前夜の様子のよう。

おそらくはショッピングセンターで手に入れた者だろう、小さなチョコバーやがらくたを手製のポシェットに詰め込む様子は、まるで準備を楽しむ小学生そのものだ。

当然、言葉に迷っていた生徒たちの視線が一身に集中する事になる。

「ええと。聞いてた？」

戸惑ったような明日香の言葉に、弓奈は顔をあげた。

不思議そうな顔で首を傾げ、

「ん？」

「え、ええとね。いまの琴子との会話」

「見捨てられた」

いや、そうだけれどもと、明日香は内心で呟いた。

悪い言い方をすれば、そうなるのかもしれない。

その言葉にショックを感じないと言え、嘘になる。

けれど——まるで、他人事だよな。

少女の勘違いを訂正しようと思える、明日香の前で少女が言葉を続ける。

「だから、ついてく」

「いや、だから。ついてっっちゃ駄目なんだよ?」

「なんで?」

問われたのは疑問の言葉であって、明日香は答える言葉を失った。何故と問われれば、返す言葉もない。

優が一人が良いと言っていたから。

けれど、それは優の考えであって——少女を止める言葉ではなかった。

ただ、ついていくと断言する。

その言葉に、優は頭痛を感じたように眉をひそめていた。

何でこうなるんだと——言わなくても、顔に言葉がかいている。

不思議そうな少女と、頭を抱える二人の頭上から笑い声が響いた。

浜崎だ。

楽しそうに、笑いながら浜崎は言葉を続けた。

「負けだろう。今宮」

「何が負けかわからないが——」

歯がみをする言葉に、浜崎は笑いを深くした。

「そのお嬢ちゃんの言う通りだ。お前が山にこもるといいうのはかつてだ。けれどな、俺達がそれについていくっていうのも、そりゃかってなことだ」

「酷い言い草だな」

苦い顔をした優であるが、浜崎の言葉を止める事ができないでい

た。

ついてくるといふ意志では、いかに優が辞めろと言ったところで止める事は出来ない。

説得しようとした優の前で、浜崎は笑みを消した。

「俺たちはよ」

と、周囲に聞こえる言葉で呟く。

「喧嘩のやり方は知っている。そこらの奴には負けねえ自信もある。けどな？」

問うた言葉は真っ直ぐな視線で、だからこそ不愉快そうな視線を持って優はそれを見た。

「今は喧嘩とかそういう次元の問題じゃねえ。だからこそ、俺達はお前に頼りたいと思う」

「他人任せも甚だしいな」

「だろうよ。お前からすれば迷惑この上ないだろう。自分だけの責任が、俺達の責任まで押し付けようとしているんだからな。でも。俺にはできねえんだ」

はっきりとした言葉だった。

「守ってやりてえと思っても、俺には誰も助けられねえ。助ける方法すら思い浮かばない。俺じゃ駄目なんだ、俺じゃ助けられない。そう思う」

「買いかぶり過ぎだな。俺が助けられるわけがない」

「かもしれない。けど、何か考えがあるんだろう？俺はそれで裏切られたとしても文句はいわねえ。元々自分の責任を他人に押し付けたわけだから——だから」

だからと、浜崎は小さく言葉を切った。

視線が集中する。

「だから、助けてくれないか」

バスに残る数十人の視線を一身に受けて、優は戸惑いの表情を浮かべた。

黙っている。

すでに弓奈は優の答えとは関係なく、ついていく準備をしていた。信じているよと、明日香が小さく頷いていた。

誰もが優の言葉を待っていた。

「……別に助けるつもりはないが」

視線に押されるように、優が小さく息を吐いた。

「化けの皮が剥がれるまでは、付き合ってやる」

宿へ

予想通り、幹線道路は街から逃げだそうとする車で溢れている。道路を、あるいは歩道上ですら車も乗り上げていた。

持ち主はいない。

逃げたのか、あるいは捕まったのか判断することはできないが、ただ持ち主のいなくなった車両は厄介なバリケードとして、その場に鎮座していた。

大高市は三十分も走れば市の端から端まで抜ける事ができる小さな街だ。けれど、そんな封鎖された道に出るたびに脇道にずれ、あるいは後ろに下がるため、動きは遅々として進まなかった。

「山じゃないのか？」

運転席の脇で、前方を見ていた優の背後から浜崎が声をかけた。幸いにして現在、ゾンビの姿はない。

後方の座席で見張りをしていた浜崎は、周囲の様子から目的地が山ではない事に気付いた。山ならば、市を上下に走る幹線道路が一番早いだろう。

けれど、バスが進む方角は西北——街の外れの方角だった。

「一人なら山にこもる方がいいけどな。こんな人数もいたら、そうもいかないだろう」

肩をすくめながら、優は言葉にした。

バスの車内には、大人十人、子供二人の計十二人が乗っている。人が集まれば、山であっても必然的に見つかる可能性は増えるだろう。

さらに食料品等の必要な物資の数も増え、そうなればそれらを調達するためにさらに見つかる危険性が高まる。

そう説明すれば、浜崎は納得したように頷いた。

「山は危険と言うわけか。それならどうする？」

「聞くばかりじゃなくて、少しは考えてくれ」

「そうだな、学校とかはどうだ。食料はあるし」

「そりゃ、地域の避難所に指定されているからな」

苦笑混じりに優は答える。

食料があるとの言葉通り、学校や公園は地域の避難所に指定されていた。

当然、優先的に食料や電話等の通信回線が優遇され、情報も集まる事になる。

もし、これが大地震であるならば、迷うことなく学校を目指しただろう。

けれど。

「人は集まりそうだな」

そして、人が集まったらどうなるのか。

浜崎はショッピングセンターで既に体験している。

「じゃあ、船とかはどうかな。あれが泳げるかどうかわからないけど、少なくともいきなり襲われる事はなくなるんじゃない？」

苦虫を噛み潰した浜崎の隣で、明日香が声をかけた。

「学校よりはましだろうけれど。でも、逆に言えば逃げ場がないってことでもある」

封鎖された空間で、もしゾンビが侵入すれば。

いや、もし仲間内からゾンビが発生すればどうなるのか。

優は直接的には言葉にしなかったが、浜崎と明日香はそれを理解

して言葉を噤んだ。

「そう考えると、本とか映画とかの知識って全然役に立たないよね」

明日香は残念そうにため息を吐いた。

明日香が好きなホラー映画の多くは、ショッピングセンターや学校などが集まる地域が舞台だ。病院や島と言った作品もあったが、現実的ではないような気がする。

病院なんて危険度ナンバーワンは揺るぎないし、無人島には簡単にたどり着ける気がしない。

「全然ってことはないだろうさ。ただ映画に取り上げられるって事は、それなりに認知されているってことだろうからね」

「逆に映画で知られていないところかあ。遊園地とか？」

「観覧車に立て籠る気か」

「空までは追いかけてこないかも？」

「その十分後には、地上に到着だけれど」

「やっぱり、駄目だよな？」

困ったと眉尻を下げる明日香に苦笑しながら、浜崎は肩をすくめた。

「そろそろ教えてくれ。どこならいいんだ？」

「基本的には街の外れに拠点を置いた方がいいというのはわかるよな」

「ああ。いまも……外れの方に進んでいるようだしな」

当初は車両やゾンビで溢れていた街も、走るにつれてその姿は少なくなってきた。

慎重に障害物を交わしていたバスも、少しずつではあるがスピードをあげていた。

「で、一番必要なのは安全性だ。侵入されない事が大事だろうし、

次にこんな時には余り用のない場所。ついでに自家発電装置とかついていたら最高だな」

「おいおい。そんな夢の場所があるのかよ」

「夢の場所かどうかはさておいて——そろそろ着くさ」

既に運転席の日原には目的地を伝えており、バスはゆつくりと右へハンドルを切った。

都心からも離れ、街の中心街からも外れている場所は少しさびれている。

高い建物ですら五階建てが精一杯であって、ほとんどが二階建てや平屋建ての建物だった。

大規模量販店の姿はなく、個人商店の本屋や食堂が軒を連ねている。

放置されている車両もわずかながらにあったが、幸いな事に二車線の道路を封鎖するような事態にはなっていなかった。

バスが障害物を避けながら、ゆつくりとブレーキを踏む。

慣性を身体に感じながら、浜崎は座席の窓から外を覗いた。五階建ての、小さなビルが見える。

『大高都市銀行』

バスはゆつくりと、その銀行の駐車場に入って行った。

Ψ Ψ Ψ

「銀行——か」

「ま、こんな事態にさすがにのんびりとお金を下ろす奴はいないだろう」

肩をすくめながら、優と浜崎がバスを降りた。

油断なく手にした斧を構えるが、近づく人影は見る事ができない。

銀行の扉越しに、中を窺ったが見える範囲にはゾンビの姿もなかった。

確認して、手招きをする。

最初に滝口と琴子が銀行の中に入り、次に明日香達が続いた。

その間も浜崎と優は、扉の外だ。

周囲の様子を窺いながら、全員が店内に入るまで外で待つ。

バスから降りた男が店内に入って、浜崎が――そして最後に優が店内に入った。

扉は両開きの自動扉だ。

左右に開くガラス扉に、浜崎は少し心配げにそれを撫でた。

「何かあつという間に、破られそうだな」

「そんな簡単に破られたら、世の中銀行強盗だらけになっちゃう」

「あ、ありました！」

言葉と共に、先に入っていた日原が鍵を手にして走ってきた。

室内には他に、琴子と滝口の姿はない。

三人は先行して警備員の詰所から、鍵をとってきていた。

それを受け取り、優は扉脇の鍵穴にそれを突っ込んだ。

ひねる。

いまだ電気は通電していたようで、ゆっくりと――そして機械がこすれるような音をして、扉の前でシャッターが閉まっていく。

なるほどと、感心したように浜崎が肩をすくませた。

「これなら頑丈そうだな」

「ま、防犯のため普通は頑丈に作られてるだろうな。大丈夫だったか？」

「ええ。死体がありましたけど、ゾンビは見てません」

「死体ね――」

果たして、ゾンビは死体ではないのだろうかと考えて、優は苦笑する。

考えていても答えは出ないだろうが。

「詰所に行こう……浜崎、誰かにこの場を守らせてくれ、くれぐれもここから離れないようにな」

「わかった。高木――お前がこの場の指揮をとれ、俺達が戻るまでどこか行くなよ」

「わ、わかりました」

高木と呼ばれた眼鏡の男と明日香達を残し、浜崎と優は警備員の詰所へと向かった。

Ψ Ψ Ψ

外観こそは古い建物であったが、室内はそこまで古くなく、リフォームされたのだろうか、まだ新しさを感じる事ができた。

広い室内を二分するように、長いカウンターが遮っており、カウンターから手前入口側にはソファが並び、記載用の机が並べられている。

カウンターの奥は執務用のスペースにであり、執務机や書類の他に、パソコンが――やはり電源が付いた状態で置かれていた。

床に敷かれたえんじ色の絨毯はまだ新しく、綺麗に清掃されている。

けれど、そのところどころに混乱の様子を見て取ることができる。

入口を除けば、扉は奥に二つ。

片側がビルの奥に入る扉であって、もう一方が警備員が待機する詰所だ。

ビルの奥へと向かう扉は遠く執務用のスペースの一番奥にあったが、警備員の詰所はどちらかと言えばカウンターに近い。

その室内は狭く、二部屋しかなかった。

片側は警備員の休憩スペースであって、真中に白いテーブルがあって電気ポットが用意されている。壁際には柵と鍵束をかけるフックがあり、入口のシャッターの鍵はここから手に入れていた。

狭いながらも落ち着く空間と言う場所なのだろう。

死体がなければだが。

日原の語った死体は入口そばで、苦悶の表情を浮かべながら倒れていた。

入った早々の出迎えに滝口と琴子は武器を構えたが、しばらくしてそれが動かないとわかり、二人は息をはいた。

鍵束のかかった壁に向かうには、その死体を超えなければいけなかったからだ。

しばらく無言でのにらみ合いの後に、結局鍵束を手に入れるため滝口が死体をまたぐことになったが、それでも死体はピクリともしなかった。

後は鍵を、日原に任せ——滝口と琴子は次の部屋に足を進めていた。

もう一室がモニタールームだ。

監視用のモニターが、計二十六台。

いまでも正常に動いているらしく、あるカメラは外から駐車場の様子を。また、あるカメラは店内の様子を映し出している。もちろん、それだけではなく金庫室やビル内の事務室の様子を映しているカメラもあった。

「結構いるなあ」

「ま、シルフィーよりはマシよ」

そう呟く二人の目に映るのは、無表情な人たちだ。

カメラの前を探るように歩く者、あるいは無残な死体をかじりつく者など。防犯用に備え付けられたカメラは、それらの様子を余すことなく映しだしていた。

「あそこに比べたらマシだろうけど。でも、ひのふの——全部で二十くらいはいんぜ？」

「二十ですんで良かったじゃない。これが駅前だったらその三倍はいるわよ」

「簡単に言うね」

琴子と滝口の会話は、どちらも正しかった。

街外れの古びた銀行であるからこそ、監視カメラに映る二十数名ほどのゾンビしかない。それは幸いであっただろう。だが、一対一ですら相手するのは避けたいと思う。それが、自分達の数の倍ほどののだ。

滝口がため息をつくのもまた、当然のことと言えた。

「とりあえず、この建物の地図とかないの？」

「地図、地図ねえ」

そういうながら、滝口はモニターの前に座るとパソコンを叩き始めた。

ファイルの検索をかけながら、探していく。

時間をかけずして、それは発見することができた。

「あった、これから。巡回経路って奴だな。いまプリントアウトする」

そう言って、印刷ボタンを叩いた——モニターが反転し、一瞬画面が暗くなる。

その後——琴子と滝口の間、その死体はあった。

立っている。

血まみれで、制服ごと胸肉を噛み千切られて——白い肋骨をむき出しにしながら、その警備員は立っていた。

浮かべていた苦悶も苦痛もない。

ただ、二人を見ている。

「嘘でしょ」

「ふざけんな、てめえ、死んでたじゃねえかつ」

叫びと同時に振り返った。

いる。

わずか数十センチの距離に、そのゾンビは立っていた。

滝口がスコップを振るうよりも、そして琴子が長刀を振るうよりも早く、ゾンビの手は彼女らを掴むだろう。

その身体がゆっくりと近づき——倒れた。

「危なかったな」

「つか、お前はインディアンか」

呆れたような浜崎と、肩をすくめる優の姿がある。

倒れたゾンビ——その頭部には、優の投げた手斧が深々と食い込んでいる。

掃討戦1

「は、はは……」

乾いた笑いを残して、滝口が腰が抜けたように椅子に腰を下ろした。

倒れたゾンビは、動かない。

それでも琴子は油断なく、小さくゾンビから距離をとった。

滝口自身も逃げたかったが、今更慌てふためくのは彼の自尊心が許さなかった。もつとも、それ以上に腰が抜けて動けなかったというのもあるが。

それに気づいていないのか、浜崎と優は軽口をたたき合いながらゾンビに近づいていく。

何でそんなに冷静にいられるのだと、叫びたかったが――それすらも言葉にできない。

「ありがと。でもはずれたらどうするつもりだったの？」

「それはその時に考えるさ、幸いもう一つ斧はあったしな」

「考えるも何ももう一つ投げるわけでしょ」

悪びれもせずに語る言葉に、琴子は呆れたように息を吐いた。

優は頷きながら、近づきうつぶせに倒れた死体に足をかけた。背中を押さええながら、手斧を引き抜く。

その様子から視線をそらせば、電子音が響いた。プリンターだ。

そう言えば、先ほど滝口が印刷していたと思いだして、琴子はプ

リントーに近づいた。

それは建物内の地図で、五枚――ちょうど一階に一つのペースで印刷されている。

大まかに見れば、一階は銀行としての主要スペースだ。

一階の半分は、預貯金を取り扱うスペースであり、ちょうど明日香達がいる場所だ。

そこから奥の扉を抜ければ、階段やエスカレータの他に従業員用のロッカールームや休憩室、給湯室などが残り半分に集まっていた。そこから奥に抜ければ。

「勝手口か」

後ろから紙を覗かれて、琴子は頷いた。

従業員用の出入口なのだろう。シャッターを閉めた入口と反対の裏手に抜ける出入り口があった。

「こっちは閉まっているかしら」

「閉まっているさ」

断言の言葉にどうしてわかるのか問いかけようとして、優は視線でモニターを示した。

ちょうど六番と書かれたカメラモニターは外の駐車場から、裏手を映し出している。

そこに映る鉄製の出入口は確かに、完全に閉ざされている。

納得したように頷く琴子の隣で、優もまた印刷された間取り図を覗いた。

二階は事務室のようだ。

五つほどの部屋に区切られており、それぞれ仕事を行うための部屋があった。

また、それ以外に倉庫と言う文字があって、結構なスペースが取

られていた。

「何と言うか、印象的には金庫とかしかないのかと思ってたぜ」

「そうでもないさ。預けられたお金を投資するのも仕事だし、貸したお金を管理する部署も必要だろう。それに人が集まれば、当然総務とか経理とかも必要だろう」

「……日本語か、それは」

「残念ながら。立派な日本語だよ」

「浜崎に言っただって無駄よ。ま、普通の会社なりには仕事部屋があるってことね」

琴子が肩をすくめながら、次の紙をめくる。

三階は部屋が一室、存在するだけだった。

覗きこむ浜崎が困惑したように眉をひそめている。

「なんで銀行にコンピュータールームがあるんだ。それもこんなにかい」

「一件だけならともかく、他に支店があればそれを繋ぐ回線は必要だろう」

「――い、今宮。浜崎さんのために日本語で頼む」

「いや、日本語なんだが。いいか、簡単に言うところの街でお前が十万円貯金したとする。そして、銀行のATMでさらに五万円を貯金した。合計は十五万だ。そのデータはどこにあると思う」

「つまり、ここにそれが集まっているってことか」

「ああ。当然二重三重に予備も必要だろうしね」

「ふむ」

難しい顔で眉根を寄せて、浜崎はふと豪快な笑みを浮かべて見せた。

「なら、俺の口座に百万位追加する事も可能なのか？」

「金が欲しいのか。なら、ショッピングセンターに行けばいくらでも落ちてたぞ？」

「やめておく。金よりも今は命の方が欲しい」

Ψ Ψ Ψ

四階は金庫と、その手続きを行うための受付。

そして、最上階は支店長室と来客用の部屋であった。

琴子から地図を受け取った優は、それに赤色のマジックで数字を書き込んでいく。

5、8、2、3、5と。

突然書き始めた優の様子を怪訝そうに、浜崎達は見ていた。

その疑問は、数字の後に地図上に小さく丸印をしてようやく氷解する。

「ゾンビの位置と数か」

浜崎が口にして、琴子と滝口が大きく口を開いた。

モニターと地図を交互に見る。

確かに、数はゾンビがそれぞれの階でモニターに映し出された数であり、位置は現在確認ができる場所だ。ゾンビ達は一階と二階に多く、逆にコンピュータールームや金庫のある三階と四階は少ない。

「こんなところか。さて、戻ろう」

最後に屋上に丸をつけて、優は紙をひらひらと動かすと詰所を後にする。

詰所の扉をあげれば、視線が集中した。

不安げな表情で待合用のソファに腰をかけている。

外に姿を現した優達の顔を見て、ほっとしたように皆一様に安堵の表情を浮かべた。

「さてと」

小さく発した言葉は、しかし静かな部屋にやけに大きく響いた。
「まだ安心するには早いな。モニターで確認したところ、現在この建物にはあれが二十三名ほどいる」

「なっ」

「で……」

と、悲鳴に似た声をあげた男をさえぎって、優は言葉を続けた。

「俺と浜崎、滝口と日原——あと宮下と遠藤か。以上の六名で排除に向かう」

口を開きかけた茶髪の青年、遠藤は驚きの言葉を発する事も出来ず、ただぱくぱくと口を開いた。その隣では、両耳と唇にピアスをつけた宮下が諦めたように大きなため息を吐いていた。

逆に怪訝そうな表情を浮かべたのは、この場を任された眼鏡の青年——高木と琴子だ。

「私達は？」

「秋峰と高木はこの場で、二見達を頼む。というよりも、扉を閉めて封鎖したら俺達が戻ってくるまでは絶対に開けるな」

「帰ってこなかったら、どうするのよ？」

「その時は——シャッターでも開けて大人しく逃げるんだな」

優は気にもしていないように、小さく肩をすくめた。

Ψ Ψ Ψ

扉が開いた。

緊張した面持ちで、滝口達が思い思いの武器を手にして姿を見せる。

先頭は浜崎、そして今宮だ。

背後の扉が強く閉まれば、窓の少ない廊下は昼まであるのに随分

と暗く見えた。
薄暗い。

響いた音に、最後を歩いていた遠藤が小さく言葉を発して背後を見た。

「最初は五人だったか」

「概算はな。ロッカールームまではさすがにモニターはなかったし、多くても不思議じゃないさ。ただ――少ない方が問題だな」

「なぜだ。少ない方が楽が出来ていいじゃないか」

「……い、いや、少なかったらどこかに隠れているって事になるんじゃない？」

おそろおそろと日原が口にして、滝口は酷く嫌そうな顔をする。

先ほど死体に襲いかかれた事を思い出したのだろう。

次は死体でも容赦しないと、手にするスコップに力を込めた。

扉の先は長い廊下だ。

ちょうど建物の敷地半分を窓口が使用して、残り半分が扉の向こうに存在している。

地図でみれば開けて左側に給湯室が――そして、右側が休憩用の部屋になっていた。

廊下を進めば壁に突き当たり、ちょうどそこは敷地の裏に当たる。そこから右側――L字型に廊下は続いており、歩いて右側にロッカールームとトイレが。廊下を突き当たれば、従業員用の出入口となっている。

階段は壁に突き当たった左側だ。

室内は静かであり、そして足音が良く響いた。

動いている――角で見る事が出来ないが、L字型の角の向こうで彷徨う足音が聞こえていた。

さらには休憩室の扉を叩く音もしている。

呻き声がないのが幸いであったか。いや、逆に呻き声すら経てず、ただただ生活音だけが鳴り響く状況は酷く不気味であった。

「浜崎」

小声が今宮の口から聞こえる。

休憩室に視線を向けていた浜崎は、その言葉に優を振り返った。視線が給湯室へと向けられる。

その視線に、浜崎は激しく扉を鳴らす音に隠れて——給湯室から聞こえる、小さな音に気付いた。

衣がすれるような、本当に微かな音。

しかし、それは現実の音として浜崎は手を握りしめた。

一步近づく。

瞬間、給湯室の陰から女性の銀行員が姿を現した。

口の周りを血まみれにして、なお表情のないそのゾンビは、腕の前に突き出して走り出す。

もし、気づかなければあつという間に肉薄されただろう。

浜崎は、女に向かって腕を突き出した。

浜崎の厚い手は女の突進を止めてなお、前に突き出され女を壁に縫いつける。

「宮下あつ！」

「は、はい」

名前を呼ばれ、ピアス男は咄嗟に手にしたスパナを女の顔に振り下ろした。

鈍い音が響いて、顔面が窪んだ。

けれど——痛みすら見せず、その整った顔立ちが崩れてもなお、

女は手を伸ばし続ける。

恐怖が、ただただ宮下の腕を動かした。

一撃、二撃。

次々と繰り出されるスパナと舞い散る血。

女の顔が変形して、人間のものとは思えない酷いものになった。

割れた頭蓋からこぼれるように白いものが見え、支えを失った眼球がこぼれていく。

けれど。

その真っ黒い穴となった二つの双眸で、なお視線は宮下をとらえていた。

痛い。一言も発さない声で、そう訴えかけているような気がして、宮下は楽にさせてやりたいという一心で、ただただスパナを打ちつけていく。

「な、んで、しなねえんだよ。早く死ねよてめえ！」

「宮下。さがれ！」

叫び声に、興奮したように叫んでいた宮下が一瞬止まった。

その脇を風が抜けて、スコップが光を反射させた。

一瞬――滝口のフルスイングしたスコップが女の首をとらえ、壁にぶつかる金属音が鳴った。遅れて、女の顔がゆっくりと傾き、倒れていく。

それは縫いつけられている胴体を離れ、落下した。

廊下に叩きつけられた、その首は――まるでボールのように良く弾んだ。

「はあ、はあ」

わずか一体だけだというのに、呼吸が止まらない。心臓はまるで全力疾走をしたように跳ねている。

叩きつけたスパナを持つ手がまるで別人のようで、感覚がなかった。

やったとも良かったとも思わない。

ただただ、まだあと二十二体もいるという現実の前に――絶望的な思いがした。

その首が、突然掴まれた。

何でという疑問と同時に、音がした。

それは扉を突き破る破壊の音だ。

掴まれて振り返れば、扉をぶち壊した青白い手が見える。

その先に覗く無表情な二つの双眸も。

大きく開いた木製の扉の先で、宮下を掴んだゾンビが待っている。

その様子はまるで、走馬灯のようにゆっくり見えた。

きらめく斧も。

宮下が掴まれ引きずりこまれるのと同時。あがった斧が、振り下ろされて――ゾンビの腕が切り飛ばされた。その動作と同じくして、反対の手に持った斧がゾンビの頭に激突する。

竹を割ったような鈍い音が響いて、頭を貫かれたゾンビは二度ほど小さく痙攣した。

引き抜く。

血の線を残してゆっくりとゾンビは倒れていった。

あっという間だ。

わずか数秒の出来事であり、あれほどに苦労したゾンビを――今宮優は実に簡単に殺して見せた。

「喜ぶのは早いぞ」

お礼を言いかけた、宮下を優は見ていない。

視線の先は――廊下の角だ。

し字の廊下を曲がってくるゾンビがいる。
まだ、地獄は終わっていないかった。

掃討戦2

一階のゾンビの掃討を終了し、優達は二階へと足を進めた。

その死をも恐れぬ行動力と体力、そして耐久力に今宮と浜崎はともかくとして、他の四名は苦勞した。

最初は今宮の斧が――そして、浜崎が首の骨をへし折るという荒業で対応し、また、戦鬪を重ねるうちに滝口達も次第に戦えるようになっていた。一撃は無理にしても、二人で一人を相手にすれば、力はともかくとして猪突猛進のゾンビは決して対処できない敵ではなかった。

もっとも、それは先に今宮と浜崎が何度も戦鬪を行ったからであって、いきなりのインパクトに初見ではまず咬まれていたであろうが。

「――っ！」

日原の声にならない一撃と共に、釘抜きで頭を打ち抜かれたゾンビがゆっくりと倒れていく。

「こ、これぜんぜん使えねえ」

「倉庫でそれを選んだの宮下だよね。だからもっと長い物にしろっていったのにさ」

「こっちの方が使い慣れてたけど、あいつら全然きかねえのなー」

じゃらじゃらと遠藤は手にした鎖を振って見せた。

倉庫で荷物を縛っていた大型の鎖だ。

鞭のようにしなり、振れば間違はなく痛いし、かわす事も難しい。ただそれは普通の人間が相手であった場合には、だ。

ゾンビは鎖が当たっても痛みを顔に出さない。速度すら落とさず

に突っ込んでくるため、止める事も倒す事も非常に難しい武器と言えた。

「足を狙えば？」

「それじゃ殺せねーじゃん？」

「けど、倒す事はできるよね」

「ま、それで我慢しておけ。俺なんて素手だぞ？」

「お前はおかしい」

嘆く様に手を広げる浜崎に、今宮は五人を代表して言葉を口にした。

「特殊部隊でもないのに。首をへし折るとか、人間技を超えている——というよりも、人の首はそんなにもろくない」

続く言葉に、五人が大きく頷いた。

「ひでえな！」

「いや正論だしな——それよりはあとは、三階か」

地図をめくりながら、優は叫ぶ浜崎を置いて確認する。

その間、他の者たちは周囲に視線を向けながら休憩をしていた。

室内は総務部と書かれた、小さな部屋だ。

机が五つほど並べられており、書類が散らばっている。

もともと小さな都市銀行であるから、社員の数もそれほど多くはなかったのだろう。

乱雑に荒らされた机の上、舞い散ったのど飴を手にして浜崎は口に入れた。

先では手斧を持った優が地図を持っている。

すでに振り回された手斧は赤く染まり、白いTシャツは汚れと血で赤黒く黒ずんでいる。

きっと自分も同じ格好なのだろう——黒い服で幸いだったかもし

れないが。

「そうだな、二手にわかれよう。俺と滝口、それに遠藤で五階を。浜崎達は三階と四階を頼む」

「おいおい。わかれて大丈夫か。五階は最低でも五体いるんだろう？」

「大丈夫じゃねーっ！」

思わず口にしたのは遠藤だ。

少しずつ慣れてきたとは言え、それは一人に複数で当たった場合だ。

いまだ囲まれるトラウマから解放されたわけではないし、一体多数という光景は想像もしたくない。

優は苦笑しながら、俺もだと小さく呟いた。

「けど、あまり時間がないからな」

「時間？」

優の差した時計は、すでに三時を回っていた。

「暗くなる前に終わらせたい」

「暗くなっても電気があるだろう？」

「光におびき寄せられなきゃいいけどな」

呟いた言葉に、浜崎は顔をしかめた。

あり得ないとも言えない。

そもそもゾンビとの遭遇は初めての事で、いまだに手探りであるからだ。

奴らの五感がどうなっているのかもわからない。

その状況で煌々と電気をつける勇氣はない。

「わかった。そうしよう、だが危険だと思ったら」

「そちらの到着を待つさ」

「愚問だったな」

苦笑混じりに話す浜崎の言葉に、優は小さく頷いた。

Ψ Ψ Ψ

階段を駆け上がり、三階と四階を飛ばしていく。

幸いにして途中でゾンビと出会うこともなく、走り抜けて最上階の扉を開いた。

最上階の一室もまた、大きな作り自体は一階と変わらない。

建物の裏手につながる西側の壁際に階段があり、そこから廊下がL字型に伸びている。

最上階は支店長室と来客用の応接室につながる廊下だ。

他にも小さな部屋で会議室や機械室、資料室が存在しているが、どれも小さく、おそらくは地図に載せていなかった事が想像できた。扉越しに顔を覗かせれば、ゾンビが三体。応接室の前の廊下に立っている。

同じ人間であろうが、ゾンビ同士は襲う事はないようだ。

三つと指を立てて、背後に合図を送れば滝口と遠藤は嫌そうな顔を浮かべた。

それでも音を立てないようにしながら、今宮に続くのは負けたくないと言う彼らなりのちっぽけな矜持であったのかもしれない。

「五人いなかっただけでもマシだろうけど、三人か。少し多いな」

「少しじゃねーっ。一対一じゃねえか！」

小声ながら遠藤が吐き出し、滝口が諦めたように小さく息を吐いた。

「滝口も諦めんじゃねえ。というか、ここで引いたらこれから一対

「一で戦う事になんぜ？」

「いや、そう言われても……なあ？」

「一対一じゃなければいいんだな？」

「あ。ああ、そりゃあ……」

刹那、顔を覗かせた優が斧を投げた。

それは回転して、見事に応接室前の一体にぶつかり赤い花を咲かせる。

倒れていく、その死体を見ずして優は走りだした。

「これで、三対二だな」

「そういう問題じゃねえ。ってか、心の準備くらいさせろ！」

引きつった表情で遠藤が叫び、自棄になりながら走りだした。

仲間が目の前で倒された。

その事に関心を持っていないゾンビ二名が気づき、走り出す。

変わらぬ表情で――淡々と接近する一体に近づいて、遠藤は手に持った太い鎖を足に投げつけた。

――倒すことは出来るよね。

そう呟いたのは日原だったか。遠藤はその言葉を思い出しながら、足へと絡めた鎖を思いっきり引きつけた。

突然、バランスを崩したゾンビは片足を取られ転倒する。

「なんでこんな事になっちまったんだよ」

「どけ！」

滝口が後方から叫ぶ。

遠藤を超えて、倒したゾンビに近づく――そのゾンビが跳ね上がった。

鎖の絡まりすらも苦にしない。

「なっ！」

咄嗟の事態に呆然と言葉を発した遠藤の前で、その動きは人間離れをしていた。

力任せに動かしたために千切れかけた足を軸にして跳ね起きる。

向かうのはスコップを持っていた滝口だ。

スコップを横にして止める。けれど、その力の前に滝口は押し倒された。

スコップの柄を掴み歯をむき出しにするゾンビがいる。

必死にこらえようと力を込めるが、滝口の力では止まらない。と。

背後から鎖が巻きつけられて、ゾンビの首を絞めた。

遠藤だ。

「ち、千切れるもんなら、ちぎってみやがれ！」

「が……」

そこで初めて、実に初めてゾンビは小さく言葉を漏らした。

いや、それは言葉ではなかったのかもしれない。

抵抗するように身体を後方に倒す、その眼前でスコップが振り切られた。

Ψ Ψ Ψ

P r r r――。

それは支店長室の電話機の音だ。

五階の掃討を終えて、支店長らしき白髪の男性を倒してすぐのことだ。

ほっと気を抜いてソファに身体を沈めていた遠藤が跳ねるように起きて、滝口もまた疲れたように視線を電話機へと向ける。

鳴り響いてやむことがない電話を、優は迷ったように取った。

「もしもし？」

『ああ、ようやく出たか。大丈夫か？』

受話器から鳴り響く声は、浜崎のものだった。

微かに聞こえる音に、遠藤と滝口もほっとした表情を浮かべている。

「よくわかったな」

『こっちの受付に内線電話つーのか？ 電話番号表があったからな。それより無事か？』

「無事ってのが何を現しているのかわからないけれど」

優は小さく苦笑しながら、周囲の様子を見渡した。

すでに遠藤と滝口の身体は血に染まり、こびりついた汚れが顔にまで付着している。

五体ものゾンビを片付けた後だ。それを拭う体力もないとばかりに、みな疲れ切っていた。

「少なくとも怪我はない。そちらは？」

『ああ、こっちも予定通り三階と四階を制圧した。予想よりは多かったが、誰も怪我もしてない。ただ』

「ただ？」

『ちょっと。想定外な事があった』

「想定外？」

『ま、話すより見てもらった方がはやい。いまから三階に来てくれるか？』

Ψ Ψ Ψ

「なるほど。想定外ね……」

「な、何ですか」

小さく息を吐いた優の言葉に、戸惑う女性の言葉が聞こえた。

ショートカットの若い女性だ。

ベージュ色のつなぎ服を身につけて、手にするのは工具だろう。
小さいマイナスドライバー一本を握りしめながら、見下ろす面々
を恐怖で見上げていた。

「あ、あなた達は何です？ お、お金なら金庫は上にありますの」

大型のコンピュータを背後に、たどたどしく口を開く。

涙でぐしゃぐしゃになった瞳で、警戒心をむき出しに見上げている。

近づけばマイナスドライバーを振り回すため、近づくことも出来ないでいた。

何があったと問いかけるような視線を向ければ、浜崎が小さく肩をすくめ。

「ゾンビを殺すのを目撃されてな」

と、一言だけ小さく呟いた。

なるほどと周囲を窺えば、そこはサーバ機が置かれるシンプルな部屋だ。

防犯性を考えられて、ガラス張りの部屋は空調が効いており、鋼鉄の扉に遮られていた。

そこにいれば、外部の騒ぎなど気づかなかったであろう。
問題は。

「また、派手にやったもんだ」

苦笑する優の視線には、ガラスに生々しく残る赤い手形がある。

頭を潰されたのだろう、まるでスイカを叩きつけたようにガラス戸に赤い血痕が付いている。

サーバ室に入る前に、確かに一体のゾンビが倒れていたなと思い。

「で、こうなったわけか」

「助けて……」

命だけはと――懇願の言葉に、女性はしゃくりあげた。

まだ若い。つなぎの作業服姿に似合わず、年のころは大学を卒業して間がないように見える。決して荒事が得意なような風貌ではなく、むしろ正装すればどこかのお嬢様と言っても差し支えはないだろう。

どうするという問いかける視線に、優は苦笑する。

「とりあえず、ここは良い。浜崎、何人か連れて屋上もついでに見てきてくれないか。残りは一階で待機を」

「わかった。遠藤、日原ついてこい。滝口と宮下は下で高木と合流だ、俺が行くまで扉はあけんな」

慣れたように指示をだしながら、歩き出す。

扉を開けて外に出て行ったところで、優は視線を下ろした。

泣いている女性がいる。

どうしよう。

まだゾンビの方が対処法がわかって良かったなと、優は自問しながらも問いかけた。

「俺は今宮――名前は？」

「さ、佐伯、佐伯夏樹です」

「そうか。佐伯さん――電話してくれて構わない」

「え」

震える声が疑問を現した。

彼女の見える前で、優はポケットから携帯電話をとりだした。差し出す。それを夏樹は震える手で受け取った。

「警察だろうか？ 呼んでくれるなら俺達もそっちの方が助かる」

「ど、どういことですか」

「それはこちらでも聞きたいくらいでね。街中が狂人病の患者だらけだ」

あれもと、小さく顔を振り血が付着したガラス戸を差した。

「そ、そんな」

狂人病という言葉には聞き覚えがあったのだろう。

大きく口を開いた姿勢で、夏樹は固まった。

とても信じられないという表情は、言葉にしなくてもわかった。

携帯電話を手に行している。

だが、電話が出来ない――まあ、目の前で血まみれの斧を持っていたら、誰でもそうかと肩をすくめながら、優は扉を見た。

コンピュータ室と外部を隔てる扉は厚く、鍵もあった。

だから。

「外に出ている、鍵をかけて警察が呼べるなら、そうすればいい」

小さく手を振り、優は鋼鉄の扉を開いて、外へと足を進めた。

戸惑う気配と共に、しかしすぐに扉に鍵がかかる音がした。

重い音が鳴り響き、ガラス戸越しに夏樹と視線が合う。

いまだ彼女は戸惑いの表情を浮かべながらも、携帯電話を振るえる指で押した。

一、一、〇。

指がその動きをして、携帯電話を耳へとあてる。
しばらくして彼女の戸惑いは大きくなり、慌てるように携帯電話を操作した。

その動作を繰り返すたびに、彼女の驚きは大きくなる。

慌てたように携帯電話を投げ捨て――それは優の携帯電話であったが――室内に置かれている電話機へと駆け寄った。

そこで、やはり受話器を耳にあててすぐに、夏樹は大きく肩を落とした。

何が起こっているのか。

それは容易に想像することができた。

出ないのだろう。あるいは、出れないのか。

何度も呼び出しをしながらも、彼女が一言も口を開かないのがその証明とも言えた。

そこで、気が付いたように夏樹は動く。

サーバ機とは別に、室内に置かれたノートパソコンを立ち上げれば激しくキーボードを叩いた。

背後から見えるのは、有名な動画サイトだ。

その一つをクリックして――佐伯夏樹は、悲鳴をあげた。

買い物

コンピュータ室のガラスを背にして小さくため息を吐けば、浜崎が近づいてきた。

響き渡る悲鳴に浜崎は小さく肩をすくめて、優にお疲れと声をかける。

「別に疲れてはいないさ。屋上はどうだった？」

「誰もいなかった。ただ、お前の予想通り太陽光パネルは設置されていたよ」

「それは幸運だな」

「おいおい。それを知っていて、ここに来たんじゃないのか？」

「まさか」

優は首を振った。

「さっきも言ったが、機械で管理されていれば一番怖いのは停電だろう。自家発電の設備くらいあるんじゃないかと思っていたけどね」
「それで十分さ」

呆れたように息を吐きながら、浜崎はいまだにあがる悲鳴に眉をひそめた。

肩越しに振り返り、

「大丈夫かね、彼女は」

「さて。人の事を心配している場合でもない」

「自分の事を心配しているようにも見えないがな」

からかうような言葉に、優は立ち止って背後を振り返った。
いまだ、浜崎はガラス戸の近くで腕を組んだままだ。

しばらく視線が合い、最初にはずしたのは優だ。

視線を戻し、廊下を歩きだす。

答えは聞けそうもなく、浜崎は肩をすくめると優の背を追った。

「どうなると思うね」

「どうなるとは？」

「助けがいつ来るかってことさ」

「助けね」

優は苦笑した。

「誰かが薬を見つけるか、あるいは狂人病が自然に治ればな。何とかなるかもしれないな」

「随分と悲観的な意見だな。警察があるし、自衛隊だっている。政治家だって馬鹿じゃない。最初は撤退したとしても、態勢が整えばすぐに救出隊だって」

「楽観的な感想だな。人口三万人程度の大高市ですら、この有様だ。大都市がどうなっているか君にも想像できるだろう？」

問いかけるような言葉と共に、優はエレベータのボタンを押した。機械音が響き、エレベータの上昇する音が響いた。

「もしかしたら狂人病がはやっているのはこの街だけかもしれないだろう」

「突然発症したんだ、可能性がないとも言い切れない。何せ——」

呟いた優の前で、小さな停止音が響いた。

三階に表示し、一拍の間合いの後にエレベータの扉が左右に開く。

女がいた。

俯き、屈んでいる銀行員だ。

エレベータの停止に気づいたのだろう、女はゆっくりと振り返り。

「一瞬、先は何が起こるかかわからないからな」

「そのくせ、嫌な事だけはきっちり起こる」

そろって顔をしかめながら、二人は顔を見合わせた。
一瞬、掴みかかった女に向けて拳が激突した。

Ψ Ψ Ψ

建物内の死体を外に運び出したところには、時刻は午後四時を過ぎ
ていた。

すでに夕暮れが近づいており、夜の闇が近づいてきている。
日頃は夕食前で賑わっているであろう、そこも今では人気がな
かった。

住宅街の大型スーパー。

その前に横付けされたバスの車内から、浜崎は顔を覗かせた。

「ここは大丈夫そうだな」

呟けば、バス内の車内に顔をひそめていた男達は安堵の表情を浮
かべる。

買い物だ。

建物内の掃討を終えて、死体の始末も兼ねて優達はスーパーまで
足を延ばしていた。

荒らされた跡もなく、見渡すところにゾンビもない。

「さてと……」

バスの乗降口から死体を投げ捨てて、優は小さく呟いた。

「買い物とするか。遠藤と滝口、あと浜崎は食料品を。食材とあと
調味料、レトルトの食品も頼む。宮下は金物と飲料水を――高木は
トイレットペーパーとか雑貨品を。俺は衣料品を持ってくる」

「食材ね――日持ちする方がいいのか」

「それを大目に。ただ生鮮食品の入荷の予定もないし、食べれるの
は今だけかもしれないな」

「なるほど。じゃ、今晚の夕食でも考えるか」

「その辺は任せる。あと、ゾンビが来たらすぐに逃げるから。時間はそんなにないぞ」

「脇から手当たり次第ぶち込むだけだろ」

「ま。そうだけどな」

優が肩をすくめれば、運転席で不安そうに日原が手をあげた。

「あの。俺は？」

「日原はすぐにだせるように、エンジンをかけておいてくれ。近づいてきたらパッシングでもして教えてくれたらいい」

「う、うん。わかった——みんな気をつけて」

力強く頷く日原に、悪戯気な笑みを浮かべて、滝口が肩を叩いた。疑問を浮かべる日原に、

「映画で良くあるよな。残った奴に声をかけてたらゾンビになったとか」

「冗談でも、そういうのはやめてよね。それだったら、そういう意地悪を言う奴が最初に襲われるんだよ」

「君らは二見か」

おそらく明日香が聞けば怒りそうな事を呟いて、優はバスから出た。

Ψ Ψ Ψ

広さはショッピングセンターのシルフィーに比べれば、微々たるものだった。

しかし、平時には住宅街の食卓を賄うだけのスペースはあり、特価と書かれたチラシが巻き散る室内をカートを押して駆け抜ける。言葉通りに、浜崎達は手当たり次第にじゃがいもやニンジンなどの野菜を籠に入れていく。

それを横目に優もまたカートを二つ引きずりながら目当てのコーナーに足を向けた。

衣料品だ。

すでにぼろきれとなっているTシャツを脱ぎ捨てて、かかっていたシャツを手にした。

胸元にでかく『鬼嫁』と書かれた、一体だれが得をするのか迷う洒落シャツを着込み、ついでとばかりにワイシャツやTシャツを籠へと放り投げていく。

サイズや値段など関係なく、ただただ作業のように繰り返せば一つのカートはシャツで満杯となっていた。

それを確認すれば、次に向かうのは下着コーナーだ。

やはり下着と靴下を籠に入れて、優は止まった。

女性下着売り場だ。

スポーツタイプのブラやシンプルなフロントホックブラ。さらには女物の下着が並べられているところを前に、優は頭を抱えた。

どうすると。

いらないと言う事はないだろう。

けれど、何を買えばいいか見当もつかなかった。

そもそも手に取ったブラのサイズすらわからない。

感覚的には明日香は大きいし、琴子はその逆でスリムだ。

あうのかどうかも分からないし、この花柄のデザインが気に入るかどうかもわからない。

いつその事なかったことにしようかと悩んだが、毎日同じ下着をつけるというわけにもいかないだろう。

「――い、今宮。お前そういう趣味が」

ぴきつと優のこめかみに血管が浮かべば、背後にはへらへらと笑

う遠藤の姿があった。

ピアスを唇につけて口を開き、米が大量に入ったカートにもたれかけ、

「冗談だよ。知らなけりゃ悩むよな。ほら、高校生だろ——こっちはおばさんくさいし、これとこれと」

手慣れた様子で遠藤は、下着を籠へと放りこんでいった。

「随分と詳しいな」

「妹二人に姉貴が一人いるからなあ。慣れたもんだ——今宮はいねえのか？」

「誰も。母さんも小さい時に死んだからな」

「そっか。わりいこと聞いちまったな」

「別に。気にしてない——ここは任せる」

「ああ。任せてくれ」

「いや、パンツを握りしめてながら断言されても、困るぞ」

優は苦笑すると、下着を入れていたカートを置き、転がしていった。

Ψ Ψ Ψ

「いや、だからカレーが良いと思うすよ」

「いやいや、カレーよりはシチューがいいだろう」

「いや、だってシチューはこの間食しましたし」

「関係ねえ！」

「君らは何の争いしてんだ」

呆れたように割って入る優に、滝口と浜崎は同時に顔をあげた。

「いや、浜崎さんがシチューが食べたいうんだよ」

「こういう時は野菜がたくさん入ったシチューだろう？」

「あのな」

頭痛を抑えるように、優は頭を押さえる。

「さっき言っただろう。日持ちのするカレーとかシチューは今後嫌というほど食べる事になると思うぞ。その前に牛肉なり刺身なり生鮮食品を買った方がいいと思うんだが」

優の言葉に、浜崎と滝口は顔を見合わせた。

それもそうだと思う。

レトルト食品は、今後食料がなくなれば食べる事もあるだろう。

何もそんな時に食べなくてもいいと考えて、同時に口を開いた。

「ステーキが良いと思うんす」

「焼き魚かくいてえ」

駄目だ。これは――永遠に決まりそうもない。

「どうでもいいが――ゾンビの夕食にならないくらいには早く決めてくれ」

ため息を吐きながら、優はカートを押していく。

Ψ Ψ Ψ

「フライパンと鍋。あと」

雑貨を籠に入れながら、宮下はぶつぶつと呟いていた。

茶髪の青年が、大人しく買い物かごに文房具を入れている姿は非常にシユールだ。

何を入れればいいのか、本人もわかっていないようで、見たものを片っ端から入れているようだ。そのため、飲料水を入れたであろうカートの半分は、酒という有様であったが。

もはやわざとであるのか、本気で気づかないのか優にも想像ができなかった。

「誰がこんなに飲むんだ」

「え。あ。今宮！」

驚いたように振り返り、宮下は視線を追って酒に気づく。

「あ。いや、うちじゃ飲み物って言えばこれだったから」

違うのかといわんばかりの回答に、小さく苦笑する。

「まあ、日持ちもするだろうが——飲みすぎるなよ。身体を壊してもここじゃ誰も助けてくれない」

「あ。ああ」

頷いた宮下の脇を抜けて、優は進んだ。

「あ、あの今宮」

「ん？」

振り返った今宮に、宮下は迷ったように声をかける。

唇を噛みながら、

「な、何だよ。何で助けてくれるんだ」

「何でといわれてもな」

「だって。俺達は敵だろう？」

そう言って、話したのは明日香の件の事だ。

明日香をからかった——今は亡き主犯の井上、そして宮下もあの場にいた。

すぐに優によって病院に送られたが。

「なのに、何で助けたんだよ」

それは先ほどの件のこと。扉を破ったゾンビに引きずりこまれかけた時のことだ。

優の手によって助けられた。

助けられるとは思っていなかった。

「別に敵だとも思っちゃいないさ。ただ、腹がたっただけだ。あの

時も、そしてさつきも」

その答えに、宮下はきょとんと眼を丸くした。
あまりの堂々とした言葉に、しばらく口を開き。

「鬼かお前は」

そう呟くが、呟いた言葉に笑みを浮かべながら踵を返す。
その姿は――まるで子供だと、宮下は思った。

Ψ Ψ Ψ

入口近くの日用品コーナーでは、高木と呼ばれた眼鏡の青年が商品を選んでいた。

トイレットペーパーや石鹸、歯ブラシにシャンプーなど必要なものを丁寧に籠に入れている。

入口までくれば、それぞれ思い思いにカートを押して後ろから続いていた。

わずか数分足らずの買い物であったが、それぞれカート二つ分を押してバスへと向かう。

その多さに、運転席で日原が目丸くしていた。

「随分と買い込みましたね」

「バスなのが幸いしたな」

ステップは浜崎が楽々と持ち上げて、車内へと運び入れる。

日用品や衣料品はともかくとして、十キロの米が山と積まれたカートですら小さく声をあげて持ち上げて見せて、優は彼が車を持ち上げたと言う逸話は本当じゃないかと思う。

実に十二ものカートが入れば、さすがのバスの車内も満杯だ。
疲れはあるだろう。

どこか嬉しそうであるのは日常に少しでも接する事ができたせい

か。あるいは逆に非日常を楽しく思ったかのどちらかであろう。

「で。夕食は何なんですか？」

「ああ」

と、浜崎は自信を持って頷いた。

「ステーキと刺身の間をとって、ハンバーグにした。卵もこれから使えなくなってくるだろうしな」

「どのあたりの間をとって、ハンバーグになったのかわからないが」
優は運転席の後ろに腰をかけながら、小さく笑い。

「さあ、帰ろう——二見達が首を長くして待っている」

「ええ。じゃ、出発します」

一台のバスは、来た時と同じように風のように走り抜けていった。

情報収集

銀行駐車場にバスを止めれば、監視カメラで見ていた二見達が従業員用の扉を開けて出迎えた。

裏口だ。

お疲れさまと口々に声をかけながら、車内にある物資に大きく目を開いていた。

「いったい何日分持ってきたの」

「余ればおいておけばいいさ。それより、食材を頼む」
「任せて。美味しいご飯を作るね！」

「ああ、さすがにみんな疲れただろう。まあ、これから俺達は部屋の清掃だけだな」

「鬼かお前は」

宮下が力ない声をあげた。

周囲も同意しようとして、それに力なく頷いた。

「で、これをどこに運べばいいんだ？」

「倉庫があったろう」

「狭すぎるし、第一備品であふれてなかったか」

「そういえば、そうだったな」

と、倉庫にしていた場所を思い浮かべて、今宮は失念していたなと呟いた。

ちょうど備品の入れ替え時期だったらしく、中にはコピー用紙や文房具と言った消耗品が山のように積まれていた。今宮達がスーパ―から調達した十二のカートを入れるスペースない。半分も入らず

に埋まってしまうだろう。とはいえ、それ以外のスペースも寝室などを考えればまとめて入るような場所もなかった。

分けて入れるしかないか。

「金庫はどうだ？」

「いくら自由に出来るっていつでも、開け方がわからん。それともそっちには金庫破りのプロでもいるのか？」

どうだと、浜崎が脇にいる日原に声をかけた。

「いや、車は盗めても金庫は開けたことないです」

「それでも不良か」

「不良って言うより、それは強盗ですよ！」

無理そうだなと苦笑した今宮に、遠慮がちの声かけられた。
か細い、小さな声だ。

「あ、あの。私、あけられます」

Ψ Ψ Ψ

集中した視線に、驚いたように後ろに下がったのはコンピュータ室で見かけた女性だった。

閉じこもりから外に出てきたらしく、短い髪をした作業着姿の佐伯夏樹だった。

「もう大丈夫なのか？」

「あ。は、はい、その節はすみません。狂人病なんて知らなくて。ずっとあの部屋にいたものですから」

「いや。目の前にこれがいたら、普通の反応だろう」

そう言って、優は隣に並ぶ熊のような人間を見上げた。

いきなりこれに人が殺されれば誰だって、あんな反応をする。

いまだ困惑はしているのだろうが、言葉自体は普通のものであっ

たし、優のそんな冗談にも空笑いながら小さく笑みを見せた。

本人が強いのか、あるいは残った秋峰や二見が説得したのか、理由はわからないが。

「助けていただいてありがとうございます」

「礼を言われることじゃない。殺らなきゃ、俺も危なかったからな」
浜崎が照れたように手を振った。

「それで。金庫が開けられるって本当か？」

「ええ。私ここでコンピュータ関係の技師をしました。金庫のセキュリティも仕事の一つなのでですけど、支店長室にある鍵と一日一回変わるセキュリティパスを使えば開くはずです。セキュリティパスの発行はこっちで行っているので、たぶん鍵さえあれば何とか」
「わかった。浜崎——支店長室に行つて、佐伯さんに金庫室を開けてもらつてくれ」

「何か、ずいぶん簡単だなあ。俺たち大金持ちになれるんじゃないか」

「それが、使えたらな」

皮肉混じりな優の言葉に、夢がねえと浜崎は肩を竦めた。

「あとは——佐伯さん。インターネットに繋がっているパソコンは何台ある？」

「え。えっと、コンピュータ室に行けば三台繋がっているのがあると思います」

「わかった。浜崎、パソコンに詳しい奴は誰だ」

「ああ。こんな時にのんきにネットでもするつてのか？」

「こんなときだからだよ。時間がない」

「あ、ああ。高木は詳しいな、『黒夢』のホームページもあいつが作ってたし」

「暴走族がホームページ。君たちは馬鹿なのか」

「仲間内で楽しんでいるだけだから、いいだろ」

「しっかりと証拠残してどうするんだ。まあいい、あと一人は？」

ため息を吐きながら尋ねれば、浜崎は少し考えた。

「滝口は機械にやからつきしだしなあ。宮下か遠藤」

「じゃあ、宮下でいいか。一緒に来てくれ。滝口は浜崎の手伝いを——日原と遠藤は二階の掃除を頼む。寝る場所になるんだ、出来るだけ綺麗にな」

掃除と言われて、日原と遠藤は顔を見合わせた。

「二人で？」

「荷物の運び込みが終わったら浜崎たちも手伝うさ」

「こっちに掃除させて、そっちはネットをお楽しみか？」

Ψ Ψ Ψ

コンピュータ室に入れば、佐伯の言葉通りにインターネットに接続されているパソコンを見つける事が出来た。

一台は彼女自身が使っていたのだろう。

いまだ人を食らうゾンビがでかど映し出された動画サイトに接続されていた。

茶髪の小太りの青年——宮下洋平が顔を引きつらせながら、優が席に着く。

「本当にネットをするのかよ」

「何をすると思ってきたんだ」

優は苦笑しながら、狂人病の項目に映し出された動画を選びキーボードを叩いた。

映し出されるのは素人が取った手ぶれの酷い動画だ。

ニューヨーク、パリ、ロンドン、そして東京。

並み居る大都市の様子を映し出したであろう動画は、恐怖を持ってそこに存在してる。

変わらないのは、映し出されたゾンビの——無表情と言う名の表情。

それを次々に映しながら、瞬きをせずに見る優を怖いと思ったのは一瞬。

その表情は好奇心ではなく、まるで、そう研究者のようだと気づく。

あるいは武道家か。

敵を知り、そして一撃の下に相手をし止める——そう考えれば、どこか心強く。

敵にしたくねえ。

実際、敵に回したことがある宮下だからこそその実感だ。

やがて、動画をとめた優が振り返った。

「何ぼーっとしている」

「あ、いや。つれてこられたのはいいいけど、何をすればいいんだい？」

「ああ」

高木の疑問の言葉に、説明がなかったと優は頭をかいた。

「それぞれの国の様子やゾンビの様子。少しでも情報が欲しい——まあ、そちらは主に俺がこれから調べるから。高木は医療と技術や教育関係を。宮下は食料、農業とか武器関係のことを調べて、パソコンに落としてくれるか。必要ならプリントアウトもしてな」

「は。はあ？」

意味がわからないと言った宮下とは対照的に、小さく目を開いたのは高木だ。

そして、理解して一度頷くと、すぐにパソコンの前に座りキーボードをたたき出した。

「確かに。それは時間との勝負だろうね。検索サイトが使える間――ま、今日一日が勝負かな」

「ちょ、ちょ、高木。俺にもわかるように説明しろよ」

戸惑いながらも、自らパソコンの前に座る。

高木は手元の検索サイトをいくつも立ち上げ、同時にさまざまな用語を検索していきながらも言葉を続けた。

「宮下の担当は農業とか武器だろう。それらしい用語を打って、パソコンに落としていけばいい。特に重要なのは紙で印字をすればいいんだろう」

「いやだから、農業とか武器とかわけわかんねーって！」

「じゃ。君は味噌の作り方は知っているのか？」

「あ。味噌？ そんなの知ってるわけねーだろ」

「じゃあ。醤油は、米は？」

「お、俺が馬鹿なの知ってるだろ！ てか、馬鹿じゃなくても味噌の作り方なんざしらねえ」

「だからだよ」

医療サイトを丸ごとパソコンにダウンロードしながら、高木は振り返った。

「今はスーパーに行けば、味噌も醤油も手に入る。だが、俺たちはその作り方を何も知らない。知らなければ、それを調べておくしかないだろう。もしそれらがなくなったら、誰が作るんだ」

「そ、そりゃ味噌職人とか……」

いいかけて、宮下ははっとしたように口を開いた。

その味噌職人ってのはどこにいる。

今頃ゾンビの胃袋かもしれない。あるいは誰かを齧っているかもしれない。

誰かが作ってくれている。

そんな当然の出来事が、たった数時間で崩壊したことに宮下は気づいた。

気づかされた。

そして、それらの技術は知らなければ——手に入ることはない。いや、新たに探せばいいのかもしれないが、基礎知識があるのではないのでは大きな違いだ。

「全部自分でやるしかねえって事かよ」

「無駄になるかもしれないが。無駄になったところで、別にかまわん。その方がありがたいしな」

唇を曲げる優の隣で、高木はすでに宮下を見ていない。

彼もまた調べるのは、医療や電気技術、そして教育手法と多岐に渡る。

慣れているというだけあって、いくつものブラウザを開きながらダウンロードを繰り返す操作は手慣れた物だった。

「ああ。のんきにアダルトサイトでも接続できるかと思ったら、すげえ面倒じゃねえか」

しかも、超が付くほどに重要な。

これならまだ、ゾンビの血をたわしでこすっていた方が楽だったろう。

なぜなら、宮下が調べ切れなかった情報で下手をすれば技術が途切れる可能性がある。

パソコンを立ち上げると、宮下は検索サイトを立ち上げた。

何から調べるか——指がキーボードをさまよい。

18禁 エロ。

つい、いつものキーワードを打っていた。

Ψ Ψ Ψ

少々の戸惑いはあったが、そこは現代人。

高木のように慣れたようには調べられなかったが、農業サイトやら家庭菜園のサイトで野菜の育て方や家畜の育て方を次々にパソコンに落とし、同時に調理品や消耗品等の作り方を調べていく。

もちろん、いくつかのページは『Not Found』とサイト自体が見つからない事が多かったが、それでも必要と思われることを次々とダウンロードすることが出来た。

「なんだ」

余裕が出来てきたのか、一時間ほどが経過してパソコンを叩きながら宮下は口を開いた。

「こうしてネットが出来てると、なんか普通のような気がするのかな」

「普通？」

「ああ。ゾンビのことも、狂人病のことも全部夢って言うかさ。何か……」

「言いたいことはわかるが。もともとネット自体はこういう事には強いからな」

「——？」

「ネットワークって言葉通り、中継点が一箇所じゃない事が強みだからな。もともとは軍事用だしな」

「は、なんだそりゃ」

軍事用という物騒な言葉に、宮下は検索の腕を止めて優を振り返った。

相変わらず、隣では高木と優が手も止めず、ダウンロードを繰り返している。

「技術の向上は大体軍事が絡んでるって、授業で習ったろう。ま、技術があるから軍事になるのかもしれないがね。鶏が先か卵が先かって奴さ」

「今宮。頼む、高木ならそれでわかるが、俺にもわかるように教えてくれ。第一、その鶏云々もまったくわかんねえ」

「因果性のジレンマと言う奴だ。インターネット自体ももとは情報の集中管理を避けるために開発された技法だったんだよ」

「だからな」

頭から煙を吹き始めた宮下を救うように、高木が苦笑して言葉を続けた。

「例えばニューヨークに全ての情報を集中すれば、それは楽だろう。ワシントンからでもロスからでもニューヨークと回線を結べば必要な情報を受け取ることができるわけだ。けど、ニューヨークが爆弾で吹き飛んだら、情報自体も吹き飛ぶことになるだろう。あるいは、その途中の回線が切断されても同じだ」

そう問いかけられれば、確かに宮下もなんとなくわかるような気がした。

そこにしかない情報は、当然そこにしかない。

それがなくなれば、情報自体がなくなるのは明白だ。

「でも軍事情報となれば、それは困る。一つの基地が吹き飛ばせば全てがなくなることは避けたい。だから、ネットワークというわけだ」

「情報を集中させるのではなく分散させる。回線が切れても、別の回線を経由すればそこにたどり着ける——あるいは一つの基地がなくなっても、他でまかなえるという具合にね」

「だから、そういった障害には強いわけだが……と、このサイトは駄目か」

「て。お、おい、いきなりバグッたぞ」

開いていた検索サイトに『Not Found』の文字が浮かび、宮下が動揺を浮かべた。まだ必要だと思われる情報は、半分もダウンロードできていない。

調べられないと思えば思うほどに、まだ調べてなかったであろう事が頭に浮かんで焦る。

やはりエロは後にすべきだったかと。

「心配するな、その検索サイトが切れたただけだ。別のサイトを使えば——こっちは大丈夫のようだ」

高木が宮下の端末も操作して、再び検索サイトを立ち上げた。

「最もいくら軍事用だといっても、それを管理しているサーバが壊れれば当然見つからなくなる。情報を入れているサーバ自体は無限にあっても、検索サイトが入っているサイトは有限だ。さすがに全部が一気に壊れることはないけれど、壊されることもあるだろうし、電気がなくなれば終わり。だから……時間がなくて言ってるのに、なぜお前はまたエロって単語を検索するんだ」

「あ、いや。癖でつい」

「君らには馬鹿しかないのか？」

「それが、『黒夢』の欠点だと、僕は思う」

疲れたように高木が大きくため息を吐いた。

Ψ Ψ Ψ

それから一時間が経過して、室内は既に暗くなっていた。
時刻は八時を回っている。

優が電灯をつけることを禁じたため、モニターに移る微かな明かりだけが頼りだ。

次々と紙を吐き出したプリンタの周囲では、印字された用紙が散らばり山となっている。

「今宮君、ご飯できたよ？」

背後の扉が開き、蠟燭の小さな明かりで周囲を照らしながら明日香の声が聞こえた。

三時間以上もパソコンに向かい合い、大量のデータをダウンロードしていた三人の顔には疲労が見えた。

「ここまでにしておこうか」

小さく伸びをして、優が首を回せば――最後とばかりに、高木が薬剤の調合についてのページのダウンロードを開始した。

「あとで別にフロッピーやハードディスクに落としたほうがいいかもね」

「出来れば紙のほうの後々にも残るから、ありがたいけどな」

「時間もかかるし、インクも節約したいところだね。て、宮下――食事だよ」

「あ。いや、ちょっと待って」

何をしているのかと高木が覗き込めば、何やらサイトではなくソフトをいじっていた。

眉をひそめる中で、手慣れたように操作している。

やがて、ボタンを押せばファイルが次々にダウンロードされていた。

ダウンロード専用のソフトのようだ。

「あ。自動的に用語にあったサイトをダウンロードしてくれるソフトなんだ。家じゃこれを使ってた。寝ている間にもダウンロードしてくれるから、便利なんだぜ。動画とか画像とかをさ——他のも自動的にダウンロードをさせるから、ちよっと待ってて」

得意げに笑い他のパソコンも操作し始める宮下の姿に、高木と優は顔を見合わせる。

「エロってのも、たまには役に立つもんですね」

「そういえば、歴史の田向井が技術云々のときに言ってたな」

思い返すのは、気さくながら知識の深かった歴史教師の言葉だ。

技術の向上を話したときに、冗談交じりの言葉だった。

『戦争が技術を作り出すが、エロが技術を育てる。VHSやネットの復旧とエロの関連性は非常に大きく——実に実に、今では3Dが』

その後で、なぜか教師なのに生活指導室に連れて行かれていたが。

「な、なんかわからないけど。最低だよ、宮下くん！」

「俺かつ！俺が悪いのかよ！」

明日香の非難に、宮下が泣きそうな声を上げた。

僅かな休息

少しご機嫌斜めの明日香についていけば、五階の支店長室へ繋がる扉だ。

室内はすでに暗く、電灯を消されている廊下は明日香の持つ蝋燭のわずかな明かりだけが頼りだった。

それでも扉を開けば、ほんのりとした明かりが廊下に漏れ出た。蝋燭だ。

もともと客間と支店長室、あとはトイレやシャワールームなどの細々とした部屋しかないので、広いスペースがある。

そこに机を運び込み、中央に簡素だがテーブルが設置されていた。全員が座っても、なおあまりあるだろう。

さらに言えば、まだもう一部屋同じ大きさの部屋があったが、こちらは今は手がつけられていない。

清掃を担当した滝口達は手を抜かなかったようで、血痕は綺麗にぬぐわれていた。

窓に引かれているのは、分厚い黒いカーテンだ。

幾重にも巻かれており、中の光を外に漏らさないように考慮されていた。

「念のため、外で見張りながら電気もつけたが大丈夫だ。ましてや、蝋燭の明かりじゃ絶対わかんねえ」

自信を持って、浜崎が断言した。

すでに全員がそろっており、優たちの到着を待ちわびていたようだ。

窓際の開いている席に腰を下ろせば、隣に明日香が座り――。

トタタタタ。軽い足音を立てながら、反対側に弓奈が腰をおろす。
「ちよっと、弓奈ちゃんはあるでしょ。そこは高木君が」

「いや、別に僕はどこでも」

ちようどそこに座ろうとしていた高木は、譲らぬ気配を見せる弓奈に苦笑しながらも、彼女がいたもとの場所に座った。

「もてる男はつらいね」

「……男と子供は対象外なんだが。っ！」

「子供じゃない」

頬を膨らませる弓奈の隣で、優が小さく悲鳴をあげた。
恨みがましく見るが、弓奈はそ知らぬ顔だ。

蝋燭の明かりが、薄く照らしている。

それは電灯の明かりとは違い、暗く影を残すほのかな明かりだ。
さすがに疲れたのであろう、みな一様に顔は暗い。

けれど、運ばれた料理にその表情が明るくなった。
ハンバーグだ。

中央に大きく盛り付けられたハンバーグとサラダ。

そして、暖かな味噌汁とご飯の茶碗から立ち上る香りが鼻腔をくすぐった。

添え物は煮物だろう――生鮮品が食べられなくなると言った優の言葉のためか、刺身が浮いてはいたが許容範囲内だ。

「うまそうだな」

「うん、お母さんのハンバーグは世界一だよ！」

嬉しそうに和馬が口を開き、照れたように作った陽菜が苦笑した。
「お口に合うかわかりませんが」

謙遜の言葉とは違い、立ち上る香りはどれも極上のものだ。
もともと朝からまともな食事をしていない空腹の体が、絶えかね
るというように自己主張をはじめていく。

集中する視線に、優は気づいたように食事から顔を離れた。

「どうした？」

「いや。早く食べようぜ？」

だったら食べたらいいだろうと思いかけて、優は苦笑する。

こんな言葉を使うのは、何年ぶりだろうと。

仕事で帰ってこない父親——たった一人きりの食事。

使ったことなど、そう何度もない食事前の作法。

「いただきます」

「いただきますーす！」

優の言葉に、声が重なった。

Ψ Ψ Ψ

声に重なって大皿に盛り付けられたハンバーグが次々に消えてい
く。

手のひらほどはある大きいそれを、齧る。

皿に取り分けて、小さく口に入れる。

様々ながらも、食事の光景が広がった。

「い、今宮君、とってあげるよ」

「別に自分で出来る」

「いいって！」

明日香が張り切りながら、なぜか中央とは別の皿を持ってきた。
そこには並べられたハンバーグとは違う、少し不揃いなハンバ
ーグがある。

見栄えは均一とは言えず、ところどころ焦げていて。

「はい——」

「それ姉ちゃんのでづ——」

「和馬？」

渡そうとした皿を持ったままに、明日香に微笑まれ和馬は慌てて味噌汁に顔を埋めた。

「ちょ、ちょっと見栄えは悪いけど——味は他と同じだと思うよ」

「悪いな、わざわざ」

受け取れば、手作りなのだろうケチャップ風味のソースが添えられた。

一口。

「んぐ……ふむ、旨い。というか、家庭的というのかな」

ハンバーグなど、ファミリーレストランや洋食店くらいでしか食べたことはない。

やわらかくはないが、こげた風味と味わいが口に広がり——どこか懐かしいと感じる味だった。

口に余韻があるうちに、白米をほお張り、嚥下する。

「旨いよ」

「そう。いっぱいあるから、たくさん食べてね？」

「優。こっちも……」

引っ張られれば、弓奈が皿を手をしている。

のっているのはやはり、大皿のものとは違うハンバーグだ。

小さいながらも、それはハートの形をしていた。

しかも、驚くほどに均一に綺麗に焼けている。

「弓奈が作ったのか？」

「うん」

「ああ。じゃあ、いただき——」

「はい」

ハートのハンバーグが箸でつままれ、差し出された。

「自分で食べられ——むぐっ」

断ろうとした口に、押し込まれる。

吐き出すわけにもいかず、咀嚼。

焼き加減もよく、柔らかく肉の味が口に広がった。

「旨いな」

驚くほど素直に口にした言葉に、弓奈がにっこりと微笑んだ。

「今宮君？」

「あ、いや、そっちもたべ——おっ」

突き出された大きなハンバーグが、優の口に押し込まれた。

Ψ Ψ Ψ

「うらやましい光景だこって」

「そうか。あれ、喉の奥まではいってんぜ？」

「おまけにかなりでかい。なんと言うか、端的に言えば致命傷だな」

「ざまあ。今宮が悶絶する光景なんて、滅多にみれねーぜ」

からからと笑う『黒夢』の面々。

その表情は先ほどまでと打って変わって明るい。

非日常から日常へと戻れたためか、あるいは陽菜の作った家庭料理のおかげであるか。

それまでの焦燥が嘘のように、笑っている。

ハンバーグをほお張り、味噌汁をすする様子はまるで子供のようにだ。

いや、彼らはまだ高校生の子供である。

だから。

「元気かな」

ポツリとピアス男の遠藤剛が言葉を口にした。

誰がとは言わない。

誰もが同じ思いを抱き、しんみりとした空気が流れた。

父が、母が、兄弟が、家族が。

この場にいる誰もが、同様の思いを心に抱いた。

家庭など考えもしなかった。

いや、その暖かさが当たり前であつたからこそ空気のように大事さを失ってしまったのだろう。だからこそ、父親のいない明日香に酷いことも言えた。

いま彼女に絡んだ光景を目にすれば、誰もがそれを許さなかっただろう。

失って初めて気づくものは多い。

だが、気づくのは往々にして遅く。

「ほら。何しんみりしちゃってんのよ。いまは食事中でしょ——料理したのは明日香だけじゃないのよ。ほら、こっちは佐伯さんだし、こっちはあたしの手作り」

「え。これ食べれんのか？」

呆然と言葉を口にしたのは、宮下だ。

もともと小太りだった体型どおりに、すでに三杯目をお代わりしていた。

刺身もハンバーグもサラダも、あるものはもりもりと食べている。けれど、その大皿の隣に盛り付けられた皿は食べてなかった。というか。

「黒い——あ、これハンバーグか」

「ハンバーグと言うより、炭化してないか」

「なによ。そ、そりゃちょっと焦がしちゃったけどさ。でもタネは陽菜さんの手作りだし、お腹に入っちゃえば一緒よ」

「いや、そりゃ一緒だろうけど」

「男がうじうじ悩んでんじゃないわよ。さあ、この琴子さんの手作りハンバーグを食べなさい」

「お、おい」

「いや、か、かてえ。箸でささんねえぞ」

剣呑な琴子の雰囲気気おされて、滝口が挑戦するが箸にすら刺さらない始末だ。

手元に引き寄せて、割ってみせる。

「どうしたのよ」

「中までかよ」

芯まできっちり火が通っているのは、完全主義者の彼女の手にやるものだからだろうか。肉の赤身やたまねぎといった具材を判別することすら、不可能であった。

迷って、しかし秋峰琴子の厳しい視線に耐え切れず滝口が箸を振るわせる。
と。

彼の上から大きな手が伸びて、それを摘んだ。

見ている前で、それは口に吸い込まれ——ぼりぼり。

まるで煎餅を齧るような音が響き渡った。

浜崎だ。

「なに、腹に入っちゃえばおな——」

言葉途中、顔を青くして——浜崎隆文は後ろにひっくり返った。

「は、浜崎さん！」

「ちょ。今宮の拳に耐えた浜崎さんが一撃って。どんな破壊力なんだ！」

Ψ Ψ Ψ

片づけが終わり、お茶が運ばれてくる。

いまだ浜崎は意識が回復せず、脇のソファに寝転んだままだ。さすがに悪いと思ったのか琴子が付き添って看病している。

置かれた紅茶とともに、後片付けを終えた陽菜が戻った。

「すみません、片付けを頼んで」

「いいのよ。明日香も佐伯さんも——それに遠藤君も手伝ってくれたし」

「あ。いや俺は家でやらされてただけっすよ」

名前を呼ばれて慌てて、ピアス男の遠藤が首を振った。

「そちらもやることあったのでしょうか？」

そう問いかけたのは、食事を終えた優がスーパーから運んできた地図を片手に考え事を始めたからだだった。

一人蠟燭の明かりに照らされながら、考えていると思えば、突然住所を聞いてくる。

何をしているかはわからなかったが、期待を持って優を見ていた。そして期待の視線は問いかけてくる。

次はどうすると。

頼られることが苦手な優にとっては、苦笑せざるを得ない。けれど、仮にも引き受けた手前逃げるわけにもいかない。

「ああ。明日なんだが、一度家に帰ろうと思ってな」

「家に？」

目を開いたのは、高木だ。

周囲から家と言う言葉に、喜びが浮かぶのとは対照的に困惑の視線を向けている。

「でも、それは危険じゃないのか。今日以上にゾンビの数は増えているだろうし。第一僕らの家は街から外れていると言っても、南北に分かれている。中央の幹線道路を渡ることにもなるよ」

危険性を指摘されれば、単純に喜んでいた者たちも気づかされたように目を開いた。

「食料もあるし、拠点もできた。このまま落ち着くまでは閉じこもっていた方がいいんじゃないか」

「安全性で言うならば、その方がいいんじゃないだろうけどな。でも――」
でもと、優は小さく口を開いた。

「危険だろうとしても、一度家に戻ることは必要だと思う。というより、今しか戻れない」

「今しか？」

「時間が経てばたつほど、家族に会うのが難しくなるだろう」
言葉に、大きく目を開いた。

家族に会う。

それが誰もが望んでいたことだ。

けれど、それは個人的な理由。

家族に会いたいと願うのは当然だが、それは我俣なのだろう。

そう思っているからこそ、誰もがその我俣のために仲間を危険にするという選択肢を上げられなかった。帰りたいとは思ったとしても、そのために一緒に来てくれといえるわけもない。

それを、優はあっさりと家族に会うために帰ると提案をした。

「なんというか。君はそんな事のために危険は犯せないっていうのかと思ってた」

「俺を何だと思ってるんだ」

優は苦笑しながら、紅茶を口に含んだ。

「実際問題として、家族がいれば精神的に楽になるだろうし。生死不明のままで心配して閉じこもっているよりは健康にもいい。見つかって人数が増えれば、戦力も向上するし——自宅に必要な物資の調達できる。むろん」

と、手元に紅茶を置いて、優は少し考える。

「むろん。帰っても家族が見つからないかもしれない、あるいはもっと最悪な光景を目にするかもしれない。当然、探索中にゾンビに襲われることにもなるだろう。デメリットも非常に大きいけどね」
どうするかは君たち次第だけれど、付け足して——優は周囲に考えを促した。

メリットとデメリットを語り、そして判断をゆだねる。

顔を見合わせて、考える。

願いは同じだ。

帰りたい——家族に会いたい。

だが、そのために隣にいる仲間を危険にさらせるのだろうか。

自分のために、犠牲にできるのか。

「俺は帰れるなら帰ってえ」

「お、俺もだ」

やがて、上がる声は本音で。

一人の言葉とともに、次々と決壊したダムのように言葉が漏れ出した。

「あいてえよ」

「ああ。一日家を空けるなんて、今まで何回もやってきたんだけだなあ」

「はは——」

小さな笑いととも漏れた言葉に、優は微笑んだ。

「決まりだな。明日は自宅に戻る。もちろん一人ってわけにはいかないが」

「でも、家は南北だから分かれたほうが効率はいいと思いますけど」

「肝心の足がバス一台だけだからな」

「それなら——」

おずおずと手を上げたのは、小柄な青年——日原昌司だ

「うち、自動車整備やってるから家に戻れば車は用意できると思うよ」

「運転なら俺も出来るぞ。母ちゃんに教えてもらったからな」

大柄な滝口信二が手を上げれば、優はなるほど手元に持った地図を広げた。

それぞれから住所を聞いたのだろう、ところどころに赤い丸で印が付いている。

拠点となっている銀行は青い丸だ。

「なら。簡単だな、幸いにして日原の家は近い。まずバスで日原の家に行き——車を調達後、街の南側と北側に分かれる。注意するのは暗くなるまでには戻ることで、もし家族が家にいなかった場合は残念だが、周囲を搜索している時間はない。大丈夫か？」

言葉に、全員が力強く頷いた。

「よし、決まりだ。明日は八時に出発しよう」

「今宮くんは」

戸惑ったような言葉は、二見明日香のものだった。

「家に帰る必要——ないんだよね」

と、すでに無事である自分の家族を申し訳なさそうに見ながら声をかけた。

「まあ、俺の場合はそうだが――それでも、家に残してるもので持ってきたものはあるだろう。もちろん、二見は危険だろうから残ってもかまわないが」

「ううん。私もいくよ、行かせて？」

家に帰る必要がないとの言葉に、秋峰琴子は驚いたように目を開いた。

それは周囲の人間も同様だったようで、かける言葉を失っている。家族がいない。

それがどれほどのことであるのか、失いかけている今だからこそわかる。

それをさも当然のように話す様子に。

「ま、今宮が家族探しをするメリットはそれだけじゃねーだろうと、からからとした言葉がソファから聞こえた。

浜崎隆文だ。

顔にかけられたタオルをのけて、浜崎は豪快な笑みを浮かべている。

「大人がいりゃ、リーダーの座から降りられて山にこもれるとも思ったか。そうはさせんぞ」

「お前、自分の顔を鏡で見てからそういう台詞を言えよ。子供なら泣いてるぞ。ま、それを考えていなかったわけじゃないけどね」

なんでもないというように、今宮優は肩をすくめて見せた。

初めての夜

深夜三時。

街の喧騒はとまらない。

時折響く不気味なうめき声——そして悲鳴をBGMに優は静かに座っていた。

そこは二階の一室だ。

事務室が五部屋ほどあり、それぞれ壁に区切られた二階は食事をした五階ほどに広くはない。

それでも机が撤去されれば、寝るスペースには十分だ。

一部屋を男部屋として、もう一部屋を女部屋とした。

残る正面を除ける一部屋を見張り部屋にして、暗幕の隙間から時折外を伺う。

周囲は暗い。

けれど、電気はいまだ止まってはいないようだ。

ほのかに光る照明が道路を照らし、そして獲物を求めるゾンビが無表情に彷徨う。

異様な光景だ。

人類が闇に対抗して百年——街の明かりは夜を恐怖から喧騒へと変えていた。

しかし、それも突然として終わりを告げるなど誰が想像できただろうか。

銀行の防犯設備は想像以上で、一階の窓は全てが強化ガラスであり、そしてシャッターも完備されていた。進入するのは容易ではな

いだろう。

けれど、全ての窓がそうになっているわけではない。

外を望む窓には暗幕が張られてはいたが、本格的な進入には耐えられないというのが優の予想だ。

そのために、十時から二時間おきに朝の六時まで見張りを置くことにした。

最初は滝口が、次に宮下が勤め、今の時間帯は優の番だ。

一人ずつにしたのは、きっと明日からも同じように見張る必要があるため。

その時には今日の見張りをしなかった浜崎達が担当することになっている。

和馬や弓奈――そして、二見の母である陽菜も見張りを願い出たが、それは拒否した。

子供は寝ることが仕事であるし、陽菜には昼間の家事をお願いしている。

夜までとなれば、負担も相当なものになるだろう。

無表情のゾンビが銀行を通過したことを確認して、暗幕の隙間を塞ぎ、優はペンライトで静かに手元の書類に目をやった。

それは、今日の新聞記事だ。

正確には昼に更新されたネットの新聞記事であり、紙面に踊るのは『狂人病』の文字。

空港が封鎖された事や多数の犠牲者が出たことなど、焦りと恐怖を持って書かれている。

「今宮君？」

微かな音に、優は手にしていたペンライトを消した。
明日香だ。

手に紅茶カップを二つ持ち、静かに入ってくる。
音を立てないようにしているのは、寝ているものへの配慮かゾン
ビへの警戒か。

近づき、優の前に座って紅茶を置いた。

「お疲れ様。大変だったね」

「まったくだな」

朝からのことを思い出し、優は苦笑を浮かべた。

「二見は明日見張りだろう。寝ないとつらいぞ？」

「あ、うん。でも寝れなくて——話していいかな。邪魔じゃない？」

そう問いかけたのは、優が持っていた書類のことだろう。

大丈夫と机に書類を投げ出して、紅茶を一口飲んだ。

時折、暗幕から顔をのぞかせる。

いない。

先ほどのゾンビはおとなしく通過してくれたようだ。

顔を再び隠して、正面を見る。

電気のない室内は暗い。けれど、微かにであるが明日香の緊張し
ている様子が感じられた。

「何を見てたの？」

「狂人病のことさ。ブログとか新聞とか。いろいろ整理したくてね」
「整理？」

「ああ。あの狂人病——もう君に倣ってゾンビと呼ぶけれど」

まったく。まさか人間をゾンビと堂々と言えるようになるとはと
苦笑しながら、優は言葉が続けた。

「少しでも知っていれば、知らないよりもよほどいい」

「そう、何かわかった？」

「まったく」

そんなに簡単にわかれれば、苦労はしない。

「わかったと言えば、彼らが夜も昼も活動できること。それに幸いにして鼻はそこまでよくないようだって事くらいか」

「鼻？」

怪訝な顔をした。そんな雰囲気を持った声が、明日香から聞こえた。

「ああ。いくら隠れても人間の匂いが感じられるとか言われたら、ここに集まってくるんじゃないかってね。それが不安ではあったんだが、今通り過ぎたところを見ると鼻はそこまでよくないらしい。正確に言うなら、五感に関しては人間と同レベルと考えてもいいんじゃないかな」

「そか——良かった」

「良くはないさ。同レベルというなら、犬や猫ならば見つかるって事だからな」

「い、犬？」

驚いた明日香の言葉に、優は肩をすくめる。

「今のところそういう話は聞かないが、感染が人間だけにおさまる何て誰も決めてないんだ。ホラー映画だと犬は感染しないのか？」

「あ。う、ううん。確かにそういう映画もあるけれど……でも」

「決まったわけじゃない。けれど、それを予想しておくのと予想しないのでは大きな違いになると思うよ」

でも、優の予想が当たれば、いずれ見つかるというわけではないのだろうか。

その肩に優の手が置かれた。

心配するなど、表情が見えない優が強く言っている。

「その時は先に犬を駆除しておくとか、薬品をまいて誤魔化すとか

手はあるだろうし。予想だけで不安になっても仕方がない。ま、駄目なときは走って逃げる――それは今も変わらないし、これからも変わらないさ」

そう言われれば、感じていた不安が不思議と和らいでいた。

優ならば何とかしてくれる。

そんな雰囲気が彼にはあった。だからこそ、敵対していた浜崎たちも素直に従っていたのだろう。

「第一、不安だけで言うならもっとある。虫にも感染するのとかかね」

「む、むし？」

「ああ。例えば、蚊とか。それが感染したとかになれば、もうお手上げだ。防ぐ方法なんてない。いくら何でも蚊にさされたことがないなんて、いえないからな。山にこもるという当初の計画は完全に崩れる」

冗談交じりに呟かれ、明日香は小さく笑った。

考えていても対処できないこともあるのだと。

だけど、対処できる事があるなら、それを考えておく。

「凄いね」

自然と漏れ出た言葉に、優は首をかしげる動作を行った。

「凄いよ。私、ホラー映画とか好きでたくさん見ているけど。実際こんなことが起こって、何も出来なかった。ただゾンビは怖いし、逃げたいし。でも、出来ることをやる今宮君は凄いと思う」

「どうかな。考えたと言っても死ねば終わりだし、それが間違えていないという保証もない。自分一人なら、その時はその時だと思うけど、それを他人に強制できるものでもない」

「うん、わかってる。でも付いていこうって思うのは、私の意志だ

よ。だから、それまで今宮君に押し付けないから安心して」

「それはありがたい」

正面で優が笑った。

そんな気配がした。

Ψ Ψ Ψ

しばらく沈黙が続いた。

けれど、それは嫌な沈黙ではなく——暖かく、どきどきさせる柔らかな沈黙だ。

何度かカップと口が往復して、同時に優が暗幕から外を伺う。獣のようなうめき声は相変わらず続いている。

「声か」

そこで一瞬、不思議そうに優は呟いた。

「え。あ、うん——嫌な声」

誰が出しているかは、想像しなくてもわかる。

けれど、優はそこに疑問を感じたようだ。

「朝は、あいつら声何て一切だしていなかったのに」

そう言えばと、明日香も驚いた。

朝と、そして昼に襲ってきたゾンビに会話は一切ない。

ただ無表情に、まるで機械のように襲っていた。

それが聞こえるようになったのは、いつからだ。

そう考えれば、夕食の支度を始めたとき——夜になってからだど、明日香は思い返した。

「な、何で」

「さて。また疑問が増えたな」

優は苦い顔で、ため息を吐いた。

外を睨むように見ながら、しかし考えていても仕方がないと思っただろう。

やがて暗幕を閉じて、冷め始めた紅茶を飲み始める。

「二見は。生徒会の副会長だったんだな」

「え、あ、うん。そうだよ、これでもね？」

「自分で言うか。どんな仕事だったんだ」

「えーと、予算の事務とか校則修正の事務とか」

「何だそれは、事務ばかりじゃないか」

「だって。副会長だし――会長の代理と補佐が仕事なんだけど、会長が優秀すぎて」

「ああ。確かに」

生徒会長である須藤康平を思い出して、優は納得したように頷いた。

生徒からの信頼はもちろんのこと、教師からの信頼も厚い。

成績は常に上位であるし、運動も出来ないわけではない。

おまけに性格も良く、面倒見も良い――彼がいれば、きっと全て任せられただろう。

生きているだろうかと考えて、優は首を振った。

彼が死んでいるところが、優には想像が付かない。

「でも、どうして？」

「ああ。いや、この前の停学の時に電話があったことを思い出さ。二見が心配しているとか言っていたから」

「な、何である人はそんな余計なことを」

「仲がいいんだなと」

「そ、それで何でそんな結論に？　い、いや仲はいいけど、付き合

っているとかそういうんじゃない」

「ば、馬鹿。焦るな、声がでかくなってる」

「い、今宮君がヘンなことをいうから」

表情を赤らめながら、慌てたように声を潜める。

「学校じゃ、俺にはそういう友達はいなかったから。ただ楽しそうだなと思っただけだ」

今宮は一人だった。

もともとの容赦のなさのためか、あるいは性格のためか。仲が良いとまで言える人間は、優の周囲にはいなかった。

明日香は知っている。

ずっと見てきていたのだ。知らないわけがなかった。

「学校じゃ。って言ったよね、外にはいたの？」

「そりゃ。ずっと一人なわけじゃない。何人かは、みんな代わりもなかったが――生きてるかどうか」

「生きてるよ」

強い口調に、優は目を見開いた。

「きっと生きているし、会えるよ。それにね」

ゆっくりと優の手を、明日香が重ねる。

優しげに、その手を握り締め。

「もう今宮君は一人じゃないよ。私も――そしてみんな、今宮君の仲間で、友達だよ」

「時間よって、あれ」

明るい声が扉から聞こえて、そのままに硬直した。

「あ、あはは。お邪魔さん――だったかなあ？」

突然の乱入者に、手を離して明日香は顔を真っ赤にした。

Ψ Ψ Ψ

午前八時。

銀行の駐車場、バスの前で全員がそろった。

出発するのは、今宮優、浜崎隆文、二見明日香、秋峰琴子、日原昌司、滝口信二、高木稔、宮下洋平、遠藤剛の九名だ。

銀行に残るのは二見の母である、陽菜と弟の和馬。それに銀行にいたエンジニアの佐伯夏樹と阪木弓奈の四人である。もともと家族が全員いる二見は自宅による必要はなかったが、代表で家から必要なものをとるために明日香が向かう。

佐伯夏樹は一人暮らしをしており、実家は北海道との事で、家にも何もないとの事だった。阪木弓奈も家族の下に帰そうと思ったが、彼女はその強引なまでの性格で断固として帰らないと言い張った。帰そうにも自宅の住所すら言わないのでは、帰すこともできない。

何度かの説得の後、やがて優が折れる形となり、お留守番と言うことになった。

「本当にいいのか？」

「いい。帰らない」

「……何があったか知らないけど、家族ってのはいいもんだと俺は思うけどな」

「それは、家族に恵まれてたから」

呟いた言葉に、優は何を思ったのか。それ以上深く問いかけることもなく、わかったと小さく頷いた。

「じゃ、陽菜さん。男手が誰もいなくてすみませんが、お願いします」

「もしきたら、金庫に閉じこもってますから」

「僕がお母さんを守るよ」

「ああ頼んだ。ま、それまではお勉強だけだな」

「って、えー。勉強するの？」

「当たり前だ。弓奈も、佐伯さん見てやってくれますか？」

「ええ。わかりました」

小さく口を尖らせた和馬の肩に手を置いて、佐伯が力強く頷いた。
振り返る。

すでにバスの準備は出来ており、武器も乗せている。

このバスで、当初どおり日原の自宅に戻り車両を調達し二手に分
かれる手はずだ。

街を東西に分断する幹線道路の北側には、優と明日香、そして遠
藤と滝口が向かい、南側には浜崎と琴子、宮下、日原、高木が向か
う事になっている。

「準備はいいか？」

「いつでも」

「よし。出発だ」

そして、バスは進みだした。

逃げるのではなく、隠れるのでもない。

自らの家族を守るため――戦うために。

救出活動1

日原昌司の家は、北西に存在する拠点のさらに北側。大高山の麓に程近い田舎であった。

街から遠く離れているため、二階建て以上の建物は数件しかない。さらにバスを走らせれば、民家同士の間隔も離れており、畑や空き地が広がっていた。

のどかな風景は、一瞬現実を忘れさせる。

時折ゾンビとすれ違ったが、どれも単体であって――バスを追いかけてようとして見失っていた。

「お前、こんなところに住んでたのか」

「こんなところって酷いな、宮下。でも、学校まで遠かったのは事実だけださ。仕方ないよね。整備やってるから、騒音も出るし。あ、もうすぐ付くよ」

遠目から、その整備場は姿を現した。

さび付いたトタン壁が見える。

敷地内には様々な乗用車が並び、レッカーも出来るのだろうかクレインが付いた小型トラックも止まっていた。

人気はない。

ゾンビに襲われた様子もなく、その整備場は静かに佇んでいた。

日原がハンドルを切り、整備場の敷地内にバスを止める。

運転席のスイッチを押せば、左右の扉が音をたてて開いた。

すでに何度目かの行動は、手馴れたようなものだったが、それを行えばすぐに脇の扉から敷地に足を踏み出した。

優が背後から続く。

腰に巻かれた紐には二つの手斧だ。

同様に、降りてくる面々もそれぞれが武器を手をしている。誰も見えないとはいえ、油断はしていない。

朝になってゾンビのうめき声が聞こえなくなった。

それは精神的には良くて、見つけにくいという点ではマイナスの要素だ。

いつ襲い掛かれたとしても、おかしくはない。

そして、それが日原のたった一人の家族である父親だとしても。

日原の母親は離婚して出て行ってしまっているらしい。

だから、家には父親が一人なのだといっていた。

仕事熱心であるが、それが離婚の原因だと本人は苦笑交じりに話していた。

「父さんー？」

手にしたモップを握り、日原が意を決したように声を上げた。

トタン壁の整備場の中に、声が広がる。

やがて。

ガタン——整備場の奥で音がして、開いた出入り口から足音が聞こえた。

誰かがつばを飲み込んだ。

だが、それ以上に緊張しているのは日原昌司だ。

「ま、昌司か？」

焦ったような言葉とともに、姿を現したのは小柄な男性だった。

小柄だが鍛えられている。

豊かな白い髭と筋肉質からは、ほぼ同じ身長であるはずの日原よりも大きく見えた。

まるでファンタジーに出てくるドワーフのようだ。

その手には斧ではなく、タイヤ交換用の極太のレンチを握り閉めていたが。

「良かった、無事だったんだね」

「無事だったじゃねーっ!」

喜び近づいた日原に、ドワーフの野太い声が怒声を浴びせた。

「こんなときにまで外でやんちゃをしやがって。心配させんじゃねえ。まっすぐ帰って来い、馬鹿息子が」

「い、いや。そりゃ帰らなかったのは悪かったけど……その、ごめん」

「ごめんですんだら警察はいらねーぞ。馬鹿、この馬鹿」

怒鳴られて、けれど素直に謝ったのは抱きしめられたからだ。

野太い二つの腕が、レンチを放して日原を抱きしめている。

熊に捕らえられた人間のようにも見えたが、日原自身も謝りながら父の背に手を回した。

「感動の場面だな」

「泣けんぜ」

遠藤のからかいの言葉もどこか嬉しげだ。

けれど、言葉に日原は気づいたように体を離し。

「と、父さん。友達もいるし」

「あ。ああ……なんでえ。ずいぶんそろいもそろって——この馬鹿息子を送ってもらって、すみません。ほら、てめえも謝れ」

「日原にはこっちが助けられた。いなかったら、俺たちはゾンビから逃げられなかっただろう」

浜崎が苦笑しながら、言葉にすれば、父親は不思議そうに息子を見下ろした。

「お前が人助け? おめえ、なにやった——」

と、疑問を浮かべた言葉が途中で止まった。
視線の先はバスだ。

バス——何度かゾンビを跳ね飛ばし、そして血にまみれた跡がある一台のバス。

それを見て、気づいたのだろう。

ドワーフの顔が鬼のように険しくなった。

「おめえ。人を跳ねたな？」

日原昌司の父、日原正則は殺気すら浮かべて、息子を睨みつけていた。

Ψ Ψ Ψ

その剣呑な様子に、睨まれた日原はもちろんのこと浜崎ですらも
気おされた。

誰もがかける言葉を失った前で、怒りを浮かべる正則は拳を振る
わせる。

「答えろ。おまえ、人を跳ねたのか？」

「あ……」

「あじゃねえ。車は人殺しの道具じゃねえぞ」

振り上げられた拳が止まる。

殺気立つ視線が捕らえたのは、優だ。

「殴るのはやめてください。病院にも行けない、怪我でもしたら大
事だ」

「怪我だ。ふざけんな、ひかれたらこんなもんじゃすまねえんだぞ」

「だとしても、日原に怒るのは筋が違う。ひかせたのは俺だ」

「て、てめえがひかせただと」

「ああ。ゾンビに囲まれてね、それしか脱出できなかった。だから
俺が命令した——もし彼が否定すれば、俺がアクセルを踏んだだろ

う」

「なに考えてやがる」

怒りに体を震わせながらも、けれど優の腕を振り払えない。

だから、逆の手で彼を殴ろうと拳を振るった。

その手もまた、優の手に捕らえられた。

「ゾンビだ？ それは全員だったのか、中にはまだ人間もいたんじゃないのかよ。第一、狂人病が治らないって誰が決めたんでい。治る病だとしたら、それは人間を引いたことになんだぞ。人を殺したことになるんだ、それも車で、だ！ もう一度言うぞ、車は人殺しの道具なんかじゃねえ！」

正則の烈火の怒りを受けながらも、優の表情に変化はない。

ただ疲れたな。そんな雰囲気を持った淡々とした口調だ。

「なら逆に聞くが、治る病だと誰が決めた。あるいは治る病だとしても、いつ治る。齧られた後か、先か？ 車を大切にしていると言うあなたの心はわかるし、俺も車が人殺しの道具だとは思っていません。けれど、俺はそんな考えよりも命を大事にしている。それを守るためなら、何だって使うだろう」

強い言葉に、正則の表情が気おされた。

「死んだら全て終わりだ」

正則が大きく目を開いた。

「主義主張を持つことは自由だし、立派だ。けれど、そんなことのために仲間を危険にはさらせない。そんなことのために、俺は仲間を殺させない。だから、死ぬ一瞬まで諦めないし、そのためには何だって使う。そして、日原は——あなたの息子は仲間のために行動した。それに文句があるというのであれば、俺を殴ればいい。命令した俺が責任を取る。もう一度言います、日原を怒るのは筋が違う」

「殴るだ……ええい、貴様はどんな力してんだ。殴れねえじゃねえ
かよ。いい、わかった、だから手を離せ」

いまだ怒り覚めやらぬようで、手を振りほどけば優は素直に手を
離した。

「餓鬼が。責任何て言葉を簡単にいうんじゃねえ。人の命はてめー
の責任一人で解決できるほど軽くねえぞ」

「別に、命を償う何ていうほど宗教家ではないのでね。こちらに危
害があるならば、遠慮なく排除させてもらうし、それで恨みを買う
というのなら、俺はいくら恨まれてもかまわない」

「お前、人でなしとか言われたことないか」

「よく言われます。あと、鬼とか」

踵を返した優が、唇を曲げた。

苦笑。

疲れたように正則が息を吐き、落としていたランチを拾い上げた。
「びったりすぎて泣けてくらあ」

Ψ Ψ Ψ

言葉が終わって優に明日香が近づいた。

励ますような声に、優が苦笑交じりで会話をしている。

そんな様子を見ながら、疲れたように正則が息子を見下ろした。
すでにその顔に剣呑な表情はない。

「あれが、おめーのリーダーか？」

「あ、ああ。うん、いま大高都市銀行で固まってるんだ。父さんも」

「餓鬼どもがやんちゃしているだけだと思ってたが、なんでえ」

そこで認めたくないような、そして嫌そうな顔を正則はした。

「立派なリーダーを持ったもんだ。度胸もしっかりしてるし、心も

強い。最近の子供にしてはたいした野郎だ。まさか俺が説教されちまうとはよお。そうだな、お前は仲間のために命をかけたんだな――ああ、まあずいぶん立派になっちまって」

たいした野郎。

それは口の悪い正則の最大級の褒め言葉だ。

だから日原昌司は戸惑ったように。

「あ。いや、あれは今のリーダーで。俺のリーダーは」

「あ？」

戸惑ったような正則に、困ったような浜崎が近づいた。頭をかきながら。

「息子さんの所属している、組織の元リーダーの浜崎隆文です。その、いまさらの挨拶だが」

「元って浜崎さん。俺は今でも『黒夢』ですよ」

「今それを言っても仕方ねえ。第一、今のリーダーは今宮だ」

「おいおい。俺にわかるように説明してくれよ」

「簡単に言えば、彼に――今宮に全部任せた。俺よりも適任だから、な」

言葉に、正則の表情に笑みが広がった。

豪快な笑みを浮かべ、ばしと浜崎の背中を叩く。

「それが出来ずに、間違える餓鬼は糞ほどいるが。自分の力を見極めるってのは存外難しいもんだ。昌司――良いリーダーにめぐりあえたな」

「だ、だろう？」

「で、これからどうするっていうか。この分だと、全員の家を回ってわけだ」

「あ、ああ。うん、だからトラックを一台もらいたいんだけど」

「ああ、使え使え。それに車だって必要だろう。ワゴンもあつたはずだ、それで俺は都市銀行に先に行っておくよ。あとは――工具とか燃料とかもいるな。悪いが手伝ってくれ」

「力仕事はお安い御用だ」

Ψ Ψ Ψ

整備に必要な工具一式、そしてオイルやガソリンが次々にワゴンに積み込まれていった。

用意されたのは、白いワゴン車とクレーンの付いたトラックだ。ワゴンの荷台いっぱいには物資が積みまれ、同時に日原家の少ない服や食料も合わせてつまれて行った。その中には卒業写真や昌司の赤ん坊の写真なども含まれている。

昌司は要らないと言い張ったが、正則は手放す気はなさそうだ。予備のタイヤがワゴンの助手席にまで侵食し始めて、ようやく荷物整理は一段落を迎えた。

「じゃ、大高都市銀行でな」

「うん。気をつけて」

「それはこっちの台詞だ。もうひくなどはいわねえが、安全運転だけは心がけるよ。いいか、何度も言うが車は凶器じゃねえ。だが、使い方を間違えれば人を簡単に殺せる道具だ。自分も含めてな」

「うん、わかってる」

強く頷いた息子の言葉に、正則は満足そうに頷いた。

ワゴン車がアクセルを入れて先行する。一度、ハザードランプがたかれて、右に曲がれば加速して見えなくなった。

「さて。こっちも行くか」

先ほどの睨みあいなど気にした様子もなく、優が小さく伸びをし

た。

北側を担当するのはクレーンの付いたトラックだ。

運転は滝口が担当して、助手席には明日香が乗り込んでいる。

ワゴン車に積みきれなかったガソリンや軽油が荷台に乗っており、遠藤がもクレーンに捕まりながら、荷台に乗り込んだ。

「さて。気をつけてな。特に南側は幹線道路を抜けなきゃいけない。出来るだけ中央はさけて、東の道から回り込んだ方が安全だろう」

「ああ。ま、こちらは南側の住宅街だ。一軒家の方が多い。むしろ、そっちの方がマンションやアパートが多いから、危険だろう」

「どっちも危険であることには代わりがない」

「違いねえ」

浜崎は笑いながら、肩をすくめた。

優も荷台に乗り込んだ。

「じゃあ——いいぞ」

言葉にトラックが、出発する。

緩やかに加速したトラックを見て、浜崎もバスに乗ろうと声をかけた時。

トラックが急停車——慣性の法則とともに、荷台から遠藤が飛び出した。

「いけね。ギアをバックに入れちゃった」

救出活動2

「だから、悪かったっていつてんだろ」

「悪かったですむか。俺は飛んだんだぞ、空を！ 第一、どこをどう間違えたら、セカンド入れようとして、バックになんだよ」

「いや、母ちゃんのトラックはオートマなんだよ。マニュアル何て慣れてねー」

「バイクは全部マニュアルだろうが」

「ありゃ、ギアを足で変えるし。そもそもバックギアはねえ」

運転席と助手席では不毛な会話が続けられていた。

遠藤が荷台を嫌がったため、現在助手席にいるのはピアス男の遠藤剛だ。

幸いにして、最初の事故を除きスムーズだ。

滝口自身も運転に慣れてきたのだろうが、エンストの回数も減ってきている。

もっとも、減ってきているというだけであり、ゼロではないのが恐ろしいところだ。

「二見もちゃんと掴まっていた方がいいぞ」

「うん」

会話を耳にして、明日香はクレーンを持つ手に力を込めた。

現在のところ、道路自体にゾンビの姿はない。

意図的に周辺の過疎部を回っていることもある。やはりゾンビは人の多いところに固まっているようだ、地図を広げながら優は思った。

けれど、家を回るとすればいずれは中央に向かわなければなら
ない。

運転初心者である滝口が、不安と言えば不安だったが他に方法
はない。

優自身もマニュアル車と言うよりも、車の運転自体したことが
ない。

任せるしかないと言うのが、現状のところであった。

「大丈夫だよ。映画だとスムーズに進む方が危険なんだから」

「出来れば現実は無スムーズに進んでもらいたいただけだな」

難しいことだと笑いながら、時計に視線をやった。

十時三十分。

出発から二時間半あまりが経過している。

それは整備場での物資の積み込みに時間がかかったこともあるが、
現状で行けばスムーズと言っているだろう。うまくすれば、三時
くらいには戻れるはずだ。

地図に再び目をやれば、日原の赤丸から外周の過疎部を周り中央
へと向かっている。

そこに点在する赤い丸が目的地であって、一番近い場所——滝口
信二の実家があった。

「そろそろか」

顔を上げれば、再び畑などの空き地から住居区画へと移り変わっ
ていた。

空き地は数を少なくして、逆に低階層の建物が目に付く。

平屋や二階建てのアパートなどだ。

コンビニやガソリンスタンドといった、商店もちらりと見えてき
た。

そして、ゾンビも。

「おい。前！」

「ああ。わかってるよ。行くぞ、俺だって覚悟してんだ。日原にだけ我慢させてたまるか」

滝口はクラッチを切って、目の前に立ちふさがるゾンビを睨み付けた。

やってやる。

仲間は、俺が守る。

そして、ギアを、バックに入れた。

Ψ Ψ Ψ

「俺が運転する」

フロントガラスに頭を強打した遠藤が、赤くなった額を押さえながら呟いた。

「いや、何だ。シートベルトしてなかったお前が悪い」

「てめえも、頭フロントガラスに叩きつけてやろうか」

結局、ゾンビの目前で急停止した車両は——悶絶する遠藤を尻目にトラックに襲い掛かった。その瞬間、トラックの屋根を走った優の手斧に沈黙することになったが。

「ま、一体だけならあえてひく必要はないさ」

明日香の隣に座りながら、優は苦笑混じりに運転席に声をかけた。不機嫌そうな明日香と、いまだ怒り覚めやらぬ遠藤が驚いたように優を振り返る。

「どうしてもというなら、仕方がないが。その衝撃でガラスが割れたり、最悪、壊れる事だってありえるからな。かわせるなら、それに越したことはない」

「は。だ、だろ？」

「でも、ゾンビの真ん中で立ち往生だけはやめてね。滝口君？」

思わぬ助けに、笑みを浮かべかけた滝口に、明日香の冷たい言葉が刺さった。

「すみません」

素直に謝罪の言葉を口にして、やがてトラックはアパートの手前で停止した。

木造の古いアパートだ。

二階建ての小さな、ぼろと言えぼろなのだろう。

洗濯機が出入り口脇にむき出しに置かれており、扉も木製の簡素なものだった。

「ついたぜ。ここが、俺の家だ」

そういえば、滝口がシートベルトをはずして運転席の扉を開いた。荷台から優が飛び降り、周囲を警戒する。

「どこだ？」

「ああ。こっちだ、この一番東の端——懐かしいなあ」

「遠藤、周囲の見張りを頼む。近づいてきたら教えてくれ」

「わかった」

頷いた遠藤も、頭をさすりながら周囲を見渡している。

「それと二見は……滝口、油断するな！」

見渡した優が、叫んだのは滝口が嬉しそうに扉を開けた瞬間だ。刹那。

伸びる腕が滝口の腕を掴み、その頭部に。

見事な右ストレートが叩き込まれた。

「この化け物が。頭カチ割ってやろうか」

その頭をカチ割った後で、罵声が響き渡った。

見事な一撃を食らった滝口は派手に吹き飛びながら、二回転。そして、沈黙した。

誰もが言葉を発することが出来ず、その光景を見守っている。

倒れた滝口を見て、命にはかわらないと、次に伸びた拳の先を見る。

若い女性だ。

まだ三十ほどの、髪を赤く染めてシャギーを入れている。

強い瞳とボリウムのある体つき、口にタバコを咥えながら睨んでいる。

その視線が、優へと向いて――そして、倒れた滝口に向いた。

「つて、あれ？ 信二」

口にするのは疑問の声だ。

「い、いでで。な、なにすんだよ。母ちゃん」

ようやく意識を取り戻した滝口が、殴られた頬をさすりながら顔を起こす。

その顔に、女性は驚いたように口を開けた。

「いや、化け物かなーと思ってさ。いやほんと、あんたはてつきり食べられたもんだと思ってた」

「息子の命を簡単に諦めるなよ！　　というか、いきなり殴るか普通」
「君が悪い」

苦笑しながら、優が手を貸して滝口を起こした。

「こんな状況でいきなり扉を開けたら、誰だって攻撃するさ。それにもしゾンビだったら、今頃本当に腹の中だ」

「声もかけずに扉を開けるなんて、死んじまった旦那に似て馬鹿な子だよ。いつもいつもいつてんだろ、帰る時はただいまっていいな

ってね」

「何か殴られた俺が悪いみたいじゃね？」

「みたいじゃない。君が悪い」

優がもう一度繰り返し返せば、様子を伺っていた明日香も遠藤も笑い声を上げた。

口を尖らせながら。けれど、生きていた母親の姿に滝口も自然と表情をほころばせた。

Ψ Ψ Ψ

「なるほどねえ。あんたが助けてくれたんだ」

「別に助けたってわけじゃない。一緒に行動しただけです」

「同じことさ。この馬鹿息子一人じゃ、生き残れるわけじゃない。さっきの行動でもわかるだろ。だから——ありがとな」

狭い五畳ばかりの部屋と台所。

乱雑に詰められた書籍と脱ぎ散らかされた服。

整理整頓とはかけ離れた場所で、滝口信二の母親——滝口鈴は頭を下げた。

「お礼にだっていっても金なんかないし。何だったら、キスくらいしてやろうか？」

そう言って、自らの唇に指を当ててみせる。

「息子の前で堂々と誘ってんじゃないねー」

「結構です！」

滝口と明日香が、即座に叫んだ。

「なんだい。減るもんじゃないし、いいだろ。それとも、彼女一筋とかかい」

「そういうわけじゃないですが、遠慮します。今は時間が惜しい」

「やれやれ、せっかちだね。わかった、荷造りしてその大高都市銀行に行けばいいんだね」

「ええ。もちろん、一緒に行動が嫌だと言うなら別ですが」

「嫌なわけないさ。ちっと待ってくれよ、元々荷物なんざねーし。すぐに終わるからさ。信二——台所の酒と、着替え、あと父ちゃんを忘れんな」

「もう詰め込んでるよ。ってか、なんだよこれ。整理しろ——つか、下着を脱ぎっぱなしにすんじゃないねー」

ダンボールに乱雑に荷物を詰め込みながら、滝口が口を尖らせる。その様子に、再び煙草を咥えながら、滝口鈴は押入れの扉を開ける。

どさつと荷物が山のように崩れながら、毛布を取り出して広げる。「何にもないところだし——化け物あいてにや役不足だろうけど」
そう言いながら押入れから取り出すのは——木刀、金属バット、そして日本刀に、軍用の大振りナイフまである。

次々に取り出される武器に、明日香は目を丸くした。

「た、滝口君。お母さんの職業ってなんなのかな！」

「トラック運転手っていったろ。ってか、昔レディースとかいう族の頭だったんだよ。思い出の品とかで今も持ってる」

「お、思い出しでは生々しいよ！」

「捨てるに捨てられないって言うか。ゴミに出して見つかったら大事だろ。どう捨てていいもんか迷ってるうちにたまっちまってさ。」

「ま、使い道が出来たし、結果オーライさ」

一通り毛布に包み込めば、それを縛り両腕で持った。

「さ。こっちの準備は完了さ。信二終わったかい。父ちゃん忘れんなよ?。」

「わかってるよ。てか、前から思ってたけど何で遺影が特攻服なんだよ」

「かっくいいだろ？」

「いつも拝んでるときに睨まれている気がして、嫌なんだよ」

苦笑しながらも、仏壇に飾ってあった遺影を大切そうにダンボールにしまい、口を閉じた。

「こっちも完了だ」

ダンボールを抱えた滝口の上に、毛布が置かれた。

「お、おおっ」

武器の数々をいきなり上に乗せられて、浜崎の次に大柄な滝口もさすがによろけた。

「その前に、ほら」

そして次に置かれるのは、トラックのキーだ。

「て、母ちゃん。これ」

「母ちゃんのトラックだよ。場所は知ってんだろ、この先の駐車場にとめてるから」

「いや、それは知ってるけど。母ちゃんがそれで行けばいいだろ」

「何をいつてんだ。あんた、マニュアル運転できるのかい。こっから先の運転は母ちゃんに任せて、あんたはその大高都市銀行ってとこに戻ってな」

「い、いきなり何言ってんだよ」

「毎週、何百キロって走ってる。これでも腕は確かなつもりさ。それでいいだろ？」

言葉を振られて、優は小さく目を開いた。

「それに、あんたにも興味あるしね」

「ま。いきなりエンストされるよりはいいだろうけどね。わかった、

滝口はトラックで先に戻っててくれ」

「ったく」

説得は無理だと思ったのだろう、ため息を吐きながら玄関へと向かう。

その滝口に背に、声がかかった。

「ああ。わかってると思うけど、もし途中でぶついたりしたら」

鈴は笑顔で、ゆっくりと腕を伸ばした。

親指を上にあげ、それを一気に下に向ける。

「半殺し」

救出活動3

もちろん。出会いは幸福なだけでのものではない。

一般の、平凡な家庭の住居。

そのリビングルームで、泣きつく二人の女性を抱きしめながら突然と遠藤剛は立ち尽くしていた。

「お姉ちゃんが……おねえちゃんが」

「わ、わかった。わかったから、翔子、純子落ち着けな。だから、説明しろ。姉ちゃんが、姉ちゃんがどうしたってんだよ」

遠藤剛は父と母と、そして姉一人に妹が二人の六人家族だ。

妹の二人は双子なのだろう。

まだ中学生ほどのあどけない顔立ちに、一人が髪を右にまとめ。

もう一人は髪を左にまとめている。

暗い室内で呆然と座り込む二人は、しかし遠藤剛の姿にその表情を崩し――泣き出した。

そこに他の住人はいない。

誰かいたならば、すぐに出てきているはずだ。

それほどまでに、妹二人の嗚咽は深く、深く――悲しい。

「お、お父さんがおかしくなって。お母さんを。お、お姉ちゃんが何とかしたんだけど、でも、でも今度はお姉ちゃんが噛まれて」

ところどころ、聞こえる言葉を遠藤はただ呆然と聞くしかない。理解なんて出来ない。

したいわけがない。

そんな彼に、言葉もかけられず明日香はただ扉の外から彼の背を見守るだけだ。

その肩が叩かれた。

つらそうに、滝口鈴が立っている。

彼女もまた、同じように言葉を失っていた。

足音。

二階から静かに降りてきたのは、今宮優だ。

静かに首を振る。

その動作で、二階で何があったのか全て理解できる。

そんな動作だった。

「もう、大丈夫だからって。でも二階には上がっちゃ駄目って。それからお姉ちゃん戻ってこないの。かえってこないの」

「わかった。わかったから、もう大丈夫だ。こっちにはつええ味方もいるし。兄ちゃんが守ってやるから。だから、泣くな——泣いたら、姉ちゃんが悲しむだろうが」

懸命に励ましながら、遠藤剛は唇をかみ締めた。

「な。ほら、可愛い顔が台無しだ。二見——」

「え。あ、はい」

「二人を頼んでいいか？　ここ寒いからよ、車に入れてやってくれよ」

「う、うん。わかった」

「さ。あのお姉ちゃんについていてな。暖かくして、おりゃあすぐにくからよ？」

二人をもう一度抱きしめて、制服姿の二人の肩におそろいのカーディガンをかけてから、背中を押した。迷ったように振り返ったが、

唇を曲げるような遠藤の笑顔——明日香と鈴に肩を抱かれて、何も言わずに玄関へと向かった。

そして、遠藤は腰を落とした。

震えている。

かける言葉もなく、優もその場を後にしようとした。
その時——。

「なあ、二階どうだった？」

かけたのは震えと恐怖が混在した、小さな声だ。

それは独り言だったのかもしれない。

けれど、優は無視することもなく。

「妹さんの言ったとおりだ」

と、その背に声をかけた。

「三人とも。お姉さんはゾンビにはなっていなかった」

短い言葉。

ただそれだけで、全て理解できるような端的な言葉だった。

父と母は姉が始末したのだろう。

そして、噛まれた姉もまた自らの手で、その残酷な運命に幕を下ろしたのだ。

ひっくと、嗚咽が漏れでた。

一度出た声は、やむことがなく、それは慟哭へと変化していく。

「わ、わかってんよ。こんな事があるってことくらい——感染率マックスのやべー病気だぜ。誰も彼もこんなことになってるって。だから、妹二人が無事だったってだけで喜ぶべきだって」

わかってるわかってると何度も繰り返しながら、遠藤は肩を震わせた。

「姉ちゃんは命を懸けて守ったんだ。だから、次は俺が守らなきゃなんねえ。泣いてる場合じゃねーってわかってる。それはわかっただよ」

上がる感情を憎らしげに、遠藤は拳を床に振り下ろした。

何度も何度も。

痛みで悲しみを紛らわせるように。

「何で、何で今宮はつえーんだ」

「強い？」

「もう今宮には誰も残ってねえんだろ。でも、俺は二人も残ってる——血の繋がった家族が。なのに、何でそんなに冷静でいられんだよ。何で俺はこんなによえーんだ」

「強いと言うのかな、それは」

問いかけられた言葉に、困ったように髪を撫でて、優は苦笑する。

「泣かないから悲しくないわけでもないし。泣かないから強いわけでもない。ましてや、泣いたから弱いわけでもない」

背後から語られる言葉は、どこか困ったようで——説明に戸惑っている。

そんな雰囲気を感じられた。

「誰もいないか。そうだな、俺にはもう誰もいない。そういわれて実感するのは、もしかしたらそんなことを考えたくなかったから。考えていなかったからかもしれないな」

「……」

「自分の気持ちを説明するのは難しいし——俺は自分を強いとは思ったことはない。それは他の人が判断することだし、それをもって何でと問われても非常に困るわけなんだが」

本当に、本当に困ったように優は髪をかきながら、苦笑して見せ

た。

「ただ、君の守りたいという思いは強いものだと思う。そして、泣きたいと言う感情を弱いものだとは思わない。君が俺を強いと判断してくれたように、俺も君を見て、そう思う。外に出ている、落ち着いたら出てくるという」

そういう残して、優もまた玄関の扉を開けた。

一人――いまだ日常が残るリビングルームで、ただ一人の少年の嗚咽だけが響いた。

Ψ Ψ Ψ

二見明日香の自宅は、小さな住宅だ。

アパートほどに狭くはないが、マンションほどに広くもない。

住宅の並ぶ敷地に、正面には小さいながらも公園があった。

そこにトラックが停車して、明日香と優が降りた。

「荷物をまとめたらずぐに出てくるから、みんなはここにいて」

「大丈夫かよ。襲われるなよ？」

いまだ元氣のない声ながら、それでも小さく遠藤は笑った。

「大丈夫だよ。こっちには今宮くんがいるし」

「そっちに襲われるかもしれんぞ」

「襲うか」

優が苦笑いを浮かべれば、冗談だよと遠藤が作ったような笑みを浮かべた。

困ったように。

「さっきは悪かったな。あたっちまって」

「たいしたことじゃないさ」

手を振り、明日香と伴い家へと向かう二人を見送りながら、助手席で遠藤剛は頭をかいた。

「やっぱ、俺はよえーよな」

小さく呟いた言葉に、運転席から伸びた手がその肩を叩く。

「そう思うなら強くなんな。諦めたら試合終了だよってね」

「どこの監督だよ」

鈴に口を尖らせながら、そうだなと遠藤は思う。

弱いならば強くなればいい。

いや、強くなくてもいい。

ただ、彼のように――自分がいれば大丈夫だと、そう言ってもらえるように。

兄ちゃんは強くなる。

荷台の妹二人を振り返りながら、遠藤剛はそう思い、ピアスをはずした。

「見掛け倒しとは、もう卒業だ」

投げたピアスが小さく、銀の色を輪をかいた。

Ψ Ψ Ψ

住宅は静かなもので、綺麗に整理されていた。

モノトーンの色調は陽菜の趣味であるところだろう。

室内には荒らされた様子もなく、そのままの状況を持って家人を出迎えた。

「あ。冷蔵庫にお茶が入ってるから、お茶でも飲んで。私荷物をつめてくるから」

そう言って階段を駆け上がった明日香を見送り、優は進められるままにリビングに入る。

女性の家に入るのは初めてだなと思いつながら、リビングに飾られる『吸血鬼』のポスター。

予想とは違う人物の出迎えに、二見明日香らしいと優は笑みをこぼした。

テレビラックの上に乗せられているのは、写真立てだ。

陽菜が、明日香が、そして和馬が笑っている。

その小さな写真——中央にいる男性は今亡き父親なのだろう。優しげに微笑んでいる。

それを手にして、家族と言うものにどこか懐かしさを感じた。

二階では物音が響いている。

悲鳴はなく、ただ荷物を盛大に詰め込んでいるような梱包の音だ。少し時間がかかるなど、優はテレビのリモコンに手を伸ばし、スイッチを入れた。

砂嵐。

それは電波が途切れていることをあらわしていた。

別のチャンネルに切り替えれば、今度は無人のスタジオを映し出している。

血だ。

普段はコミカルなバラエティを流している会場は、鮮血と死体を持って出迎えていた。

これが現実だと、視聴者に見せ付けるように。

もう誰もいない。

お前も諦めろと。

チャンネルを切り替えれば、緊急ニュースという文字とともにリポーターが目を血走らせている様子が映し出された。

『現在。日本国全域にわたり、非常事態宣言が発令されております。皆様、決して戸外には出ず、誰も入れないでください。繰り返し、狂人病の蔓延に伴い、現在の首都機能は崩壊しており、政府は海上輸送艦より指揮をとっております。自衛隊、在日米軍が合同で対策をとっており、区画ごとの制圧作戦を決行——決して、安易な情報に惑わされることなく、事態の収拾までいましばらくお待ちください。では、現地から』

そして場面が、移り変わる。

それは渋谷だ。

有名な駅前のセンター街で、完全武装をした自衛隊員たちが迫ってくるゾンビに向けて発砲していた。

次々に打ち倒されるゾンビの姿は、とても放送できるものではない。

けれど。現在の状況であれば仕方がないかもしれない。

ゾンビは制圧できる。

それを伝えなければ、恐怖はさらに加速させ、膨張させることになるだろうから。

『現場から佐藤が伝えます。昨日の当時、渋谷には数万人以上の人間がいたと考えられており、現在——』

どんと強い衝撃音が響いた。

巨大な電光掲示板に着弾したそれは、破片を撒き散らし黒煙を巻き上げる。

「げ、現在。自衛隊による決死の救出作戦が行われておりますが、現在のところ救出者は数百名に満たないとの発表されております。前線では、いまだ戦闘が続いておりますが、武器を持たないゾンビは恐れるものではなく、順調に区画を開放……」

そして、悲鳴が響いた。

カメラが振り向けば、前線にいた兵士の頭上に落ちている。

落ちている、落ちている――人。

それは高いデパートの最上階からの落下だ。

恐怖すら感じさせず、頭上からその肉体ごと兵士を押しつぶし、そして。

噛む、噛む、噛む。

引き剥がされたゾンビが頭を打ちぬかれた刹那、潰された兵士が牙をむいた。

『奴ら、上からも来るぞ!』

『撃て。撃て、撃て!』

叫び声と悲鳴、銃声が響き渡り、画面が一瞬フェーズアウト。

再び中継は、室内へと戻った。

『げ、現場は混戦の様相です。しかし、すでに政府は新宿における大規模救出作戦を成功させたと発表しており、各街へも作戦部隊が向かっています。繰り返しますが、皆様はそれまでもうしばらく、もうしばらく家に閉じこもり、決して外には出ないでください。以上、緊急ニュースをお伝えしました、コマーシャルの後はゲストの東都大学』

トン。

音に振り返れば、トランクを持った明日香が背後に立っていた。じっと画面を凝視している。

「そ、そっか。そうだよ、そりゃ自衛隊だっていうし、大丈夫だよね?」

「どうだろうな。実際、見たところある程度は押していたようだが、

犠牲も出ている。自衛隊の総数が二十四万くらいか。空気感染率があるから、それから数万ひいて二十万。全て開放するまでに人数が残っていればいいけどね」

肩をすくめたのは、優だ。

「どうしてそこで、正論を言って不安にさせるかな」

「嘘はつきたくないだけだ」

「そういう時は嘘でもいいから、大丈夫だよって言うといいと思うよ」

「まあ、なんだ。すでに大高市だけでこんな廃墟の状況で、チャンネルもほとんどない。インターネットの方も今朝方にはほぼ検索サイトが消えかけていたが——まあ、根拠はないが、大丈夫だよ」

「全然信用できないよっ！」

頬を膨らませて、明日香は台所に向かった。

冷凍庫から冷凍の肉類や冷凍食品を取り出し、紙袋につめていく。

『現在、各国政府が合同で新薬の開発に乗り出しております——私もその一員となって、ええ。ここで説明を終えましたらすぐに、取り掛か——』

「手伝おうか？」

苦笑し、優はリモコンの電源を切った。

救出活動4

実に一日ぶりの帰還であったが、まるで何年も帰ってこなかったように優には思えた。

マンション脇の道路に車を止めて、待っているように伝えれば明日香が手伝うと申し出た。一軒家とは違い、それなりに大きいマンションだ。

危険だと断ったが、大丈夫だと言い張った。
根拠のない大丈夫であったが。

「なに、すぐに出発できるように待ってるし、何かあったらすぐ逃げてくればいいさ」

心配するなとばかりに、鈴がハンドルにもたれかかりながら笑い、遠藤が小さく手を振ってみせる。不安げな双子の少女もまた、そんな様子に小さく笑みをこぼした。

仕方がないと、明日香を連れて優はマンションへと足を踏み入れる。

静かだ。

階段を上がる音だけが響き渡る。

幸いにして、その音を聞いて飛び出してくるものもない。

まるで誰もが逃げ出したか——あるいは、食事を求めたか。

ひらつきっぱなしの扉をあければ、あの朝の出来事がそのままに優を出迎える。

破壊されたテレビ、そして折れた椅子——血痕だ。

その惨状に目を開いた明日香が、一言。

「散らかつてるね」

「大きなゴキブリが出てね」

苦い顔をして優が答えれば、明日香が小さく笑う。

「冷蔵庫の中のものを入れておいてくれ。冷凍食品とかカップめんとか買いだめしたばかりだから、まだあると思う。飲み物も勝手に飲んでいいよ、俺は着替えてくる」

そう言って、寝室に入れば――青色の布団が、起き上がったそのままの状況で形作っている。

優の姿は、いまだ昨日と同様のものだ。

ジャージの下に、Tシャツ。そして上着。

初春とはいえ、まだ寒い季節だが、着替える時間もなかったので仕方がない。

手斧を脇に置いて、上着を脱ぎ、ジャージを脱ぐ。

下着と靴下をはきかえれば、裸のままで優はクローゼットの扉を開いた。

最初はシャツだ。

少し迷って、やがて黒色のシンプルなTシャツに袖を通す。

次にジーンズをはき、皮製のベルトでとめた。

ベルトの背後から手斧を通して、装備をしておく。

「頑丈な方がいいだろうね」

呟き、次に長袖の上着を着込み――最後に紺色のジャンパーを羽織った。

そうしておいて、トートバックを手にとると次々に下着と服を詰め込んだ。

限界までそれが達すれば、次に旅行かばんを開く。

元々数の少ない優の服は、すぐにかばんに吸い込まれていった。

やがて残されたのは制服で——少し思案しながらも、それをかばんに入れた。

次に向かったのは机の引き出した。

広辞苑——そして理科の教科書など、高校の教科書が乱雑に詰まれている。

それを無造作にかばんにしまい、引き出しを開いた。

写真だ。

父親と、そして古くの友人。

家族旅行のときにとった懐かしい写真。

山の奥で父親に肩を抱かれて、少女と少年二人がピースを浮かべている。

家族旅行なのに自分の母親がないことに拗ねていた記憶がある。子供だったと思いながら、パスケースに入れているそれを小さく手で撫でた。

「強くはないさ」

ただ見られたくないだけ。

自分を、感情を、そして心を。

だから隠す——『理由を探して——暴れてえだけだ』——死ぬ前に叔父の呟いた言葉が、記憶に残った。

そうかもしれない。

小さく首を振りながら、優はそれをポケットにしまった。

Ψ Ψ Ψ

「ほ、ほんとにいっぱいあるなあ」

紙袋はすでに四袋目に突入している。

大量にストックされた冷凍食品とインスタント食品の山が消えて、

ようやく明日香はほっとしたように息を吐いた。

「お待たせ——」

「うん、こっちも今終わったとこだけど。でも、インスタントばかりじゃ体に悪いよ?」

「たまには外食もしているさ」

「そういう意味じゃなくてさ。ま、これからは私が作るからいいけど——終わったの?」

「いや、もう一部屋ある。こっちは?」

「もう終わりだよ。じゃ、そっちも手伝うね」

紙袋を提げて、優に続く。

開くのは寝室と、逆の扉だ。

そこは、それまでの部屋とはさらに沈んだモノトーンの部屋だった。

開けば、埃の匂いが鼻腔をくすぐり、清掃どころか長い間足を踏み入れていなかったことがわかる。

「ここは?」

「親父の部屋さ。死んでから一回も使ってない」

「そう……」

周囲をうかがえば、何やら山の写真やポスターが見える。

ところどころに見えるのは、何やら銃器の本だろうか。

「俗に言う冒険オタクって奴でね。山登りやらキャンプが大好きだった。ま、なかなか休暇もとれなかったようだったけど。それでも休みはよく連れて行かれてたな」

「だから、山なんだ」

「自分の分くらいは自給自足は出来そうだからね」

そう呟いて、優は押入れを開いた。

手馴れた手つきで取り出すのは、双眼鏡だ。

その重厚感は、一見するだけで相当に高価なように思われた。

「親父自慢の暗視も出来る双眼鏡。軍用を払い下げて——ローンまでして買ったって自慢してた。ま、これをもって山に入る前に死んだけどな」

何を思っ、それを買ったのか。

闇を求め山に入り、そして闇の中に何を見つけようとしていたのか。

死んでしまった今では、その意味を問い詰めることはできない。けれど、幸いにと旅行かばんにそれをつめて、他のものはないかと手で探った。

携行用のライトに、燃料缶——キャンプグッズがつめられているバッグを引っ張り出し、中身を確認しながら、再び戻していく。

大降りの鉋も入っていた。

その脇には、それとは別に小さな小ぶりのナイフだ。

鉋で木々をなぎ払いながら、山の奥地に入る父親に自分も欲しいといえど買ってくれたものだった。その当時は、これですらも彼の手に余っていたが、今では手のひらにおさまるほどに小さい。

それを足に巻きつけて、鉋を腰につるす。

そうして、荷物をまとめていると、優の肩に手が置かれた。

優しげな——小さな手だ。

「どうした？」

「ううん。何か、今宮君——泣いてるのかなって。そんな事ないよね、ごめんね」

「ま。こうしてここに入るのは久しぶりだからな、少しくらいは思出しもする」

「そうだよね。うん」

戸惑ったような声に、置かれた肩に手を乗せる。
強く握り。

「大丈夫だ。根拠はないけれど、ね」

「うん、安心す——」

そう問いかけた言葉が、途中で止まった。

凝視している。

何をと、視線を向ければ——そこに血に染まる手が張り付いて。

「ところで、今宮君。幽霊とか信じる？」

「いや、あれはお隣さんだ」

血まみれの——もはや人の限界をとどめないほどに壊れた無表情の女性が、ベランダの外にいた。

Ψ Ψ Ψ

「逃げろ！」

突き飛ばすように明日香を押し出し、同時に女性が突進を開始した。

再び割られるガラス戸に、明日香も振り返らず——置かれた紙袋と旅行かばんを抱きしめ、外へと走り出す。

足を半ばへし折られ、腕で這いながら猛スピードで彼女は迫った。
手斧を抜き放ち、頭部めがけて振り下ろす。

女が首を振った。

それは狙いはずれ、肩口にささり、鈍い手ごたえを優にもたらした。

けれど、女の突進は止まらない。伸ばした腕が優の肩を掴み、そ

の体制で優は背後に倒れこんだ。同時に足で腹部を蹴り上げ、投げる。

優の巴投げに、わずかばかりの手が離れて衝撃音を撒き散らしながら、女は壁面に激突した。壁を掴み、跳躍——キャンプグズの入ったかばんをフルスイングすれば、上空にいた女は再び吹き飛ばされた。

その隙に優も、かばんを肩にかけて走り出した。

「今宮君、早く！」

「先に行ってろ！」

叫び、玄関を飛び出す。

早い。

すでに用を足さなくなった足で、そして腕で。

女は四速歩行の獣ののように迫る。

階段を駆け下りながら、振り返れば再び跳躍し一気に間合いをつめる女の姿があった。

そこへ向けて、再びかばんを振りぬく。

——受け止めるかよ。

毒づいた言葉とともに、先ほどとは違いかばんを掴み、女が離れることはなかった。

だから。

蹴りぬいた足で、無理やり引き剥がしながら、再び階段を駆け下りる。

マンションを抜ければ、荷台の上で明日香が声を上げている。

早くと。

走る優を見て、その背後に迫るものに、双子の少女が悲鳴を上げた。

「な、なんだ。ありゃ——」

「普通、死ぬでしょ」

度胸の据わっているであろう鈴ですら、その光景に顔を蒼白にさせた。

「これを！」

舌打ち。

手にしたかばんを荷台へと投げ込みながら、優は振り返り鉈を振るう。

かわされた。

大きくしゃがみこんで、首への一撃を交わした女は即座に伸び上がり、顎を開く。

そこに、優の右膝がひらめいた。顎を下からかち上げられて、女は血しぶきを吐き出して顔を上に向ける。だが、左腕が優の袖を掴んでいた。

力任せの強引な投げ、それは——強引であったが、確かに優が見せた、背負い投げ。

左腕を支点に、持ち上げられた優は咄嗟に頭をかばい、背中から着地。

肺から空気があふれ出た。

女の左腕はいまだ、優の袖を掴んでいる。

痛みに顔をしかめながら、掴んだ手を袖で巻き込んだ。それを支点に左腕の間接を極める——同時、骨のへし折れる鈍い音とともに、女の腕が半ばから曲がった。

痛みは感じなかったとしても、それで一瞬掴まれた力が緩んだ。

無理やり引き剥がし、荷台に転がるようにして逃げ込んだ。

「出せ！」

言葉が終わらぬうちに、トラックはけたたましいエンジン音を立

てて走り出した。

走る――足が折れ、腕が折れてもなお、女は右腕と折れた左腕の骨で走った。

だが、それもトラックが時速八十に跳ね上がれば、追いつくことはできない。

隣人の女を残して、トラックは走り出していった。

Ψ Ψ Ψ

息が荒い。

痛みも酷い――トラックの荷台で崩れるように、倒れこむ優に明日香は心配げに声をかけた。

「大丈夫、今宮君？」

「ああ。噛まれてはいない」

だが、大丈夫とはいえないだろう。体はぼろぼろだ。

アスファルトに激突した背中には熱を帯び、ずきずきとした鈍い痛みがある。

だが、それよりも疲れた。

わずかばかりの戦闘であったが。

「ちょっと待ってくれ」

荷台の上で姿勢を変えて、トラックの脇にもたれかかりながら優は呼吸を整える。

「な、何だってんだよ。あんなゾンビ、はじめてみんぞ」

戸惑ったような言葉は、遠藤のものだ。

煙草をかみ締めながら、鈴もあたしもよと呟いていた。

その悲惨な光景に、双子の少女たちは怯えていたし、明日香もまた顔面が蒼白だ。

それでも優の自宅においてあったミネラルウォーターを、カップに移して優の前に差し出した。

「飲める？」

「ああ。ありがとう」

札を言って受け取れば、それを一気に飲み干した。

冷たい清涼感が胃に流れ落ちる。

視線ははまだ、背後——加速して流れる、道路の奥だ。

彼女は、最初あれほどに速かったか。

そして、攻撃を避けることなどあったのか。

ありえない。

今まで優が相手をしてきたゾンビは、攻撃をくらうことを何も思わない。

だからこそ、一撃で殺すことができたし、攻撃自体も単調であって恐れるものではなかった。

「考え違いをしていたな」

「考え違い？」

「ああ。テレビで見ただろう、空から降ってきたゾンビを」

「あ。うん、あったよね」

思い出したのか、再び顔を曇らせる明日香を優は見えない。

ただ、まっすぐに見ているのは——もはや見えなくなった隣人の姿。

「成長しているんだ、奴らは。攻撃を受けても生き残れば、成長する。より効率的に、より確実に獲物を狩るために」

救出活動5

「母ちゃん、母ちゃん！」

叫んだ声と、伸ばした手は浜崎隆文の力強い手によって止められた。

それでもなお、伸ばした手が宙をかいて、助けを求めるように動く。

両腕で、彼を抱きとめながら浜崎は沈痛な面持ちを浮かべ、唇を噛んだ。

「浜崎。もう持たないわよ。どうするの、逃げる？」

扉を止めている琴子が、切羽詰ったように声を張り上げた。

薄手の合板製の扉は、何度も繰り返す叩かれ、破片を撒き散らしている。

何とか扉を高木と琴子が押さえてはいるが、それも扉ごと壊されれば終わりだ。

その脇に、齢八十を超えた老人が力なく座り、日原が心配げに背中を抑えている。

朝からたった一人で、彼らが到着するまで扉を支えてきたのだ。

高木と琴子が二人で何とか押さえているそれを、何時間もたった一人で。

限界なのだろう、だが見上げる視線は扉であり、正確には扉の向こうだろう。

この合板一枚を隔てた向こうに、宮下洋平の母親はいる。

「母ちゃん！」

悲痛な叫びが、耳朶を打った。

悲鳴に合わさるように打ち付けられた音は、確実に扉を割っている。

やがて、一発が合板を貫いた。

伸びるのは太い分厚い脂肪に覆われた、小さな手だ。

皮膚が破れ血にまみれ、それにかまわず打ち付けられる破壊の音。

「もう、限界よ」

「くっ」

二人の声が、小さく漏れ出た。

何とかして欲しいという言葉は、けれど決して言うてはいけないものだ。

何よりも宮下自身が何とかして欲しいと願っているに違いない。そして、何とかできる事があるとすれば逃げるか、それとも。

「宮下あ！」

分厚い言葉とともに、甲高い破裂音が背後から聞こえた。

それは浜崎の一撃だ。

手のひらを頬に当てられたビンタに、びくりと衝撃を受けて宮下が言葉を失った。

痛い。けれど、それ以上に浜崎の表情は痛みをこらえている。

「お前の母ちゃんだろ。どうすんだ、このままにしておくのか。それでいいのか」

「あ……」

差し出した手が扉を示す。

確かに綺麗だったとはいえない。家事のため、洗剤にこすられた肌はぼろぼろだ。

でも皮膚が破れ、血にまみれ、それでもなお扉に拳を打ち付ける。
その手は異様で、そして痛々しい。

何とかして欲しい。でも、出来ないのならば。

「楽に……」

そう願った。

誰か、母ちゃんを助けてください。

説教くさくて、いつも小言を言っていた。

韓流ドラマにはまって、いつか韓国に行くのが夢だと言っていた。

宮下が喧嘩をしたと聞けば、本気で怒った。

病院に運ばれたと聞けば、心配してずっと付いていた。

いつも笑って、怒って、涙もろい。

そんな母ちゃんが——大好きだった。

「楽に、楽に」

「ああ」

力なくうなだれた宮下の肩を押して、浜崎は頷いた。
見守っている。

誰もが心配げに、浜崎と宮下を見守っていた。

本当にいいのかという言葉は、誰の口からも発せられない。

それは、宮下洋平が勇気を振り絞って言った一言への否定になる。

「三秒であけるわよ。浜崎、早く終わらせて」

「ああ」

頷いた言葉に、とめる声があった。

宮下だ。

「浜崎さん」

「あ？」

「や、やっぱり俺がやります。俺が始末します」

「何いってんだ？」

「おれ、母ちゃんっ子だったから。だから、自分でやりたいんです。わかってるけど、でも母ちゃんを殺されたって思ったら、俺浜崎さんを恨んじやうと思うから。こんなことで、こんなことで、誰も恨みたくないから。俺が、俺がやります」

泣いている。

小太りで、決してかっこいいとはいえない姿だ。

ただひたすらに涙を流しながら、仁王立つ姿に――琴子も高木も何もいえない。

泣きながら、それでも決意を固めた男の顔だ。

「気にすんな」

だが、浜崎は頬を緩めて、それを否定した。

小さく手を伸ばし、宮下の頭を撫でて、笑う。

「自分の親を思わない奴がどこにいる。それが、自分で殺すなんざ一生後悔してもしたりねえ。俺はお前にそんな思いをしてもらいたくはねえ、お前はそこにいろ」

「でもっ！」

「それで恨むと言うなら、恨めばいい。後ろから刺したってかまわねー。そんなことくらいで、俺はしなねえがな。てめえの恨みも全て受け止めてやる、俺たちは仲間だろう」

「う、う――」

それ以上は言葉にならなかった。

腰が砕け、震えが走る。

それを浜崎は見えていなかった。

黙って、扉の前に立つ――琴子に視線を送り、頷きとともに扉が開かれる。

伸びだされた手を掴み、さらに扉の奥へ。

再び扉が閉められ、同時に室内に轟音が響く。

叩きつけられる破碎音、そしてすぐに静かになった。

Ψ
Ψ
Ψ

扉が開き、浜崎が姿を現せば、静かな言葉が耳に入った。

震えるような言葉だ。

「すまないねえ」

見下ろせば、ゆっくりと日原に支えられながら老人が立っている。

宮下洋平の祖父である、宮下敬三だった。

「私にもう少し力があれば、孫にもあんたにもこんな事をさせなくてすんだのだが」

震えているのは悲しみだけではない。

自らの無力によるところでもあるのだろう。

「いいえ。よく耐えてくれました、そして生き残ってくれました。それだけで十分です」

「優しいねえ。顔に似合わず」

「よく言われますよ」

浜崎は苦笑をかえせば、老人は朗らかに笑い声をあげた。

「他に人は？」

「いや。息子は――ああ、洋平の父は昨日は帰ってこなかった。心配していたが、今朝になって彼女もなあ」

「そうですか。いま、私たちは拠点を見つけて集まっています。も

しよければ、来ていただけませんか？」

「こんな老人が行っても、迷惑なだけじゃないかね」

「迷惑何てとんでもない。いろいろ教えてもらうこともあるでしょう、それに」

言葉にして、うなだれる宮下に視線を向けた。

「彼にも」

「ああ。本当に優しいね。すぐに準備をしよう。何か必要かね？」

「とりあえず、そこを拠点に生活するつもりでいます。だから、必要な物資があれば、外にバスを待たせています」

「ああ。そうか、それなら——ちよっと庭の倉庫まできて欲しい。あれも必要だろう」

「ええ。日原、バスの準備を。高木は一緒に来てくれるか」

「浜崎さんっ！」

言葉に、驚いたように全員が振り返った。

発したのは宮下洋平だ。

立ち上がり、頭を下げている。

「ありがとうございますっ！」

「気にするな。そっちも準備をしておけ」

手を振りかえし、浜崎と高木が敬三に続く。

縁側を降りれば、そこは小さな庭だった。

花や野菜が色とりどりに飾られている。

小さいながらも見事なものであり、その一角を占める倉庫に敬三は近づいた。

あける。

「拠点にするなら、少しくらい自給自足ができた方がいいじゃろ」
そう言って、笑う敬三は倉庫の中を示した。

肥料や野菜の種、土やクワといった園芸用道具がひしめいている。

三角の台車を引っ張り出しながら、敬三はそれに器用に肥料を載せ始めた。

「農家をやられていたのですか？」

「趣味じゃよ。元々は大工をやっとった。これでも棟梁と呼ばれておったんじゃない？」

「それで、のこぎりとか工具もあるんですね、この材木もいただきます？」

「ああ。必要なものは全部持っていくといい」

「ありがとうございます。リーダーも喜びます」

「おや。君がリーダーではなかったかい？」

「違います。リーダーは今別行動中です。きつとおじいさんも気に入ると思いますよ——うちのリーダーは優秀ですからね」

笑い声をあげながら、浜崎は角材や木材の束を一息。

一気に持ち上げた。

重量数十キロに達するであろう巨大な木材の束を肩に担ぐ姿に、朗らかだった敬三は大きく目を見開いた。とても一人で担げる量ではない。

それを軽々と肩に乗せながら、左手で別の木材の束を掴む。

「君の言うリーダーがどんな人物か知らんが。だが、私は大工時代に君が欲しいというよりも、今からでも働く気はないかね。紹介するよ？」

「残念ですが、手先は不器用なもので。力仕事だけが得意な半端もんですよ」

「将来は安泰ですね」

高木が笑いながら、こちらはシンプルに台車に土を乗せて運び出していった。

Ψ Ψ Ψ

大量の材木と園芸道具、工具や台車を積んだバスは次に高級住宅街に止まった。

一軒一軒が広く巨大だ。

その家の前に止まり、バスから降り立った面々を目を開いていた。
『浜崎』

表札に書かれた文字と、巨大な鉄製の門扉。

そして、普通の家が何件も並びそうな広大な敷地と大きな建物。誰もが驚きを持って、それを見上げていた。

「ちょ、ちょ、浜崎。名前違いなんじゃないの」

「ちがわねえよ」

対する浜崎は、その家を見ても苦笑を浮かべただけだった。

鉄製の門扉を開いて、開け放てば声が聞こえた。

犬だ。

二匹の足の長い中型犬が飛び出した、それを浜崎は受け止めて頭を撫でる。

どちらも同じ犬種であるらしいが、足の長さが特徴的な犬だった。体長は五十センチほどで、ウィペットという猟犬の犬種であると浜崎は伝えた。

「こっちの白斑がファット。茶色い模様が特徴なのがフィアだ」

がしがしと頭をかいてやりながら、何かを求めているようだ。苦笑しながら浜崎は玄関を開けて、下駄箱の横から荷物を取り出

してくる。

手に握られた、ドックフードを前においてやった。

それにわふと嬉しそうに尻尾を振りながら、しかし見上げるように浜崎を見ている。

「食べていいぞ」

その言葉で、二匹は一気に食事を開始した。

もう一度撫でて、呆然とする面々に気づいた。

「ほ、本当に？」

「ぶ、ブルジョワだよ。犬だよ、しかも超賢い。滝口よりも賢いぞ、あれは」

「失礼な奴らだな。いいからあがれよ」

首を振って、浜崎は玄関に招き入れた。

Ψ Ψ Ψ

「浜崎製鉄って聞いたことないか」

「聞いたことって、上場企業じゃない」

浜崎製鉄株式会社。それは主要の鉄鋼製品のみならず、原子力関係や不動産にまで手を伸ばす巨大な会社だ。子会社も多く、あるいは別の上場企業の企業株主でもある。

そんな名前を突然出されても、琴子に出来ることはただただ口を開くだけだった。

高木と日原、そして宮下洋平と敬三には食料品や園芸用品の倉庫を伝え、琴子とともに浜崎は二階へとあがっていた。

「じゃ、あんたも将来は社長になるわけ？」

「どうかな。俺は世話になるつもりはなかったが。それにこんな状

況だ、どうなってるかもわかんねえ」

苦笑混じりに言葉を返す。

あまりいい思い出はなさそうだった。

「第一、親父や兄貴にはもう二年もあってねえ。使用人はいたが、誰にもあわねーところをみると、逃げたかもしれんな。ま、幸運だが」

「メイドさんとか」

「四十を過ぎたおばちゃんだったけどな」

住んでいるところが違うとは比喩の言葉であつたが、琴子は見渡しなからそれを実感した。飾られる絵画や壺など価値はわからなかったが、琴子が一生働いても変えないのではないか。そもそも、ところどころの壁に飾られる剥製の意味もわからない。

鹿か、いや鹿にしては大きすぎる。

「トナカイだ。兄貴が狩猟好きでな」

視線を受けて、浜崎はその剥製の説明をした。

長い廊下を抜けて、たどり着いたのは部屋だ。

扉を開くと、そこは剥製の大群が彼女を出迎えた。

熊やいのしし、それに鹿――それらが、現実的なものとなって彼女を出迎える。

その迫力に気をされながら、琴子は一步後ろに下がった。

「な、なんか。ずいぶんとすさまじい部屋ね」

こんなところでは落ち着けないのではないだろうか。

浜崎とのギャップに驚きを感じれば、背後で浜崎が首を振った。

「俺の部屋じゃねえ。ここは兄貴の部屋だ」

「お、お兄さんの？」

「ああ」

そう言って、浜崎はずかずかと上がり込むと引き出しに手をかけた。

一番上を開けて、鍵を取り出す。

二つずつ付いた鍵が、合計三つ。

それは重厚な作りで、分厚い鍵だ。少なくとも複製することなど不可能だろう。

「やっぱり、ここに入れてたか。無用心の上に犯罪だぞ——ま、探す手間が省けたが」

呟きながら、次に移動したのは壁面に固定された、頑丈そうな金庫。

見ればロッカーのようにも見える。

しかし付いた二箇所の鍵と壁面に固定されたロッカーは、重厚な作りだ。

それに鍵を差込み、ひねる。

違ったようだ、それを引き抜けば次に再び差し込んだ。

今度はあいた。

「な、何なのよ」

「いっただろ、狩猟が趣味だって」

そう言って浜崎が扉を開けば——そこに、一丁の散弾銃が立てかけられていた。

Ψ Ψ Ψ

レミントンM870。

有名な散弾銃だ。

ポンプ式で、二発の弾丸をこめることが出来る。

それを取り出して、弾を確認する様子に琴子は口を何度か上下させて。

「何で、そんなもんがあるのよ」

「別に免許さえありゃ、あるのは問題ねーだろうよ。まあ、本人以外が取り出せたってのが、大問題だが」

そんなことがあれば、免許が取り消しどころの話ではない。

立派な犯罪だ。

事も無げに話しながら、浜崎はそれを金属バットでも入れるような長いケースに入れて背に担いだ。

「弾はそっちか」

そう言って、再び机に向かい合った。

最下段に設置された引き出しを開けば、金庫が姿を見せる。

慣れた手つきで操作し、鍵を開ければ開いた場所に箱があった。

実弾だ。

箱に入れられた実弾の束を手にして、無造作にケースにしまっていく。

その手つきに、琴子は頭を抑えた。

いまだ混乱がとけやらない頭を、冷静に冷静にと思う。

「ちやうど狩猟の時期で助かったな」

「助かったって、いやあんた、何でそんなに冷静なのよ」

「今宮がうつったかな」

からからと笑う浜崎に、笑い事じゃないわと琴子は額をおさえた。銃だ。

しかも、実弾だ。

それは確かにゾンビに対しての強力な武器になるだろう。

だが、同時に人に対しての凶器にもなりうる。
いかに浜崎や今宮が強くても、銃には適わない。

「正直に言うと、俺もさすがにこれを持ち出すつもりはなかった。
昨日だって言わなかったろう」

確かに、昨日浜崎が今宮に尋ねたのはどこに行くかということだ。
もし、銃が自宅にあることを知っていたら。

それを先に行ったのではなかったか。

安全な場所があると、武器があると。

だが、浜崎隆文は一言も語ることがなかった。

「銃は強力だが。弱い人間が持てば、それに頼っちゃう。ましてや、
強いと錯覚しちゃう。それなら、まだない方がいい」

その言葉に琴子も同意の頷きを返した。

心の弱いものが持てば、どうなるか——下手をすれば、それは味
方への脅威となるのだから。

「でも宮下を見て思った。成長したよ——宮下だけじゃない、日原
も、高木も、滝口も、そして遠藤も。みんな昨日よりも今日、そし
て今日よりも明日。強くなっている」

「それは、私もそう思うけど」

きつと学校にいるときには考えることも出来なかったことだろう。

彼らを信頼できる日が来るなんて思いもしなかった。

けれど、今なら言える。

強く決意を固めた宮下を、バスを迷いなく運転する日原を。

「私も信頼しているわ、浜崎も」

浜崎は満足げに頷いた。

「ああ、秋峰もな。それはあいつらの頑張りもあるだろうが、何よ

り今宮の存在が大きい。まっすぐに冷静で、そんなあいつを見ると、今の現状に嘆いて何も出来ない自分が悔しくなる。だから、あがきたくなる。そんなあいつがいる今だからこそ、俺はかけてもいいと思えたんだ。きつと奴ならこれを有効に使ってくれる、そう信じる事ができた」

「そう——」

そんな言葉に、琴子は湧き上がった恐怖がすっと消えていくのを感じた。

恐ろしい武器であるが、信頼できる人間が持てば、何より頼りになる武器であることは間違いない。

「なら、私も信じないとね。信頼しているって言ったばかりだし」
うん。きつと大丈夫だと、明日香がいればそう笑っていたことだろう。

何も考えていない人を信じる少女を思い出しながら、琴子は笑いかけ——ふと気づいた。

鍵は三つ。

「え。ちょ、ちょっと」

「隣とその隣に、使用人の『部屋』がある。ま、ばれたら間違いない、逮捕だろうけどな」

銃は一丁だけではなかった。

Ψ Ψ Ψ

「浜崎さんっ。って、その荷物何なんですか？」

「あとで見たら驚くわよ」

疲れたように、銃を入れたケースを一つ担ぎ、琴子はため息を吐いた。

浜崎も左右の肩に二つずつ、そして自らの部屋から持ってきたバ

イクのメンテナンス道具や服を入れたかばんを軽々と持ち上げている。

「それより、食料品の倉庫って凄いですよ。でかい肉が完全冷凍でしまっているんです。食肉店みたいに」

「ワインセラーも圧巻だったな。ロマネコンティとか無造作にしていますし」

「園芸用の倉庫も――土とか肥料とか」

その浜崎製鉄の資産力を語り、どこか遠い現実の話のように語った。

「いくらかは積み込みましたけど、全部はさすがに時間がかかりますね。てか、冷凍の肉、あのままじゃ銀行の冷凍庫に入りきりませんし。ここの冷蔵庫は大型ですけど、さすがに持っていけません」

「日原、バスを裏に回してこい。切るなり分けるなりして、入りきるだけでいい。もし必要なものがあれば、また取りに来ればいいんだ。あと二件回るから、正午まで時間を切って運び入れんぞ。他は玄関まで荷物を運べ」

「わかりました」

駆け出していった日原に続いて、浜崎も玄関に荷物を置いた。食事を終えた二匹の犬が、尻尾を振って待っている。

「お前らはゾンビを見張ってくれ。近づいてきたら吼えろよ」

「わんっ！」

通じているのか、浜崎の言葉に二匹が力強く鳴いた。

それを背後にして、再び荷物を運ぶために室内へと戻る。

「ずいぶん、賢いのね」

「猟犬だからな。もっとも、兄貴は世話をしないから俺になついたが」

「面倒見よさそうだものね」

「まあな。別れるのはおしいが」

「別れるって、置いていくつもりなの」

驚いたように琴子がたずねた。

「賢いっていつても、犬だ。万が一、夜に吼えてゾンビを招き入れるなんて事になったら、大変だし。きっとそれは今宮が許さないだろ」

「大丈夫よ」

その寂しげな表情に、琴子は友人に似た根拠のない大丈夫を思わず呟いていた。

でも、大丈夫な気がする。

「家族なんですよ。もう、ここには誰もいないし———そういえば、今宮だって許してくれると思うわ。ううん、私も一緒に頼んであげる。だから、そんな悲しそうな顔しないで」

「秋峰……すまん」

「いいのよ。たいした事じゃないわ」

迷っていたのだろう、嬉しそうな表情を浮かべる浜崎が、まるで子供のように見えた。

救出活動6

「いやいや、ご丁寧に。お礼の言葉もございません」

「あ。いや、そんな大した事をしたわけでは」

「ちょ、お母さん、お父さんも。浜崎さんが困っているじゃないか」
困ったように高木が頭をかいた。

人のよさそうな眼鏡の男性と、ふくよかな女性が並んで座っている。

高木稔の両親——高木秀介と高木恵子であった。

ちょうど秀介は昨日は仕事休みであり、恵子は専業主婦だ。

息子の帰りがなく、探しに行きたい。しかし、テレビでは非常事態宣言のため外に出ることを禁止されている。

どうしようと思っていたところで、彼らが到着したのだった。
高木稔の姿に、丁寧にお礼を言われれば、浜崎たちも頭をさげるしかない。

「どうぞ、ごゆっくりしてってください。いまお茶を入れますから」

「お母さん、そんな悠長なことをしている場合じゃないんだ。いま、浜崎さんたちと一緒に大高都市銀行に集まっている。お母さんたちも準備をして」

「あら、銀行——？」

不思議そうに母親である恵子は首をひねった。

「何でまたそんなところに」

「いろいろとね。防犯設備もしっかりしているし、何より太陽光パ

ネルがあって電気も使える。ここよりはよほど安全で、快適だと思うよ」

「太陽光パネルですか。それは素晴らしい、最近良く注文が入るよ」
目を光らせたのは隣に座る、高木秀介だ。

「お詳しいのですか？」

「私は便利屋をしております。最近では太陽光パネル人気で、よく設置の依頼を受けます」

「それは凄い」

「いえ。凄いというほどのものでは、とどのつまりは何でも屋ですよ。トイレのつまりをとったりとか、蜂を退治したりとかいろいろです」

「だから、自己紹介はあとでもいいだろう。ほら、用意していくよ」
疲れたように高木が促せば、そうだねと秀介が立ち上がった。

「じゃ。母さんはこっちで荷物を積み込んでくれるかな、僕は外で車の準備をしてくる」

「車があるのですか？」

「うん、仕事用のね。一通りの仕事道具は入っているし、役に立つと思うよ。稔、大高都市銀行だね」

「ああ。そうだ——」

「わかった。じゃ、僕たちは準備を終えたら出発するから。そっちは先を急ぐといい」

「って。ゆっくりなのかせっかちなのか、はっきりしろよ」

「稔が急げって言ったんじゃないか」

くすりと、秀介は微笑を浮かべた。

Ψ Ψ Ψ

秋峰家は木造の古風な一軒家だ。

敷地自体は浜崎の家には劣るが、それでも道場が併設されているために一般の民家以上の広さがある。

バスから滑るように降りて、振り返り。

「いま呼んでくる。すぐに戻るから」

「いや、一応付いていこう」

「心配性ね」

降り立った浜崎に小さく笑いながら、琴子はナギナタを手にもった。木製の門扉を開けた。

日本風の家屋だ。

門扉を開けば、飛び石が家の玄関まで続いており、ガラス戸があった。

割れている。

スライド式のガラス戸は、一部が欠落し剥がれ落ち、ヒビが入っていた。

何かがぶつかったような痕跡に、門扉を開けたままに琴子は小さく体を震わせた。

「大丈夫、よ」

そう呟いたのは独り言のようで、手にしたナギナタに力がこもった。

ガラス戸には鍵がかかっている。

スカートのポケットから、鍵を取り出してあけた。

音がして、ゆっくりとスライドされて開かれる扉。

崩れかけていたガラスが、外れて硬質的な音を立てた。

「ただいま——っ！」

琴子の言葉に、出迎える声はない。

薄暗い板張りの廊下があって、壁掛けの古びた時計が飾ってある。

そして、その長い廊下を走るのは——赤い紅い染み。
琴子は浜崎を置いて、駆け出した。

靴を脱ぐことも忘れ、走り出す。

廊下に行く血痕は、まっすぐに奥の部屋へと向かっている。
仏間だ。

後ろから浜崎が声を上げて、追いかける。

聞こえない。

ただ自分の荒い息だけがわかる。

閉じられた仏間の扉を開けようとして、開かなかった。

何かが引っかかっているようで、引いても押してもびくともしない。

「秋峰、下がってろっ！」

言葉とともに、分厚い足が扉に食い込んだ。

衝撃音——続けざまに、もう一撃足が繰り出されれば崩れるような音が仏間から響いた。

すでに半壊している扉を、こじ開ければ、そこには机を重ねたバリケードがある。

その奥で。

「おとうさんっ！」

琴子は悲鳴を上げた。

Ψ Ψ Ψ

秋峰琴子の父親——秋峰恭介が倒れていた。

血にまみれ、身を包んだ白い衣装がまるで赤だったように染まっている。

顔に深い噛み傷があり、頬の肉がごっそりとかけ落ちていた。

うなだれる様に仏壇にもたれかかりながら、それでも前を向きバリケードを凝視している。

「おとうさんっ！」

叫び飛び出そうとした琴子を、浜崎は制止した。

「秋峰。秋峰、落ち着け！ 親父さんは、噛まれてる！」

「うるさいわね。いいからそこをどいてよ。離してよ！」

「離すか。落ち着け——親父さんは噛まれたんだ！」

「いいから、離せ！」

叫び声とともに繰り出されたのは膝だ。

それは狙い変わらず、浜崎の股間を捕らえた。

突然の金的にさしもの浜崎も衝撃を受けたように、崩れ落ちる。

その手が離れた。

「お父さんっ！」

叫び駆け出した琴子が、父親に近づいた。

けれど——動かない。

琴子が父を抱きとめ、力強く揺する。

だが、その体に力はなく、体温もない。

琴子が揺するままに体が揺れて、上下していた。

やがて。

その光景に、最悪の状況を予想していた浜崎は驚きを浮かべる。

なぜ、襲わない。

ただ琴子の呼びかけにも答えず揺すられるままだ。

家族だから——そんな馬鹿な。

「大丈夫、よ。お父さん、襲わないよ」

そんな潰れそうな声が、琴子から漏れ出た。

それは消えそうで、切ない小さな声だ。

「だって、もう死んでるから」

浜崎は大きく目を開いた。

ゆるりと体を起こし、痛む股間を押さえながらも慎重に足を進める。

そこに秋峰琴子の父親はいた。

頬を噛まれ――そして、肩から腹部にかけて深い裂傷がある。

まるで何かに切られたように。

ゾンビ化する前に、死んだのか。

深い血溜りの中で、汚れることもかまわず、琴子は佇んでいる。

振り返る、死んでいるともう一度消えそうな声で言った。

その瞳に涙はない。

感情もない。

だが、それはゾンビのような無表情ではない。

怒り、悲しみ、そして怯え――様々な感情が入り混じった無表情。

浜崎はかける言葉を失い、琴子を見下ろした。

再び父親へと振り返り、小さく抱きしめる。

かける言葉など思いつくはずもない。

首を振った浜崎の耳に、小さな音がした。

ことりと。

すぐに周囲を見渡して音の場所を確認する。

琴子の耳にはその、微かな音は聞こえなかったようだ。

だが、確かに音がした、そんな気がする。

浜崎は思う。

なぜ、彼の父はこの部屋に閉じこもった。

出血多量になるほどであれば、まず治療を考えるはずだ。自分がゾンビになることを恐れ、閉じこもったのだろうか。違う。

それならば、わざわざバリケードなど張る必要もない。

死を前にして、彼は――秋峰琴子の父親はゾンビを塞ごうとしたのだ。

「秋峰、ちよっとどいてろ！」

「浜崎？」

意味がわからないと、ただ仏壇の前から浜崎に押しのけられて怒りを浮かべる。

そんな表情を一瞥もせずに、浜崎は仏壇を抱えた。

「ぐがつ」

力をこめて、それを引き抜く――投げ捨てれば、仏壇は崩壊の音を立てて倒れた。

「ちょ、ちよっと浜崎。いい加減にしてよ！」

「守ったんだ」

叫んだ琴子の前で、浜崎が安堵の表情を浮かべている。

何かと、浜崎の視線をおって、琴子は大きく目を開いた。

仏壇が塞ぐ壁の中。

人が入れるようなわずかばかりの隙間の中で、子供を抱く――女性。

意識を失っているのか、気絶しているが――その体に深い傷はない。

「守ったんだよ、秋峰の親父さんは。死にそうになりながら、それでも大切な人を」

「お母さん、千里も」

「自分が噛まれて、切られて、死んでも——ずっと」
「うん……」

腕の中で、あとは任せたとばかりに眠る父を抱きしめながら、琴子は一筋の涙を流した。

Ψ Ψ Ψ

「いいのか？」

「ええ。もう大丈夫——お父さんの思いは無駄にしないわ」
力強い言葉が返ってきて、浜崎は頷いた。

目を覚ました秋峰琴子の母親——秋峰里美と妹の千里が全てを話してくれた。

感染した祖父が襲い掛かったこと。

それを守るために父親がどれほど強く戦ったかを。

そして、彼女たちを隠し部屋に隠したのだ。

最後まであなたのことを心配していたと、母親に言われ、琴子は再び涙した。

それを拭い、琴子は強い表情で浜崎を見た。

「私は今から決着をつけてくる。お父さんが出来なかったことを」

「一人で大丈夫か？」

「大丈夫。浜崎はお母さんたちをよろしくね」

「任された」

「琴子」

「私は大丈夫だから。それにこれは、私の手でやらないといけないから」

そう言われれば、不安げな里美も小さく笑った。

「しかし、不思議ね。まさか琴子か彼氏を連れてくる何て」

「お、おかっ！」

「残念なのですが、そういう関係ではないんですよ」

「あ、当たり前でしょ！」

強く否定の言葉を口にして、まったく琴子は小さく息を吐いた。
浜崎が母親と妹を連れて行く。

残された琴子は背後を振り返った。

祖父がゾンビになったと聞いた。

だが、彼はいまだにそこで待っている。

そんな強い確信が琴子の胸に宿った。

琴子のナギナタの師匠であり、そして琴子を溺愛してくれた大切な祖父。

それが待っている。

だから、行かなければならない。

父親が出来なかったことを成し遂げるために。

そして、大切な祖父を楽にするために。

そう思い、強くナギナタを握り締めると、琴子は道場へと足を向けた。

道場では祖父が静かに座っていた。

厳格で、皺に刻まれた強い意志はすでにその表情にはない。

ただただ無表情で、静かに座っている。

「お爺ちゃん」

小さく呼びかけても、答える声はない。

ただ握っている。

それは真剣のナギナタだ。

動かない、言葉もない。

ただ、その意思を理解して、琴子は手にしたナギナタを脇におい

て、壁にかけられたナギナタに手を伸ばした。

こちらも練習用とは違う、刃が付いた――真刀。
立ち上がった。

ゆるりとあける口に広がるのは、紅い血痕。

清潔な白い胴衣も、すでに父親の血に染まり――それがゆつくり
とナギナタを構えた。

道場中央、近づいて一礼。

そして、戦いが始まった。

Ψ Ψ Ψ

加速する踏み込みは、琴子の予想よりも遥かに早い。

年をとってからの祖父は、基本的にはカウンターの戦術が多い。

緩やかな最小の動きでこちらの攻撃をかわし、一撃する。
けれど。

いまゾンビ化した祖父には体力の限界も、筋肉の衰えも存在しない。
い。

『秋峰流は、烈火の攻撃を特徴とした剛剣』

そう表現していた、全盛期の祖父の動きに琴子は構え、笑みを深くした。

強いと思う。

だからこそ、超えたいと思う。

それは武道を修めた者の願い。

より強く、より高みに。

「はっ！」

研ぎ澄まされた一撃が、打ち込まれる――刃先を滑らされた祖父

の刃が琴子の脇を駆け抜け、床を轟音をもって抉り取った。

交わしざまに、柄を振るう。

激突音とともに、狙い違わずそれは祖父の膝を打ち据えた。

しかし、痛みを感じないゾンビは打ち据えられた足を軸に回転。

鋭い蹴りを繰り出して、琴子はそれをナギナタで受け止めながら同時に背後に飛んで衝撃を逃がした。

追撃。

大地を叩き走り出す祖父が、縦横無尽にナギナタを繰り出す。

まさに烈火の攻撃に、琴子は柄で刃で、それらの攻撃を全て叩き落した。

攻撃を主体にするのは、秋峰流の特徴だ。

防戦は不利と、繰り出される攻撃の中で琴子は体を沈ませて、足を振りぬいた。

膝へと。

叩き込まれても祖父は動じない。

なお沈ませた琴子を狙いナギナタを動かす。

その脇を転がるようにして交わして、立ち上がった。

汗が頬を伝い、かすった肩から小さく血が滲んだ。

振り返る。

かわらず無表情のままに、祖父はいた。

それまでのゾンビとは違う。

ナギナタを手にして、武術の動きを覚えている。
でも。

でもと、琴子は悲しげな表情を浮かべた。

「出来れば、意識がある状態で戦いたかった」

再び祖父が動き出した。

駆け出す動作はそれまでよりも遥かに速い。

自らの身すらも捨てた、大上段の振り抜きだ。

「はあっ！」

叫びとともに琴子が疾走——道場中央で、琴子は祖父と顔を見合
わせた。

『痛いのは嫌か。でもな、琴子——痛みを忘れると人は強くはなれ
んぞ』

そう言ったのはお爺ちゃんよね。

あの時はわからなかった。

だって、祖父にナギナタで体中を打ち据えられた後だったから。
でも、今はわかる。

「わかるよ、お爺ちゃん」

痛いからこそ、人は避けようと思う。

痛いからこそ、人は優しくなれるのだと思う。
だから。

「痛みを忘れたゾンビに、私は負けないっ」

言葉とともに繰り返した攻撃は、再び祖父の足を打った。

その足が、折れる。

痛みがあればかわせたであろう攻撃。

だが、それは祖父に気づかせることなく、祖父の足を完全に破壊
していた。

折れ曲がった足が、振りぬかれた大上段の一撃を支えることも出
来ず、傾いていく。

その首を——振りぬいた琴子のナギナタが、跳ね飛ばした。

「ありがとう、お爺ちゃん」
倒れ行く祖父の体に一礼して、秋峰琴子は静かに瞳を拭った。

資格

「今宮が怪我をしたって本当かつ！」

叫んで一階――受付へと飛び込んだ浜崎が目にしたのは、ソファに座る今宮優の姿だった。

上半身むき出しの鍛えられた体。

その背には裂傷が刻まれており、明日香の手によって消毒液がつけられていた。

大げさだなと苦笑する優の姿に、浜崎の後ろに続いた面々も安堵の表情を浮かべた。

「少し――手こずっただけだ」

「今宮が手こずるって、どんな化けもんだよ」

宮下が呆れた様に口を曲げた。

無事でよかったよと肩を落とす浜崎の前で、明日香がガーゼを張った。

「ありがとう」

礼を口にして、シャツに袖を通しながら、ふと気づいたように優は浜崎を見た。

何で、内股なんだ。

いつもは堂々としている彼の姿に反して、現在の浜崎は足を内側に曲げた、俗に言う内股の姿勢だ。まるでどこかをかばうような立ち姿に。

「そういう、そちらこそどこか怪我をしたのか？」

「あ。いや」

問いかけに、浜崎は戸惑ったように視線を泳がせた。

そこに深刻さはないため、一先ず小さく息を吐きながらも、怪訝な表情を浮かべる。

促されるように問われれば、浜崎は言いずらそうに。

「まあ。その、攻撃されてな。ここを……」

「最近のゾンビは金的まで狙うのかよ。とんでもない成長力だな」

「い、いいじゃない！ とりあえず、無事だったんだし」

嫌そうな顔を浮かべた優の前で、話題を変えるように琴子が声を張り上げた。

事情を知るのであろう、宮下と高木は顔を背け、肩を震わせている。ただただ浜崎だけが困ったように、頭をかいていた。

「ま、何はともあれ。全員が無事で良かった。いろいろあったが」

その言葉に、優も小さく頷いた。

誰もが助けられたわけではない。

ただ、助けられた結果は現実となって、この一階の受付フロアにあった。

家族が。たとえ全員ではなかったとしても、家族が集まり、再会の喜びを浮かべている。

満足げに優は微笑し、その背後で明日香もまた嬉しそうに笑った。

「わん」

嬉しそうな言葉は、浜崎の背後からも聞こえた。

「……って、わん？」

「ば、ばか。お前らはまだはえー」

焦る浜崎の背後に、尻尾を振る二頭の犬がいる。

「い、いぬ？」

それを目撃した明日香が驚いたように、口を開けた。

「こ、これは今宮。ち、違うのよ——そう浜崎の家族なの。浜崎の弟さんと妹さん」

「人間じゃないと思ってたが。熊じゃなくて犬だったのか？」

頭痛を抑えるように、優が頭に手をあてる。

「いや。その、駄目か？」

「そんな怖い顔で上目遣いにみないでくれ。というか……」

ため息を吐きながら、苦笑し、駆け寄って犬を撫で付ける明日香を見ながら。

「いまさら駄目だとか言える雰囲気でもないだろう。とりあえず、集めた荷物をまとめて——落ち着いたら、自己紹介でもしようか」

Ψ Ψ Ψ

大高都市銀行。

拠点として作られたそこに、集まった人数は合計二十二名まで膨れ上がった。

最年長は宮下の祖父であり、八十二歳の彼を筆頭にして、二十歳以上の大人が八名。

次に高校生の優たちが九名おり、続いて遠藤の妹たち——中学生が二名いた。

最後に小学六年生である阪木弓奈と秋峰千里、そして最年少の小学三年生——二見和馬がいる。

一人一人の紹介が終わり、まるで場所は学校の懇談会のようだ。

「わふ」

犬が忘れるなど言わんばかりに、浜崎の周囲を回り、
「最後に、こっちの白斑がファット、こっちの茶色がファイアだ」

「わん」

宜しくとばかりに、優に向けて二匹が声をあげた。

「猟犬って言うってたな。訓練とかはしているのか？」

「ああ。それなりには、吼えることはないと思うが——わからん。何せゾンビを見せたことがない」

「見せない方がいいかもしれないね。もし彼らが腐り始めたら、犬の嗅覚には刺激的過ぎる」

「人間にもな」

腐るさまを想像したのだろう、浜崎が嫌そうな顔をした。

「心配していても仕方がない。それに仮に赤ん坊がいたとすれば、結局のところ泣くなといったところで、どうにもならない。それなら音の漏れないところにで寝かせるなり、対策をすればいいだけだ。幸い、防音の聞いた部屋もあるわけだしね」

コンピュータールームとかねと、優は肩をすくめた。

「しかし、いろんな人が集まったなあ」

居並ぶ面々を見つめながら、浜崎は感心したように言葉を紡いだ。二十歳以上の大人は八名。

その多くが、手に職をつけている。

佐伯夏樹はエンジニアとして、コンピュータの管理を得意としている。

宮下の祖父は、元大工だ。

滝口鈴は運転手をしており、日原の父親は自動車の整備工場を営んでいた。

他にも、高木の父親は便利屋として電気工事や修理を生業にし、秋峰の母——秋峰里美は元々は病院で薬剤師をしていたらしい。薬品にはもちろんのこと、ある程度の病気に関する知識も深い。

二見陽菜はバーで働いていた。

確かに夜の仕事であるが、厨房の方にもいたらしく、昨日の料理の味を考えれば、納得できることだった。

結局、成人した大人が八人いて、専業主婦の経験しかないのは高木の母親である恵子一人だけであつたが、その長い間培われた家事の知識は決して馬鹿に出来るものではない。

どれもが高校生の彼らにはわからない遠い世界の知識であつて、そして、これから生きていくのに必要不可欠な知識だった。

「こういう事も期待して、家族を集めるって言ったのか？」

「期待っていうかな。どちらにしろ知識では大人には勝てないさ」「ずいぶんと自信を持って断言するんだな」

「当たり前だろう。仕事だぞ。三百六十五日を何年もやり続けて、経験をして、考えて、働いて。それが、ただ学校で勉強しただけで理解できるはずもない」

「確かに」

苦笑をしながら、浜崎は頷いた。

ふと、優は真面目な表情を作ると、談笑する人々にゆっくりと手を広げた。

視線が集中する。

その中で。

「それで――次は誰がリーダーに？」

Ψ Ψ Ψ

優の言葉に、明日香は表情を固くした。
そう、彼は言っていた。

次のリーダーが決まるまでの代理であると。

優は元々一人で行動を考えていた。それを引き止めたのは浜崎であって、望んだのは明日香たちだ。

しかし、それも。

「いや、そんなに驚かれても困るんだが」

大人が八人もいる段階では、わざわざ高校生の優が率いる必要がない。

「俺はまだ、お前がリーダーをやるのが適任だと思っているんだがな」

「冗談。元々、そういうの苦手なんだよ。してくれる人がいるなら、それに越したことはないさ」

安心したような微笑を浮かべる姿に、浜崎は嘆息をした。

引き止めたいという思いはある。

けれど、引き止める理由もない。

昨日から優は十分すぎるほどに、その大役を務めてきた。

だが、大人が八人いるという現状で――高校生の彼にこれ以上の責任を押し付けるわけにもいかない。

誰かと優が視線を向ければ、最年長の宮下敬三がゆっくりと首を振った。

「それはいささか老人には骨の折れる仕事じゃな。お断りさせていただきます」

もう年を食いすぎたしなあと、苦笑する。

ならばと、次に視線を向けたのは滝口鈴だ。

まだ若い――そのトラック運転手の女性は煙草を齧りながら、肩をすくめた。

「そりゃ、昔はあたしも頭やってたことあるけど、悪いけど今回は

パスさせてもらうわ」

ひらひらと手を振る様子に、慌てたように優が周囲を探す。

「俺はやだぞ。そんなの趣味じゃねえ」

呟いたのは、ドワーフのような日原正則で――佐伯夏樹はその隣でねじ切れんばかりに何度も首を横に振った。秋峰の母親里美も、そして二見陽菜もゆっくりと否定の表情で首を振っていた。

優は次第に困惑を深めていった。

「勘違いしているようだけど」

と、ゆっくりとした口調が聞こえた。

高木秀介が妻の肩を抱きながら、微笑んでいる。

それは柔らかな笑みだ。

「リーダーというのは、なりたいたいからといってなれるものじゃない。その人を信じたいと願うから、みんなが付いていくのだと、僕は思う。もちろん」

と、言葉を置いて、秀介は話を続けた。

「君が高校生で――そして、僕たちの命を預かる立場が怖いことも十分わかってるよ。僕ももう四十を過ぎるけれど、そんな立場であつたら恐ろしいと思う。実際、妻と二人で何も出来ず君たちを待つことしか出来なかった。でもね、そこで立ち止まらずに行動が出来るからこそ、君が適任なのだと思う。僕たちを――息子たちを助けてくれたように」

「別にあんた一人に全部を背負えってわけじゃないさ。必要があつたら任せてくれたらいいんだ。それであたしが死ぬことになつても、それは任せたあたしの責任さ。あんたを恨む気なんてこれっぽっちもない」

「気軽にやりゃーいいんだよ。お前が動く、俺たちが付いていく。」

失敗なんざいまから考えたってしかたねーし。失敗しないわけがねえ。つか、現段階で完全にマイナスだろうが、これ以上どう悪くなんでえ」

口々に紡がれる言葉に、優は深いため息を吐く。

恨みがましく視線を向ければ、浜崎がにやにやと笑っていた。

面白そうに。

「ずいぶん楽しそうじゃないか、浜崎」

「今宮のそんな顔が見れたからな、面白くてしかたねえ。で、次は何をすればいいんだ、リーダー？」

言葉に、優は心底嫌そうな顔をした。

「とりあえず、そのリーダーって恥ずかしい呼び方をやめてくれ」

役割分担 1

それぞれの自宅から集められた荷物が、一階の受付フロアに広げられた。

個人ごとの荷物は別にして、集められたのは食料品や日用品――そして、武器の類だ。

今まで持っていた奴も含めて、広げ終わるころにはかなりの時間を要していた。

「これはまた、ずいぶん集まったな。しばらく買い物に行かなくてもすみそうだ」

「あとで整理して、一覧にしておかないとな」

「それなら、銀行の備品管理システムが使えると思います。ちょっといじれば何とか」

「ああ。じゃ、佐伯さん。お願いして良いかな」

「わかりました、隊長」

びっと敬礼をする佐伯夏樹に、優は目を開いた。

「何だそれは」

「リーダーが嫌っておっしゃってたので」

「だからといって隊長はないだろう。普通に今宮でいいよ」

「わかりました、今宮さん」

わざわざ付け足す佐伯に苦笑しながら、広げられた荷物を順番に確認していく。

食料品は多い。

それぞれの自宅から持ち運ばれた保存食は、かなりの量があったし、昨日に買いだめをした分もある。二十人あまりが三ヶ月ほど食べたいだけの余裕はあるだろう。

けれど、その多くがレトルトや缶詰であるし、生鮮食品の量は少ない。

それに今はまだ、水道が生きてはいるが――飲料水の確保も考えなければいけない。

逆に言えば日用品の類は豊富だ。トイレトペーパーやサラシラップ、その他もろもろの物資は節約しなくても十分まかなえるだろう。

もっともそれを作ろうとなれば、大変な労力が必要であって、一朝一夕に出来ることではないかもしれないが、今悩むことでもない。

「高木恵子さんと二見陽菜さん」

名前を呼ばれ、はいと二人が姿を現した。

専業主婦であった高木恵子と二見陽菜だ。

「これから食事とか身の回りの関係のことをお願いすると思います。もちろん、掃除や洗濯など必要があれば、声をかけてもらえば人数は手配します。ただその管理をお願いします――高木さんは身の回りの関係、日用品や生活用品を。二見さんは食料品を。在庫の管理システムというのは佐伯さんが作ってくれるそうなので。もし、足りなくなりそうなら、教えてください。こちらで調達します」

「わかったよ」

「どれくらい持ちそうか、一度計算しておいた方がいいですか？」
「もしそれが出来るなら。大まかでいいので、教えてくれると助かります。あと日用品や電化製品等必要なものがあれば、それもこちらに手配してください。出来るだけ、調達するように心がけます」

「なに。家族が二十二人に増えたところで、たいした手間でもない。忙しくなりそうだよ」

頼もしく腕まくりをする恵子の姿に、優は小さく笑った。

Ψ Ψ Ψ

次に視線を移せば、目に入るのは宮下宅と浜崎宅から持ち寄られた園芸用品や大工道具だ。よくこれほどにと、呆れる量は優の想像を超えていた。

土だけでも百キロあまりはあるだろう。それにプラスして肥料や植物の種――反対に視線を向ければ、基本的な大工道具はもちろんのこと、電動式ののこぎりや釘打ち機が置かれていた。クワやスコップ、材木といった材料が無造作に置かれている。

良くこれだけ持ってきたものだと言えば、材木は浜崎一人で担いだらしい。

バスから運び入れる際には優も持とうとしたが、その三分の二で限界だった。

「何だ。その熊でも見る目は」

「わかっていいるなら聞くな。むしろ熊がかわいそうだ」

「どういう意味だよ」

口を尖らせる浜崎を無視して、視線を向けたのは宮下敬三だ。

「この園芸用品で、屋上で野菜の栽培は可能ですか？」

「不可能ってわけじゃない。ただ根の短いものやハーブなんかの簡単なものに限られるがね。量だけを見りゃあんでもないが、畑を作るとなれば少なすぎる。主食というより補食や栄養補給程度に限られると思う」

「それがかまいません。とりあえず、米だけでいうなら周囲から調

達するすれば何とかなるでしょう。主食を考えるのはもう少し後でも大丈夫だと思います。ただレトルトや缶詰だけじゃ、どうしても味気ないですし。たまに新鮮なものが食べられる程度でかまいません」

「わかった。簡単だがプリンターでも作ろう。この時期は何がいいかな」

「宮下さんには、園芸関係の管理と材木関係の管理をお願いして良いですか。窓を塞ぐ必要もあるでしょうし、その辺の指揮もお願いします。いろいろ大変ですが――」

「なに、こんな老人の知識を溜め込んでおいたところで仕方がない。びっしりと鍛えてやる。なあ、洋平？」

「ちょ。じいちゃん。何、張り切ってんだよ。年を考えろ、この前もそれでぎっくり腰をやったところだろ！」

「いま、それを言うかね。そういうもんは黙っとくもんだ」

「いっでっ」

頭を叩かれて、小太りの青年――宮下洋平が頭を抑えた。

次に視線を向けたのは、日原の家から運び込まれた自動車関係の整備用品に、燃料――そして浜崎が持ってきたバイクの整備用具だ。本職をしていただけあって、大型のレンチやドライバーの他に何に使うかわからない道具も多い。携行缶やドラム缶に入れられているのは、ガソリンや軽油の類だ。

一見すれば高く詰まれるそれらは、十分な量があるようにも見えた。

ただ。

「日原さん」

「何でえ。って言っても、用件は一つしかねーな」

名前を呼ばれて、ドワーフのような日原の父親が一步前に進みだ

した。

優の視線に気づいたように、ドラム缶にもたれかかりながら。

「持ってきたのはガソリンが五十リットルに、軽油が百リットル。オイルが五十リットルってところだな。これがどれくれえ、持つかききてーんだろ？」

「ええ。その辺りについては、全然わからないもので」

「使う車の燃費や走行距離に左右されるから、参考とだけ言っておくぜ。大体、軽だと一リットル辺り十五キロ程度走るくらいに考えておけばいい。だから……だから、ええと」

そう言って正則は考えて、おいと息子に声をかけた。

「いや、五十かける十五でしょ？ ええと――」

「七百五十キロだな。軽油も同じとすると、そっちは千五百キロか」

「ああ、それだ。軽油はディーゼル専用だから、あのでかいトラックにしか使えないが。オイルに関しちゃ、三千キロから五千で交換すればいいから。特に問題はねー」

「そう考えれば余裕はあるといえよ、あるのか」

「そうでもないですよ、浜崎さん。今回の探索でバスはもう半分くらい燃料なくなっちゃいましたし。走ってれば結構、数十キロくらい簡単にいきますから」

運転席で燃料計を見続けてきた日原だからこそのわかるのだろう。

余裕があるとの言葉に、日原は首を振って見せた。

「けれど、全体的な量を考えればある程度の余裕はあるだろうね。調達もそこまで難しくはなさそうだ。ただ、問題は」

「ああ。精製とまでなれば話は別だ。ガソリンだって腐るからな、時間が経てばなくなる上に入荷もしねえ。ま、それは燃料に限った

事じゃないがね」

「長期的には考えていた方がいいが、今どうにかできるわけじゃないさそうですね。日原正則さんには燃料の管理と自動車のメンテナンスをお願いしていいですか。時間が空いているときに、その辺りの知識も教えてください」

「ああ。それは今までの仕事となんかわからねえ。息子にも一通りの事は教えたんだが――ああ、そうだ。お前、俺は盗み方まで教えたつもりはねーっていねえ」

「いま、日原君凄い勢いで走っていったけど、何かあった？」

日原昌司が逃走した。

役割分担2

「あとは……」

見ていないものを探そうとして、そこに並べられた配線や道具の部品に優は眉をひそめた。どれも初めて見るものばかりで珍しく、何に使うか想像もできない。

「整備道具です。こっちは電気関係の配線やブレーカー。こっちは水道管のパイプ。その奥にあるのが殺虫剤で。あとはその道具関係かな」

丁寧に教えてくれたのは、高木の父親——高木秀介であつた。

「で、僕は施設内のメンテナンスをすればいいのかい？」

眼鏡の奥に人のよさそうな微笑を浮かべる秀介に、優は頷いた。

「ええ、屋上に太陽光パネルがあるそうなのですが、いま電気が止まったとして満足に動くかどうかともわかりませんし。その辺りの確認もお願ひします」

「中途半端な知識でとても本職にはかないませんが、最善をつくさせてもらいます」

「昨日、息子さんにいろいろな情報をパソコンに入れてもらいました。わからないことがあったら、活用してください」

「本当に先々のことを考えてますね。わかりました、あとで目を通しておきます」

感心したように、秀介は微笑を浮かべる。

その隣——道具とは別に、こじんまりとした山がある。

救急箱が三つに、市販されている葉が置かれている。

風邪薬や胃腸薬といったCMでよく見られるものだ。

「秋峰のお母さんは薬剤師をされていたのですよね」

「ええ。元ですけれど、この子が生まれてから退職しましたので。少し現場を離れてはいますけれど」

そう言って、娘の千里の肩を抱きながら、秋峰里美は頷いた。

「それでも他の人よりは詳しいでしょう。薬の管理と、あと簡単な治療でかまいませんので、お願いできますか？」

「私でよろしければ」

「ありがとうございます。もし必要なものがあれば言ってください。出来るだけ調達するようにします——何しろ簡単には病院にいけませんからね」

「ええ。きつと、凄いことになっているのでしようね」

感染が拡大して、すでに一日が経っている。

初期段階においてどれだけの人間が運び込まれたかはわからないが、発症前に運び込まれた人間も相当な数に上るだろう。

想像するだけで、優は嫌そうな顔をする。

「ま、平時でも病院は行きたい場所じゃねえがな」

「けれど、必要だろう」

「それは否定しねえ」

優の言葉に、浜崎は頷いた。

「もし、薬が必要でしたら病院ではなく、調剤薬局を探した方がいいと思います。ある程度の薬は置いてあると思いますし——病人はいませんか」

「調剤薬局？」

浜崎の疑問の言葉に、優は沈黙——驚いたように彼を見た。

同時に、周囲の人間も啞然と口を開く。

「なあ、浜崎」

「何だ？」

「最後に病院に行ったのっていつだ？」

「唐突だな。あーてか、病院何ていったことねえぞ。つか、医者家は来てたし」

「何、このブルジョワ。もう一回、蹴ってやろうかしら」

琴子がいささか本気をこめた口調で、口を尖らせた。

Ψ Ψ Ψ

「さて。大体、分類と担当分けは終わったかな」

周囲を見渡しながら、優は一つ一つを見て回った。

日用品や身の回りのものは、高木恵子が担当する。

食料品は、二見陽菜だ。

大工仕事と農作業は宮下敬三に任せ、燃料やメンテナンス関係は日原正則が行う。

施設関係は高木秀介、薬関係は秋峰里美が担当することになった。それら在庫等の総合的な管理は、コンピュータを使う佐伯夏樹だ。「じゃ。食材関係と日用品は台所とあと倉庫を整理しておいて置こう。大工道具と農作業用具――あと施設関係の用具は二階を一部屋潰せばいいだろう。燃料はさすがに危ないから屋上だな――雨が降る前にトタンで屋根を作ればいいかな」

それぞれ置き場所を指示して、さてと振り返れば――そこには名前を呼ばれなかった面々がいる。

「待たせたというのかな」

「ああ。いつ名前を呼ばれるかと期待していたんだがな」

浜崎の言葉に、優は苦笑しながら。

「別に待たなくても忘れたわけじゃないが。その前に――」

と、優は子供を見た。

同じような期待をこめた視線で見つめるのは和馬と弓奈であり、秋峰琴子の妹である千里は――そして、双子の遠藤翔子と純子是不安げな表情を見せていた。

「とりあえず。小学生は仕事はないぞ、勉強だ」

「えーっ！　なんだよ、僕も手伝えるよ」

「手伝えるといっても、それが仕事だしな」

「大人はいつもそればかり」

不満げな口調で弓奈が口をだせば、優は苦笑せざるを得ない。

「というか、手伝うも何も、逃げることも戦うことも、それに判断だって大人に比べたら劣るだろう」

「大丈夫……私、足速い」

ああ、そうだったなと。一緒に逃げたときを思い出して、優は苦笑を深めた。

「だとしてもだ。掴まったら逃げられないだろうし」

「それはみんな同じじゃない？」

ああいえば、こういう。

優の言葉に反論する弓奈の口調は、代わらず冷静で的確だった。

「ま、個人個人の能力はともかくとして、最低限小学校レベルの知識は身につけてもらう。これは絶対だ」

と、優は断言した。

不満げな少年と少女に、まっすぐ――語りかける。

「いいか。君たちにとって見れば必要のない知識だろうが、それら

の知識が合わさって彼らのような特別な知識を得ることができるんだ。算数や国語が直接的に技術になるとは言わない。けれど、それすらも知らないものが技術を生み出せるわけがない――そして、その知識は途絶えさせては絶対にいけないものだ。何よりも」

「……ほえ」

その言葉に意味が理解できないのだろう。

和馬はほうけた様な顔をして、逆に聡明な弓奈はそれも理解しているように優を見ていた。

「何も君たちを足手まといだというわけじゃない。というよりも、君たちだって貴重な戦力なんだ。そのために、今出来ることは勉強って事になるんだろうな」

「……この人はしなくていいの？」

「そこでなんで俺を指差すんだよ！」

弓奈に指差された滝口信二が、非難の声をあげた。

「あら、ちようどいい機会じゃない。この際小学校からやりなおしてみたら？」

「か、母ちゃんまで」

「いや、あれは手遅れだから。そうなる前に勉強が必要なんだ」

「そうかー。手遅れにならないように今勉強するんだね」

滝口信二は号泣した。

Ψ Ψ Ψ

「純子さんと……」

髪を右に束ねた女性に声をかける。

「翔子です。右束ねが翔子で」

「左束ねの私が純子です」

「すまない」

「いいんです。よく間違えられますから。たまに変えて遊んでいるんですけど、お兄ちゃんとお姉ちゃんにしか気づかれた事ないんですよ」

二人して同時に笑えば、笑い顔も似ていた。
言葉通り、優にはとても判別が出来そうになかった。

兄である遠藤はどこで判別しているのだろうと、視線を向ければ。
「なんていうか、勘っすかね？」
という、とんでもなく曖昧な回答を得る。

「君たちも基本的には勉強って事になると思う。午前中は勉強して、午後は身の回りの関係の手伝いや子供たちの世話をお願いできるかな」

「ええ。わかりました——」

「任せてください」

やはり二人は同時に、頭を下げる。
その動作とタイミングまで同じだ。

「さて。で、後は残りだな」

振り返れば、力強く頷く姿がある。

「楽しそうだけど、たぶん一番危険だぞ。戦闘係だからな」
戦闘——その言葉に、全員の顔が厳しくなった。

けれど、恐怖はない。

覚悟を決めた顔だ。

「隊を二つに分ける。一つの隊が外に必要な物資の調達で、もう一つの隊が拠点の防御。これが基本的な活動になるだろう。調達は午前か午後の一回で、残りの時間は休憩。夜に交代して、見張りという

形になる」

優が説明したのは、一日の流れについてだ。

二つに隊を分けて、調達と防御に別れる。

調達隊は、午前か午後に必要な物資を調達を行うか、必要がなければ大人から技術を教えてもらったり勉強や訓練を行う。その後は休憩を挟み、夜の見張りへと移る。

防御隊は施設の防御だ。

夜の見張りの後にそのまま、夕方まで拠点に残り――見張りや防御、あるいは調達隊が残っている場合は。簡単だが休憩を取るというものだった。

「なかなかハードなスケジュールだな」

「夜の見張りといっても、昨日同様に二時間くらいさ。それに毎日毎日調達に行く必要もないだろうし、休めるときは休んでくれたらいい。その辺りについては、隊長に一任するし、臨機応変に変えてもかまわない。」

優が肩をすくめて見せた。

「無理をする必要はないさ。どれだけ続くかわからないし、どうなるかもわからない。実際やってみて改善点があれば、話して改善すればいい」

「なるほどな。隊はどう分ける？」

「こういう感じで、考えてみた。意見があつたら、いってくれ」

優が紙を出せば、紙に隊の編成が書かれていた。

丁寧な手書き文字だ。

一隊目。

隊長 今宮優。

運転担当 日原昌司。

隊員一 宮下洋平。

隊員二 滝口信二。

隊員三 二見明日香。

二隊目。

隊長 浜崎隆文。

運転担当 滝口鈴。

隊員一 遠藤剛。

隊員二 高木稔。

隊員三 秋峰琴子。

「なんだか、凄いシンプルだな」

「こんなもの、こって作ってたって仕方ないだろう。意見があったら
いってくれ」

「あら、あたしは一隊目の方がいいな」

浜崎の背後から紙をのぞき見ながら、鈴が声をあげた。

「その理由は？」

「んー。あんたといたいから？」

「却下ですっ！」

明日香が断言した。

もはや滝口自信は何も言う気がないのか、頭を抑えるだけだ。

息を切らせて否定する明日香の肩に、手が置かれる。

にまにまとポニーテールの女性、秋峰琴子が笑みを深くしながら。

「よかったね、明日香」

「そういう、琴子も良かったね。二隊目で」

「ど、ど、ど、どういう意味よ！」

「ふふ、べっつにー」

切り替えした明日香が意地悪げな笑みを浮かべれば、琴子が動揺した。

何が良かったのかわからないが、意見はなさそうだと優は判断。他にも、それを見て特段大きな意見があるようでもなかった。

「ま、全員おおむね納得してくれたようで何よりだ」

「今宮の考えたことだ。別に文句もないが——ただ、この名前はいいねえ。一隊目と二隊目ってのにセンスも何も感じねえ」

「だったらセンスのいい名前でも考えてくれよ。別に名前で決まるわけでもなし、嫌なら今宮隊と浜崎隊とでもしておくか？」

言葉に浜崎が、意地悪げな笑みを深めた。

「やっぱ、隊長じゃねえか」

Ψ Ψ Ψ

隊の編成が決まったところで、それぞれ武器を選ぶことになった。今まではそれぞれが適当に選んだものだ。

破壊力のある優の手斧はともかくとして、戦闘となれば心もとない武器も多い。

それぞれが並べられた武器を前にして、選び始めた。

「優はその手斧を使うのか？」

「ああ。今のところ、不便を感じないし——俺はこれでいい」

「私はこれを使うわ——」

秋峰琴子は自宅から持ってきたナギナタを手に入っていた。

滝口鈴は日本刀を、滝口が金属バットを手にする。

それぞれが思い思いの武器を選んだところで、ふと気づいたように宮下が声をあげた。

「ところで。この浜崎さんの自宅から持ってきた金属バットを入れ

るケースみたいなのは何ですか」
開いて、絶句。

Ψ Ψ Ψ

「これはまた、とんでもないものを持ち込んでくれたな」
猟銃三丁、実弾二百発の姿に頭痛を抑えるように優が頭をおさえた。

周囲は興奮が半分、不安が半分といったところだろう。
始めてみる銃の姿に、誰もがそれを凝視している。

「ないよりはあった方がいいと思ってな」

「武器にはなるだろうけど、使い方が難しいな」

「それでもない。中に弾をつめて」

「そういう意味じゃないさ。撃てば音がでるだろう——そうすれば、ゾンビを呼び寄せることになる。一体倒すために五体増えたら本末転倒だろう」

言葉に確かにと、周囲が納得したように頷いた。

強力な武器であることは確かだ。

だが、撃てば音が出る上に、さらに前に味方がいれば味方まで撃ちかねない。

訓練された人間が使うならばともかくとして、高校生が使うには手に余るものと優は言った。

「訓練しようにも拠点でまさか撃つわけにもいかないしね。かといって、訓練できるところがあったとしても慣れるころには弾がなくなったら意味がない」

「無駄だったか？」

「無駄ではないさ。少なくとも調達のとくに持っていけば安心はで

きる。ただ、その時持つのはゾンビが出ても、冷静に対応できるって人間に限られるけどね。いきなり後ろから襲われて、前の人間をズドンってのは勘弁してもらいたいもんだ」

「お前は無理だな」

「あ、遠藤。何で俺が無理なんだよ」

「ゾンビひこうとしてバックにギア入れた奴が何言ってるんだ」

「お前まだ、それ覚えてんのかよ」

「忘れるわけねーっ！」

口論を始めた滝口と遠藤に、確かに冷静な対応は難しいもんだと浜崎は頷いた。

「そうすると、限られるな。今宮か俺か、あとは秋峰——」

「私は無理よ」

琴子は小さく首を振った。

「家でのこと覚えているでしょ。冷静に見えた？」

「いや、そりゃああの時は仕方がないだろう」

「その仕方がないってのが出来ないからこそ、難しいって話なんですよ」

琴子の言葉に、それまで自信があつたのであろう者たちも顔を見合わせて、俯いた。

自分のことは自分が良く知っている。

自分の今までの行動を考えれば、自信を持って手を上げるということができなかった。

「あとは滝口——ああ、滝口鈴さんかな」

「これだけいて、三人か」

「三人いるだけでも十分だと思うけれどね。とりあえず、俺と浜崎

で一丁ずつ持つようにして。あとは予備で一丁って形でいいんじゃないかな。念のため通常は貸金庫に入れておいて、使う必要があったら取り出すようにすればいい」

「それが一番安全そうだ」

「じゃ、残った他の武器も合わせて、金庫に入れておいてくれるか」
頷きとともに、浜崎が指示を出して武器を運び始めた。

Ψ Ψ Ψ

数十分後。

「今宮——ちよっと着てくれ」

五階の支店長室にて、整理をしていた優を浜崎が呼んだ。
焦っているのか、階段を走ってきたためか、息が切れている。

「何かあったのか？」

「ああ。ちよっとした——ちよっとっていうか、かなり」

言葉に、優の視線が厳しくなる。

貸金庫へと武器を運んでいたはずの浜崎が、息を切らせて優を呼びつける。

その理由を想像して。

「まさか、暴発したのか？」

「いや、猟銃には弾もこめてねえよ。そんな事させないし、する馬鹿もいねえ。武器を入れようと貸金庫の中身をひっくり返したんだがな——問題があった」

「何が。いや、誰か怪我をしたのか？」

「怪我人はいない。とりあえず、きてくれ」

促されるままに浜崎に続き、優は金庫室へと向かう。

分厚い鋼鉄製の扉を開けば、金庫室の奥——貸金庫が置かれたフロアに人が集まっていた。

戦闘隊の面々だ。

それが床の一点を凝視しながら囲むように立っている。
人ごみをかき分けて、中を覗く。

「なるほど。確かにこれは――問題だな」

優の緊張した声が、室内に響いた。

狂犬が二人

夕暮れの太陽が西へと沈んでいる。

「郵便屋さん。おっはいんなさい、御首が一枚落ちました。拾ってあげましょ、一枚、二枚、三枚、四枚……」

物騒な野太い声とともに振るわれるのは二刀の白刃のきらめきだ。それが夕暮れの太陽の光に反射するたびに、振るわれた刃が近づくゾンビの群れに振るわれる。

一枚二枚と、数えるたびにゾンビの首が飛び落ち、大地に血痕を作った。

「だー。うっせえなあ、山崎。いちいちうたわねーとお前はころせねーのかよ。おちおちエロ本も読めやしねえ」

苛立ち紛れに叫んだ声は、山崎と呼ばれる丸坊主の男の後方――建物の前だ。

古ぼけたコンクリート造りのビルの前で、ビーチパラソルにリクライニングソファの上で寝転びながら本を読んでいた男が非難の声をあげた。

丸いサングラスをかけた細身の男だった。

大柄な男とは対照的に小さな体をソファに寝かせながら、苛立たしげに睨み付ける。

しかし、山崎は我関せずといった様子でただただ機械的に白刃を振りぬき、群がるゾンビを次々に仕留めていた。

一撃だ。

放たれる刃が全て正確にゾンビの首に叩き込まれ、繰り返される

攻撃の前に――大量にいたゾンビが次々と倒れ付していく。

それは対照的な二人だった。

沈黙と雄弁。

静と動。

服装も大柄な男が灰色のロングコートに身を包めば、なぜかサングラスの男は半そでのアロハシャツだった。さすがに寒いのかその上から、マフラーを巻いているが。

もし、そんな彼らに共通点があるとすれば目であろうか。

そのどちらも獲物を駆る肉食獣の――獣の目。

もっともライオンやトラのように大型の獣を方物とさせる丸坊主の男とは違い、サングラスの奥に隠れた男の目はハイエナかキツネを連想させたが。

「あーしかし、ついてねえ。何が帰ってきたらいいポスト用意してください。ポストも何も組自体が消えてんじゃね。つか、そんな小さなことよりも、だ。一番は楽しみにしてた風俗に行ったらリアルに食われそうになるってことだ。厄日か今日は」

苛立たしげに声を上げながら、サングラスの男柴村長治は脇に置かれていたビール瓶を一気におおった。

「期待に胸――ああ、膨らんでんのは胸じゃねーけど。どうするよ？」

「十五枚――切ろうか？ 十六枚……」

「何でお前の選択肢は、切るか殺すかしかねーんだ。だから、ずっと用心棒のままなんだよ。てか、組長守れなかった時点でそれすら失格だろ。しかも理由が、ゾンビ殺すのに忙しいって、あほか」

もう一口、ビールをあおった。

もはや返答もなく、ただただゾンビを仕留めていく様子に柴村も

声をかけることを諦め、ビール瓶を脇に置き、手にした雑誌を再び広げ始めた。

「しかし、時代も変わったなあ。いまじゃメイドさんとかあるんだもんなあ」

その風俗情報誌ににまにまとした笑みを浮かべながら、脇に手を入れて。

一撃。

銃声が街に響いた。

それは白刃の脇を抜けて現れたゾンビの頭部を破壊。

「山崎ー。漏れてんぞー」

何事もなかったかのように、次のページをめくる。

「増えてきた」

「増えてきたじゃねー。抜けた奴もきりゃーいーだろ。何でそこから絶対動きませんってしせーなんだ」

弾く、弾く、弾く。

次々と放たれるのは、柴村が手にした大型拳銃だ。

デザートイーグルと呼ばれる二キロ近い鉄の塊を、片手でやすやすと撃ち続ける。

それは一撃の下にゾンビの頭部を破壊し、完全に沈黙させてなおあまりある破壊力を秘めていた。

ゾンビの数は次第に増して、白刃の脇から次々にゾンビが柴村を目指した。

だが、それは柴村へと到達する前に眉間を撃ち抜かれ、大地に血を撒き散らせた。

相変わらず片手は雑誌のページをめくったままだ。けれど。

カチーやがて放たれた銃弾が十を超えれば、スライドがひかれ

たままに銃が止まった。

すでにゾンビの群れはその数を大きく減らしている。

白刃から漏れ出たゾンビの群れは、次々に大地には倒れ付していた。

全てではない。

凶器の銃から漏れ出たゾンビが一体。

その理由を知ることなく、ただただ淡々と獲物を駆るために目指していた。

「あり、ありり」

ようやく雑誌から目を離れた柴村は、手にした銃を見て首をかしげる。

「山崎―。山崎―。弾切れたよ？」

「ない」

「ないじゃねー。予備くらい持ってろ、はげ。ちょっと待て、いま弾入れるから」

近づくゾンビに声をかけて、脇の机をあさる。

予備の弾倉を手に入れば、ゾンビはすぐ脇にいる。

「弾入れてる最中だから、ちょい待ってー。って、言ったよね、俺？」

そのゾンビに向けて、ビール瓶が振り落とされた。

半分近く残っていたビールが割れて破片を飛び散らせる。

頭部を大きく陥没させたゾンビが倒れる―そこに。

「なんで、わざわざ十秒が待てないの。もう一度言うよー。弾を抜いて、入れて、装填して撃つ。十秒でしょ、まちゃーいーじゃん。待ってって言われたら、待てよ」

倒れたゾンビの頭を踏みつける。

一度、二度、三度――そのたびに、ぴくりと震えていたゾンビの体が痙攣した。

攻撃はやまない。

「おかげでまだ半分残ってたビールが駄目になったよね。おい、弁償だよ、いますぐ二十万もってこい。それか命で償うか、おい。どうすんの、ねえ、聞いてる？」

頭が完全に形作らなくなってなお、柴村は頭に足を振り下ろし続けた。

「無視すんなって。ほら土下座して謝ったら、許してやらなくもねーし。ああ、何だもう土下座してんか、おい。じゃ、謝れよ、なあ、謝って三十万包んで来いって」

「もう死んでる」

背後から言葉がかかった。

そこで足を止めて、柴村はゆっくりと振り返った。

「あー。そりゃ謝れねーよなあ。ごめんなー。釣りはいいからよお」

そして、足先でそれを踏みにじりながら、男は笑った。

楽しそうに。

楽しそうに。

「山崎い。弾そろそろ切れそうなんだけど、確か組長預けてたよね。」

武器」

「隠して、銀行に」

「んじゃ、今から取りに行くべかあ。ついでに金ももらってよお、女がいりゃーなおい。銀行員とかのこってねーかなあ」

「駄目だ」

「あ。何でよ？」

「もう五時を過ぎている。八時には寝ないと」

「子供か、お前。つか、いまどき八時に寝る子供なんぞ赤ん坊くらいしかいねーっ」

「……」

「ああ。わかった、わかったよ。暗い夜道に一人はおそろしーからなあ。怖いお兄さんとか来たらちびっちまう。明日でいい、明日でいい」

手をひらひらと振りながら、柴村は銃をしまい、歩き出した。

獣は歩き出す。

ゾンビの血溜りの中を踏みしめながら――大高都市銀行を目指して。

Ψ Ψ Ψ

囲まれた中央に、落ちて、散らばるものがある。

壊れかけた木箱、砕けた金色の延べ棒に似た棒細工。

そして、鉛色の塊。

誰もそれを手にすることもなく、ただ遠まわしに見ているだけだ。囲みを割って、優が中央に現れれば、どこか安堵する空気が漏れ出た。

慎重に、屈み込んでそれを覗きながら、背後にいる浜崎に問うた。

「これも家から？」

「まさか、多少余裕はあるが、普通の家だ。そんなつながら云々は聞いた覚えもない。ま、あっても不思議ではないがな」

「冗談だ……これは、どこに？」

「あっちだ、あの大型貸し金庫の左最上段。引き出したは良いが、箱が重みに耐えれず、途中で中をぶちまけちまったって次第だ」

「で、その中身が問題だったというわけか。なるほど、これは問題だな」

苦々しげに呟く優の前で、箱の中身が床に散らばっている。

底が抜けたであろう、木箱の木片。

手にした金塊らしきものは、手にすれば軽く、衝撃で割れて、中が見えてしまっている。

中は金ではなく、手にすれば非常に軽かった。

ダミーかと口の中で呟きながら、散らばる物体を見た。

拳銃だ。

小型のものから大型のものまで、自動式のものからリボルバータイプのものまで。

種類は様々あったが、それは一重に拳銃と呼ばれている。

それが五丁余り。

無造作に散らばる様子は、まるで子供が遊びを追えて散らかしているようでもあった。

もっとも、その構造は精密で、重厚感はとてもおもちゃではあり得ないものだった。

一番小型であったリボルバーの拳銃を手に入れば、それは生々しい現実の重さを持って優の手におさまる。

「本物か？」

「さあ、本物を見たこともなければ、触ったこともないのでわからない。精密なモデルガンなのかもしれないが、わざわざ二重底の底に隠して、ダミーの金塊まで入れておく必要性がわからない。弾は入っていないようだけどね」

そう言って、映画の見よう見まねでリボルバーの弾倉を開いた優は中身をみて、そこに何も装填されていないことに小さく息を吐いた。

「弾なしで、わざわざ銀行に？」

「その理由まで俺がわかるはずがない。念のため、この貸金庫を借りていた人間が他にも借りていないかどうか、調べられるか？」

「佐伯さんに言って顧客名簿を出してもらいます」

「頼む——出来れば、その預けている企業とかも一緒に調べておいてくれ。まだインターネットも一部は使えるはずだ。それとこの件は内密にな」

「わかった、宮下」

「ああ」

高木と宮下が顔を合わせて頷くと、急ぎ室内から走り去った。

足音が遠ざかっていく。

「厄介なものが出てきたな」

「とびつきり厄介だ。まだゾンビの相手をしていた方がましかもしれない」

優の苦い顔に、浜崎も肩を落としながらため息を吐いた。

二人はその意味を理解しているのだろう。

だが、その周囲の人間たちは不思議そうにしていた。

確かに拳銃という非現実的なものが存在することには驚いた。

けれど、非現実的なものというのであれば浜崎が持ち込んだ猟銃も同じだ。

扱いが大きく変わるはずもないし、むしろ武器が増えたと、滝口は素直に喜んで、母親の鈴に呆れられていた。

彼女もまたその意味を理解している一人であったからだ。

「それを預けた奴は——取り返しにくるだろうね、きっと」

「生きていれば、近いうちに必ず」

言葉に、その存在の意味を理解して——誰もが顔を青褪めさせた。

Ψ Ψ Ψ

「丸目玉建設株式会社——ね」

高木が印刷した紙に視線を走らせながら、優は聞いたことがないなと首を振った。

それは大高市に本社を構える比較的小さな企業だ。

ホームページを印刷した内容は、どこにでもある企業のように、主に大高市を中心にして簡単な工事や下請けを行っているらしい。

『あなたの暮らしと安全を築く 丸目玉建設』

ポップな表記でそう書かれても、その預けたものを目にした、いまではどんな冗談だと苦笑せざるを得ない。

丸目玉建設名義の貸金庫はもう一つあった。

浜崎に確認させれば、そちらにはしっかりと弾が入っていた。

マグナム用の弾が百発、自動式用の弾が三百発、そして小型のリボルバーの弾が百発。

合計五百発もの弾丸は、同じように巧妙に隠し底に存在しており、知らなければあけることもなかっただろう。

預けたときにちゃんと確認しろと今は亡き支店長に愚痴をこぼしたくもなる。

もしくは、銀行員に手引きをした人間がいたのかもしれないが、今となっては詮索をしたところで無駄なことだ。

マグナム製の拳銃が一丁、自動式が三丁、小型のリボルバーが一丁。

それが机の上に並べられ、パックに入った弾丸が横に置かれている。

「銃一丁につき、弾が百発ってのが相場なのかね」

「八十発入りで、二十発はサービスだそうだ」

冗談めかして肩をすくめる、浜崎に優も冗談で応じた。

少しくらい緊張を解かなければ、おかしくなりそうだった。

「さて。問題は――これを預けた連中は生きているか、そしていつ取りにくるか、ね。生きてると思うかい？」

「狂人病自体は誰にでも起こりうるからだからね。運よく全員が発症してくれたというのならば、幸いではある。ただ、全員が同時に発症するというのは考えにくいし、それで全員が殺されたというのも望み薄だと思う」

「誰かしら知っている人間が生き残れば、取りにくるだろうな。問題は人数と装備だが」

「今のうちに逃げるのが賢明かもしれないねえ」

胸ポケットから煙草を取り出しながら、滝口鈴が口に咥えた。ライターで火をつける。

紫煙を吐き出す彼女に、滝口が口を尖らせた。

「せっかく拠点を作ったのに、何もせずにもう逃げるのかよ」

「まだ準備してないだけましさ。探せば、他にいいところがあるかもしれないし。ここにいるよりは安全性」

「戦うってのは駄目なんです？」

そう言ったのは、遠藤だ。

「こっちには猟銃もあるし、この武器だってある。人数だっているし。本職だろうがなんだろうが、簡単にはまけねーすよ？」

「相手はこの倍の武器を持ってるかも知れねーし、倍の人数がいるかもしれないぞ？」

浜崎が言えば、遠藤は言葉に詰まった。

鈴が大きいため息とともに大きな紫煙を吐き出した。

いまだ逃げるということに不満げな息子たちを説得するように。

「それに簡単に勝つて言うけどね、今回はゾンビじゃない。人間なんだよ、あんたたちはそれを理解してんのかい、人間に勝つて言うことがどういうことを、さ。殴って終わりじゃないんだ。負けてごめんじゃすまないんだよ？」

その言葉には深い真実味が帯びている。

「それに相手がただのチンピラ崩れだったらまだいい。ただ、慣れた奴は厄介だよ」

「慣れた奴？」

「たまにいるのさ。一般の世界から摘み出されたわけじゃなく、一般の世界では生きられない人の皮を被った獣がね」

何かを思い出したように――一瞬だけ眉根を上げると、鈴は煙草を投げ捨てて足でもみ消した。

「ま、決めるのはあんたさ。あたしとしては逃げるのを勧めするけどね」

言葉に、優は頭をかいた。

「それが最善だろうね」

答える。

「敵の人数が不明の上に、いつ襲撃を受けるかわからない。そんな状況では満足に調達もできない。引越しの準備を進めよう、明日の朝一で出発だ。いいか」

「ああ。すぐに荷物をまとめて、運び込めるようにして置こう。少々もったいなくはあるが」

「また見つければいい。何も奪われなかったというだけでも、ましさ。準備をする前にわかったただけ良かったという事にしておこう」

けれど。

運命は——残酷で、皮肉で、そして血に塗れている。

「なあ山崎い。お前、おかしいとかいわれたことね？」

「よくある」

「だよなあ。八時に寝るのはまあいい。寝る子は育つ——なんて、起きるのが二時なんだよ、二時。丑三つ時じゃねーか。しかもご丁寧に俺まで起こしやがって」

「明日と言った」

「明日にも限度があんだよ。このままのペースだと四時には銀行つくぞ。つか、その時間に開店してんの、てか開いてなくね？」

まだ暗い夜道で、二人は不毛な会話を繰り返した。

銀行での戦い 1

深夜四時。

それを最初に発見したのは、見張りについていた高木だ。駐車場の監視カメラが近づく影を見つけた。

二人だ。

現在、見張りは一階の警備員室で行われていた。

人数が増えたため、二階の部屋が埋まったためだ。

直接的には見張ることが出来ないが、監視カメラが駐車場と玄関の二箇所から外の様子を映し出しているため、ある程度の様子はわかる。

そのカメラの一つが、駐車場に入る人影を捉えていた。

一人はアロハシャツを着た小さな男だ。

この寒いのに半袖のアロハシャツに丸いサングラス——そして赤色のマフラー。

どんな考えで、その服装の結論に至ったのか想像も出来ない。

ただへらへらと軽薄な笑みを浮かべながら、隣の大男に話しかけている。

そう考えれば、隣の男はまだ全うな服装をしている。

灰色のロングコートに、同色の長ズボン。

革靴に、丸坊主頭だ。

ただ、少なくとも街で見かければ声をかけたくはない。

いや、小さな男の方も別の意味で声をかけるのはためらうであろうが、少なくとも大男の方にはかけたくない、かけられない。

「……っ！」

慌てたように、高木は手元の内線電話を操作した。

一斉とかかれた短縮ボタンを押せば、銀行内の内線電話が一斉に鳴り響く。

P r r r――。

「お客さんが二名でお越しだ」

Ψ Ψ Ψ

「あいてるかなーって心配したけどよお。なんでえ、賢い奴がいるもんだなあ――捨てたもんじゃねえ、世の中捨てたもんじゃねー。捨てる神ありゃ、拾う神ありってやつかあ」

「神は死んだ」

「はなから信じてない奴が何言ってるんだ、ばーか」

つまらなそうに呟きながら、駐車場に堂々と柴村は足を踏み入れた。

駐車場には整理され、バスが一台とトラックが一台。

クレーンつきのトラックが一台と、ワゴン車が二台止められている。

「……なぜ、中に誰かいると思う」

「バスがこんな時間に銀行にとまるかよ、普通。それにゾンビどもが大量に入り込めないように、裏口を塞ぐようにとめてやがるし」

「閉じこめられると厄介だ」

「はん、火でもつけりゃーでてくんだろ。それより――」

柴村の腕が掻き消えて、きらめいた。

瞬間、彼の腕にはナイフがあり、それがバスのタイヤに深々と刺さっている。

抜き放てば空気の抜ける音とともに、バスの左前輪が空気を失い

車体を下げた。

「にがさねー事のほうが重要だ」

手の中でナイフをいじりながら、次に近づくのは大型のトラックだ。

小さく鼻歌混じりに、ナイフを振り上げようとして。

「そのトラックに指一本触れたら、殺すわよ？」

声がした。

サングラス越しに、声の方へと向き直り、柴村は唇の端を上げる。
「おう、山崎い、今日はラッキーデーだ。もう出てきてくれた。その上、女までいんぜ？」

Ψ Ψ Ψ

その男は異質であった。

服装、言動――そのどれもが異質であったが、一番注目するべきはその瞳だ。

サングラスの奥に光る瞳が、その楽しげな表情とは裏腹に、一切笑っていない。

単純な怖さだけで言うのであれば、その背後にいる丸坊主の大男の方が恐ろしいであろう。肉食獣を思わせる容貌も、盛り上がった筋肉も十分すぎるほどに威圧的だ。

だが、それすらも霞ませる何かが、目の前の小柄な男から発せられていた。

裏口からは、今宮と浜崎、そして滝口鈴の三人だけが姿を見せている。

残りは中だ。

すぐに逃げられるよう正面の扉付近で待機しており、合図とともに脱出を開始する予定だ。

それに琴子は不満を浮かべたが、置いてきて正解であったと浜崎は確信する。

喧嘩慣れしているはずの浜崎と滝口鈴ですら、たった二人の男を前にして飲み込まれようとしている。もしこれが普通であれば、戦うどころか満足に動けることすら出来ないだろう。

「これが本職との差ってことか」

「こんなのがごろごろいたら、日本終わってるわ。さっきの想定の一——それよりももっと悪い、最悪の部類よ」

「それは、ついてない」

冗談めかして答えた浜崎の言葉が、緊張を伴って掻き消えた。

「まーそんな怯えなさんなって。ほら、俺はやさしいよ？ 今だっただけ預けてた物を引き取りにきたただけだ。まあ、そこに酒とか女がついてくりゃ、もっと優しくなるけどなあ？」

「いきなりタイヤをパンクさせて、よく言う。最初から逃がすつもりもないのだろう」

緊張感のない声が聞こえ、それに対応したのは優だ。

この殺気立つ空気の中で、何事もなかったように返答している。

その様子に面白そうに、柴村の眉があがった。

「丸目玉建設だったか——預けた物というのは、それで間違いないかな」

「なんだ、見ちまったのか。なら、話ははえー。俺が誰かってのもわかるな。組で若頭やってる柴村長治ってもんだ。こっちは山崎……おとなしく荷物渡して、酒と女をよこせば見逃してやる」

「組という割には、二人だけとは寂しいもんだ」

「あ？」

「二人しかいないんだろう。残りはゾンビの腹の中か？」

笑った。

優の前で柴村が笑う。

「二人しかいねえって、二人で十分なんだよ。けど、良くわかったな、他に仲間がいねえって」

「様子見が目的なら、いきなりタイヤを切りつけるわけもない。かといって、襲うつもりなら、もっと人数を用意するだろ」

「他は表を張ってるとは思わなかったのか」

「だとしても二人というには陽動には少なすぎる。ま、その可能性も考えたが、それも今の言葉でなくなった。教えてくれて、ありがとう」

「はっ、騙しされたってわけか。可愛げねー餓鬼だ。けどな、立場はかわんねえぞ」

「立場ね——それはどうかな」

優が手を上げる。

夜が明け行く静かな街に、一発の銃声が響いた。

Ψ Ψ Ψ

「酒も仲間も渡すつもりはない。預けた物も渡さない、さっさとお引取り願おう」

睨み付ける優を前にして、柴村は銀行を見上げていた。

正確には、銃声の方だ。

「山崎い、山崎い。組長って、レミントン何て猟銃をもってたっけ？」

「記憶にない」

二階の一室、そこから延びる二丁の猟銃。

それらを向けられながら、柴村はのんびりと山崎に問うた。
その表情に、動揺はない。

ただ二丁の猟銃を向けられながら、首をかしげて見ている。

ようやく納得したように頷くと、優のほうへ再び視線を向けた。

「あー。なに、俺を撃つつもりなわけか？」

「撃ちたくはない。おとなしく帰ってくれるなら、それに越したことはないさ」

「最近の餓鬼はずいぶん喧嘩っぱやいなあ。考えなおした方がいいぜ」

「大人しく見逃してくれるというなら考えるさ」

「ああ、見逃してやるってんだろ。女以外は――」

「だから、それが論外だ。こちらにも譲れないものはある。それが駄目だというのなら」

面倒だといわんばかりに、優は小さくため息を吐いた。

「戦うしかないのだろうか？」

空気が変わった。

乾いた笑いを吐き出すと、柴村がサングラスをゆっくりと持ち上げる。

「で、俺を殺せるのかよ」

二階で、猟銃を構える高木と滝口に向けて、手を広げながら笑う。

「撃ちてえって言うなら撃てよ。ほら、逃げも隠れもしない。けどよ、人を殺したこともない、餓鬼がなめてんじゃねえぞ」

口調が変わった。

それまでの軽薄さも一切ない、鋭い刃のような声だ。

「さあ、やれるならやってみろよ？」

その言葉に、猟銃を構えていた二人に動揺が走った。

下がる。

二階にいたにもかかわらず、猟銃を持ったままに二人は一步下がった。

「それでよく戦うなんざいえ——」

その瞬間——柴村を手斧が襲った。

銀行での戦い2

それは容赦のない一撃だ。

頭があつた場所を手斧が通過する、咄嗟に頭を下げることでそれを交わした柴村は口角をあげた。

「おい、よけなきゃ死んでたぞ？」

「殺すつもりだったからな」

「おもしれえ」

「面白いさ。出来れば、お引取りを願いたかった」

柴村が鼻で笑う。

「たかが女のために命を捨てる。フェミニストかてめえ」

「面倒な役目を押し付けられてね」

振るわれる二つの手斧を、後ろに下がりながら柴村は避けていく。

その表情に浮かぶのは余裕の笑みだ。

「けどよお。こうなっちまったら、虎の子の猟銃もつかえねー。預け物も同様だ——残念だったな？」

「最初から使うつもりはなかったさ。君の言うとおりだ、簡単に人なんて殺せるわけがないし——こんな汚れ役は一人でいいだろう」

「ほんと、おもしれえなあ」

刃がきらめいた。

ひらめいた手斧が、初めて柴村の手にしたナイフによって弾かれる。

下がりながら、ゆっくりと丸いサングラスをあげて、獣の目が細められた。

「そういうセキニンとか、ヤクメとか俺いっちばんきれーだわ。昔を思い出しちまう。だからよお、お前は――セキニンをもって、俺が殺してやるよ」
「やってみろ」

Ψ Ψ Ψ

当初、考えられたのは荷物を諦めて表から逃げることだった。だが、その時点では表にも見張りがいる可能性があった。そこで優が二人に話しかけ、安全を確認後、銃声を合図にして逃げる作戦を取った。

今頃は表の玄関が開き、それぞれ逃げ出していることだろう。

もちろん、対峙する優には危険が伴ったが、逃げるくらいなら出ると答えた。

それに無理やりついてきたのは、浜崎と鈴だ。

それが――飲まれちまうとはなさけねえ話だ。

浜崎は唇を噛んだ。

彼らに話しかけた時点で、すでに逃げると言う選択肢は消えてしまっている。

というより、おそらくは逃げることはできないだろう。

万が一逃げられたとしても、誰かしら掴まってしまふ。

そう思わせる雰囲気、二人の男からは発せられていた。

残された選択は仲間が安全な場所に逃げのびるまで、戦うしか方法がない。

どれだけの時間稼ぎが出来るかわからないが。

すでに優は、柴村と呼ばれた男と戦いを繰り広げている。

その動きに容赦と言うものはない。

喧嘩ではない、命を懸けた戦いだ。

自分にもそれが出来るだろうか。

山崎と呼ばれた目の前の丸坊主男は、柴村が襲われても一向に動かなかった。

ただ浜崎と鈴の様子を見ている――いや、その手が背後、灰色のロングコートに伸びた。

長ドスだ。

日本刀にも似た形状の分厚い鉄の刃が、引き抜かれていく。

それが二本。

「ゆーびんやさん。おはいんなさい」

そして、歌いだす。

のんびりとした、朗々とした声で。

「お首が一枚落ちました――拾ってあげましょう?」

Ψ Ψ Ψ

「武器何か使ったことがねーんだがな」

浜崎は苦笑しながら、手にした鉄パイプを小さく振った。

浜崎の力は他を圧倒している。

優ですら力だけならば、浜崎に負けるだろう。

一発で大人を吹き飛ばし、車ですらも持ち上げたことがある。

そんな浜崎が武器を手に入れば、それはもはや喧嘩の領域を超えてしまっている。

武器を使わないとかそんな男らしい理由ではなく、物理的な理由から使わなかった武器を、いま浜崎は握り締めた。

「何年ぶりだろうね」

苦笑しながら、鈴がゆっくりと日本刀を抜いた。

手入れもしていない、その刀はさび付いた様子もなくすんなりと鞘から抜くことが出来た。

「滝口さん。逃げていいですよ、ここは私が何とかします」

「冗談。子供を戦わせて、それで逃げちゃ女が廃る。それにあんた一人じゃ、あれは無理だろう。わかってると思うけど、もう喧嘩じゃないよ」

大きく息を吐いた。

できるだろうかと言う問いは今でも頭に残っている。

簡単に割り切れるものでもない。

けれど、脳裏に浮かぶのは仲間たちの姿だ。

わずか一日余りで、その数はずいぶんと減った。

その時と同じ後悔を――したくない。

走り出した浜崎に向けて、山崎の長ドスが振るわれた。

それは正確に銀線を残して加速、首へと振られたそれを横から鈴が日本刀で捌く。

弾かれたドスが浜崎の脇を駆け抜けぬけて、髪を散らした。

かまわず、上段から鉄パイプを振りぬいた。

避けられた。

体を横にして避けられた鉄パイプは、アスファルトの大地に叩きつけられ、轟音とともに衝撃が起こった。

大地に亀裂が走り、山崎がほうと小さく息を吐く。

そこに振るわれる鈴の刃を、長ドスで受け止めながら――右手を一線。

逆方向から横なぎに振るわれた刃に、鈴は後ろに飛んで避けた。
豊かな二つの胸元に線が走り、羽織ったジャンパーが横に裂かれた。

「滝口さん！」

「かすり傷さ——前！」

浜崎の言葉に、鈴が舌打ちが重なる。

それは一瞬だけの視線の交錯。けれど、戻した瞬間には既に山崎は浜崎の前にいて。

はええっ。

咄嗟に鉄パイプをあげたのは幸運だったのだろう。

振りぬかれた刃が鉄パイプに直撃、甲高い嘶きをあげた。

両腕で握り締められた鉄パイプと、山崎の片手によって振り下ろされた刃が重なり合って金属音をかき鳴らす。力で負けているわけではない、ただその振り下ろされた衝撃と勢いは、浜崎の力をもつてしても容易にとめることは出来ず、受けた鉄パイプが衝撃に負けて、食い込んだ刃が肩を切り裂く。

完全に切り落とされなかったのは、僥倖であっただろう。

歯を噛み締める、そこに——右手に持った長ドスが振るわれる。

それは背後から突き出された、鈴の日本刀を正確に止めており。

「後ろに目でもついてんのかい」

鈴を呆れさせた。

二人は全力で、戦っている。

もはや加減をするとか、殺す覚悟がないとかそんな次元の問題ではない。

殺さなければ殺されると本能が理解する。

だからこそ、浜崎は理解できた。

勝てない。

この目の前の化け物と、自らの差に。

浜崎隆文は生まれて初めて、恐怖と名の言う感情を抱いた。

Ψ Ψ Ψ

「あっちは雲行きが怪しいぜ？」

「そうか。余所見をしている余裕はないんでね」

「よく言うー」

繰り出される攻撃を左右に避けながら、柴村は鼻で笑った。

優の持つ手斧は長さ三十センチほどの小さなものだ。

長さだけで言うのであれば、柴村の持つナイフと変わりがない。

だが、その短さを利用して繰り出される攻撃に柴村は鼻を鳴らした。

一撃を避ければ、次に繰り出される片方の手斧が飛来する。

それを避ければ、すでにもう一方の腕は体制を整えている。

短い斧の特徴を最大限に利用した攻撃はやむことを知らず、次第に柴村は後ろへと下がっていった。

動揺を誘おうとした言葉もあっさりとかわされ、迷いなく攻撃をする様子に。

めんどくせえと小さく呟いた。

自分が今何をすべきか、理解している。

それは仲間の心配ではなく、一刻も早く彼を倒し、仲間の下へ駆けつけることだ。

しかし、それは例えわかっていたとしても、なかなか出来ることではない。

仲間の危機を無視しても、冷静にいられる、その度胸は——餓鬼にしちゃたいしたもんだけどよお——でも、やっぱまだ餓鬼だな。

時間をかけられない彼とは違い、柴村には時間があった。

二対一だろうがなんだろうが、山崎を殺せる人間がいるわけもない。

だから、柴村は待てばいい。

それだけだ——時間が立てば立つほどに、それは柴村の有利となる。

あちらの決着がつけば、あとは囲めばいい。

他の連中には逃げられたが、車はこちらにある。

探せばいいし、もし見つからなかったらとすればそれはそれでかまわない。

わざわざ戦闘一つに命をかける必要性もないし、女も食料もここにしかないわけではない。

なければ、また探せばいい。

ま、餓鬼にゃ理解できねーだろうがね。

だから、柴村は適度に攻撃を仕掛ける振りをして、優の攻撃を避ける事に集中する。

無理はしない。

ただただ単純に左右に避けながら、くると、くると。

柴村はその表情に笑みを張り付けながら、遊びを再開した。

Ψ Ψ Ψ

「はああああああっ！」

叫びとともに振りぬかれたナギナタが、アスファルトに叩きつけられた。

切り裂いたアスファルトを抜き出しながら、数秒前までそこにいた山崎は既に後ろに下がって、新たな乱入者に視線を向けている。

「あ、秋峰——何でここにきた」

「何でも何も。みんなもう逃げたわ、あとは……こっただけ」

その堂々たる声に、浜崎は呆然としながら——ナギナタを振るった少女、秋峰琴子の背を見ていた。

「な、何で逃げなかった」

「それはあんた達と一緒によ」

「一緒——だと」

「この私が仲間を見捨てて大人しく逃げられると思うの？　こんな時に女も男も関係ないわ」

「ばか。関係あるだろがっ！　掴まったら何されるか」

「言われなくてもわかるわよ——でも」

ポニーテールを揺らして、琴子は答えた。

でもねと小さく呟いて、浜崎に視線を送る。

「助けられずに、後悔するのも嫌だし、こんな奴らに負けたって思いうのも嫌。せつかく見つけた物資を奪われるのも嫌だし、何より何より——浜崎に死なれるのももっと嫌」

強い言葉に、浜崎は言葉を失った。

薄明かり。わずかばかりの街灯と月の明かりが、まっすぐな瞳を映し出している。

ナギナタを正面に構え、強い瞳に浮かぶのは、負けないと言う意志。

胸に浮かんだ思いが、一瞬にして振り払われた気がした。

怖いとか、勝てないとか、死ぬかもしれないとか、そんな感情が泡のように消えて。

残ったのは――。

「秋峰」

「なによ」

「何だ、その男前は」

「全然、褒め言葉になってないんだけれど」

「最大級の褒め言葉さ。負けられんな、俺も」

呟きながら、浜崎は琴子の隣に並んだ。

確かに、殺し合いには勝てそうもない。

踏んできた場数が違うのだ。

けれど。

「それがどうした？」

場数が違う、技術が違う、強さが違う。

そんな事今までも何度も繰り返してきた。

だが、浜崎にはそれらを全て圧倒する力がある。負けていると言うのならば、その上からさらなる力を持って叩き潰せばいい。

勝つとか守るとか、そんな事は考えず、ただただ力任せに。

ゆっくりと、ゆっくりと浜崎の口元に笑みが浮かんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5740v/>

サイハテの砦

2011年11月30日21時53分発行